

美沢川流域の遺跡群 V

—— 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

昭和 56 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

美沢川流域の遺跡群 V

— 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和 56 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

序

本書は、昭和56年度、当センターが北海道開発局札幌開発建設部の委託を受けて実施した、新千歳空港建設用地内の埋蔵文化財調査報告書であります。

新千歳空港は、本道の交通・運輸の新しい拠点として各界の期待を担って、現空港の南東に隣接して建設が進められているところであります。ところが、その用地内には、美沢川の兩岸域を中心として総面積17haにも及ぶ埋蔵文化財包蔵地が分布しており、これの発掘調査は昭和51年に北海道教育委員会が着手して以来、本年度で6年目にあたります。55年度までの調査では、周堤墓群の遺物や、重要文化財の指定を受けた「動物形土製品」等、数々の貴重な新発見資料と155万点にも及ぶ膨大な出土品が得られており、その成果については、すでに報告書等により周知されているところであります。

本年度は、美沢川左岸の遺跡群のなかでは、最も下流に位置する美々8遺跡の一部を発掘調査し、道央地区では稀薄だった縄文時代の良好な資料を得ることができました。また、わずかながら、中～近世の資料も得られ、いわゆるユウフツ越に関係あるものと思われます。さらに、人との関わりは不明であります。およそ2,000年前に残されたイヌ科と思われる獣の足あとが検出され、当時の自然環境を考える重要な手懸りとなっています。これらの成果が、研究者はもとより、広く一般の人びとにも活用され、文化財保護思想の普及啓蒙に役立つことを願うものであります。

この調査の実施にあたって、文化庁、北海道教育委員会、北海道開拓記念館のご指導ならびに北海道開発局、同札幌開発建設部のご理解をいただいたことを記して謝意を表しますとともに、千歳市教育委員会をはじめご協力をいただいた関係各位にお礼申しあげる次第であります。

昭和57年3月

財団法人北海道埋蔵文化財センター

理事長 浅井 理一郎

目 次

I 調査の概要	5
1 調査要項	5
2 調査体制	5
3 調査の経緯	6
4 調査の概要	8
II 表土の遺構と遺物	13
1 旧室岡街道と美々舟着場	13
2 遺構	15
3 遺物	18
III 第I黒色土層上面の遺構と遺物	23
1 遺構	23
2 遺物	24
3 珠洲系陶器とユウフツ越	38
IV 第I黒色土層の遺構と遺物	41
1 遺構	41
2 遺物	42
美々8遺跡出土須恵器の胎土分析	98
V 第II黒色土層上面にみられた獣の足あと等	101
VI 第II黒色土層の遺構と遺物	107
1 遺構	107
2 遺物	133
写真図版	151
付 編	(別冊)

I 調査の概要

この調査は、現在使用されている千歳空港の南東側に隣接して計画されている、新千歳空港建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前調査である。調査は、昭和51年度から継続して行われており、今年度で第6年次にあたる。

1 調査要項

事業名 新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査
事業委託者 北海道開発局札幌開発建設部
事業受託者 財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺跡名 美々8遺跡（道教委登録番号A-03-94）
遺跡の所在地 北海道千歳市字美々1292、1438
調査面積（第I黒色土層7,495m²、第II黒色土層11,900m²）計19,395m²
調査期間 昭和56年4月10日～昭和57年3月17日

2 調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター	理事長	浅井理一郎	
	業務部長	馬場 治夫	
	調査部長	藤本 英夫	
	業務部管理課長	小山内光之	
	” 経理課長	梅沢 祥真	
	” 管理課主事	佐川 俊一	
	” 経理課主事	菅野 聡	
	” ” 嘱託	石井 義男	
	調査部調査第二班長	森田 知忠	（発掘担当者）
	” 調査第二班		
	文化財保護主事	越田賢一郎	
	”	矢吹 俊男	（兼務）
	”	遠藤 香澄	
	”	工藤 研治	（兼務）
臨時職員（調査補助員）		熊谷 仁志	
”（ ” ）		石浦 節子	
”（ ” ）		永江加代子	

臨時職員（調査補助員）	小山田真弓
＃（測量技師）	立川トマス
＃（写真技師）	佐藤 和雄

調査にあたっては、文化庁、奈良国立文化財研究所および北海道教育委員会の指導をいただいた。また、つぎの機関および人びとの協力を得た。

千歳市教育委員会、北海道開拓記念館、北海道警察本部鑑識課、苫小牧市埋蔵文化財センター調査部長佐藤一夫、北海道開拓記念館特別学芸員矢野牧夫、同主任学芸員門崎允昭、同研究職員三野紀雄、同小林幸雄、同山田悟郎、北海道大学助教授林謙作、札幌医科大学助手西本豊弘、同大島直行、奈良教育大学教授三辻利一、東京大学名誉教授三上次男、金沢大学助教授佐々木達夫、岡山大学教授近藤義郎、石川県立郷土資料館資料課長吉岡康暢、松下互、長見義三、大谷敏三、田村俊之（順不同、敬称略）

3 調査の経緯

この調査は、昭和54年度および55年度に実施した、約4%掘開による詳細分布調査の結果に基づいて設計されたものである。調査日程は、

準備：4月10日～5月15日

現地調査および並行整理：5月16日～10月27日

整理および報告書作成：10月28日～57年3月17日
である。

美々8遺跡の土層は、図1に示すとおりである。これらのうち、Ta-a層とTa-b層は歴史時代の火山灰層で、古記録からそれぞれ、1739（元文4）年および1667（寛文7）年の噴出物と考えられている。また、これまでの調査における出土遺物との関係から、Ta-c層は2千2～3百年前、Ta-d層は約8千年前、En-a層は1万2～3千年前に堆積したものと推定することができる。Spflは約3万年前の支笏カルデラ形成時の火砕流堆積物とされるもので、この地域の地形の骨格をなすものである。

詳細分布調査によって、美々8遺跡にはTa-c層をはさんで、I黒層とII黒層に遺物が包

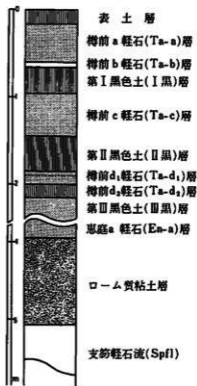
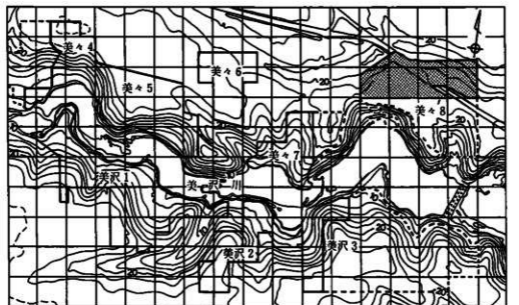


図1 美々8遺跡の土層



図2 遺跡の位置

この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図「千歳」を複製したものである



昭和56年度調査区

0 200m

図3 遺跡周辺の地形

含まれており、前者についてはこの地域の一部がもと自動車教習所用地であったために削平された部分のあることが判明していた。また、現在は千歳市道となっている旧室蘭街道が調査地区を貫通しており、工事用道路としても利用されていたため、調査中にこれの切替を行う必要があった。調査面積は当初、I黒層 7,985 m²、II黒層 12,390 m² の予定であったが、市道切替の関係で上下各 490 m² が今年度分から除外され、それぞれ 7,495 m²、11,900 m² となり、延調査面積 19,395 m² となった。

また、かつて、III黒層（昭55、美ヶ4遺跡）および En-a 下の風化土層中（昭53、美ヶ5・美沢1遺跡）からも、先土器時代の遺物が検出されていることから、全体の4%相当の面積について、これらの土層の掘削調査を行ったが、遺物は発見されなかった。

4 調査の概要

(1) 表土の遺構と遺物

調査区の西端に近い旧室蘭街道沿いの地点で、表土から掘りこまれた堅穴状の遺構に伴って、寛永通宝、天保通宝、文久永宝等の古銭、折りたたみ式の洋式ナイフ、和式のにぎり鉄、ガラス玉およびこれらを入れてあったかと思われる布製バッグとその金具等が出土した。苫小牧方面と石狩方面を結ぶ近世の交通路である「ユウフツ越」または、北海道開拓使によって開削された旧室蘭街道に関係あるものと考えられる。これらの遺物が出土した堅穴状の遺構は、さらに新しい幾度かの掘りこみによって攪乱されていて、規模、形状とも不明。また、攪乱層中か

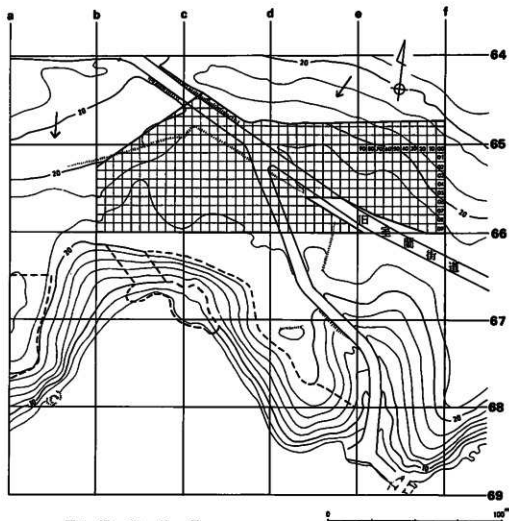


図4 調査地区

ら、鍬先、斧等の鉄器が出土しているが、近年まで行われていた炭焼きや、逐次行われたであろう道路改良工事等との関係も考えられ、時期を決定できない。

(2) 第I黒色土層上面の遺構と遺物

調査区の南西部は、美々7遺跡につづくゆるい尾根の鞍部となっている。この尾根上の狭い平地を中心とした地区で、1667(寛文7)年に降下したとされる Ta-b層直下から、珠洲窯系すり鉢、照享元宝、洪武通宝、回転離頭鉢、マレット、斧、かすがい、釘等の鉄器、若干の銅製品、貝殻、獣骨、および形状がよく揃った礫のまとまり等の発見があった。礫のまとまりは、長さ5~7cmのやや細長い河原石数個ないし数十個から成り、スポット状に分布している。美沢川および台地上では、礫は産しないので、もちろん他所から搬入したものである。このような礫の用途については、今後解明の必要があろう。

これらの遺物と関連あると思われる遺構には、幅数十cmでわずかに再状を呈する道のあとと

思われるもの、柱穴列、獣骨を含む焼土群がある。道あとと思われる遺構は、調査区内では約20mしか追跡できなかつたが、美沢川の急斜面（未調査地区）方向へ続いていることがわかつた。柱穴は、尾根上の平地で多数認められたが、建物に関係すると思われる組合せは2例だけである。

以上の遺構と遺物は、火山灰との関係から、中世～近世初期ころに編年することができる。この時期に由来する資料は、美沢川流域では初めての発見である。幕末の記録によれば、太平洋岸（東蝦夷）と日本海岸（西蝦夷）とを結ぶ主要な交通路である「ユウフツ越」は、ビビからシコフの間は陸路であつたとされている。シコフは現在の千歳市街地、ビビの舟着場は、はじめ、この遺跡の付近にあり、幕末ころになって2kmほど下流の美々川との合流点の辺りに移つたと解されている。このことから、これらの遺構・遺物はこの交通路と深い関りがあるものと思われる。

なお、昭和54年度に実施した詳細分布調査の際、鉄製で黒漆の痕跡のある小札が7枚出土している。調査の方法、掘削規模等の制約から、I黒層のどのレベルで出土したのか必ずしも明らかではないが、出土地点の近いことから、これも上記の資料に伴うものとみなしてよいと思われる。

(3) 第I黒色土層の遺構と遺物

I黒層は、Ta-c層とTa-b層に挟まれた土層で、縄文時代晩期末葉から17世紀にわたる年代幅がある。この層からは、前述の中世～近世の遺物を除けば、それぞれ少量の晩期末の土器（V群c類）、統縄文時代の土器（VI群）およびそれらに伴う石器と、豊富な擦文時代の遺物が出土した。この時代の遺構としては、円形土壇1個と、建物との関係の把握されない柱穴群が1か所認められた。調査区の中央部分が旧自動車教習所によって削平されており、この部分に住居がなかつたとは言いきれないが、当遺跡のような遺構を伴わない擦文土器の大量出土は、きわめて異例なことと考えられる。

擦文時代の遺物には、土師器またはその系統をひく甕および坏、須恵器坏、ろくろ成形の土師器坏、各種の刻文土器、土甕、鉄鍋、および先に見たと同じ様な礫のまとまり等がある。このうち、鉄鍋は、耳の形態の不明な、三本脚の小型のもので、出土レベルが刻文土器よりやや高く、伴出関係に多少の疑問は残る。また、土甕は長さ約6cmの紡錘形で、縦に貫通孔をもつもので、あまり顕例は知られていない。なお、擦文土器にしばしば伴出することが知られている紡錘車は1点も発見されていない。

遺物は、中央部分が削平されていたことにより、①発掘区の南東部から市道の路床下にかけての平坦部、②北西端の沢の底、③南辺の美沢川の斜面にかかる部分の3か所に分かれて分布し、それぞれが個性をもっている。すなわち、①は土師器またはその系統の甕、坏、須恵器坏のグループで、土壇と柱穴群はこの地区にある。②と③とは刻文土器を主体とするグループであるが、文様の種類は微妙に違っている。②は刻文の施された甕、ろくろ成形土師器坏を主体とするもので、土甕、鉄鍋はこの地区から出土している。③は、小面積で個体数も少ないので

十分比較できないが、文様帯から横走沈線の消失したものが多く、ろくろ成形環を伴っていない。

このような組合せの違いは、年代差を反映しているものと捉えることができ、甕の器形と、文様の特徴から、大ざっぱには①→②→③の序列が考えられる。しかし、これらをセットと呼ぶのは多少乱暴であり、しかも道央地方においては参考となる資料も少ないので、いまのところ細分はひかえることとする。

礫のまとまりは、各グループに共通して認められるが、第Ⅰ黒色土上面のそれに比べて、やや大きい印象をうけるものがある。

(4) 第Ⅱ黒色土層上面にみられた獣の足あと等

Ta-c層直下のⅡ黒層上面から、小型獣の足あとと思われるものが出現した。径数 cm から 10 cm 内外、深さ 2～3 cm のくぼみに、Ta-c の珪石粒が象嵌された状態で確認されたものである。この“足あと”は、調査区の西半および北辺に沿った地区にかなり広範囲に認められ、いずれも歩幅 30 cm ほどであるが、配列は直線的、千鳥状、または石けりの“ケンケンパ”のようになるもの等の変化がある。足あとがのこされてから Ta-c の降下までには、多少の時間の経過があったらしく、プリントは鈍くなっており、爪または蹄の形はわからない。北海道警察本部鑑識課による石膏型の鑑定でも、動物の種類は特定できなかったが、北海道開拓記念館門崎允昭主任学芸員によれば、歩行の特徴から大部分はキツネであり、一部はウサギの可能性がある由である。

また、Ⅰ黒層上面でみられたのと同じような浅い溝状のくぼみが、ところどころで検出された。連続的に追跡することができなかつたので、道のあとなのか、自然の営力によるものなのか決定できなかった。

(5) 第Ⅱ黒色土層の遺構と遺物

Ⅱ黒層は縄文時代の文化層である。この層から検出された遺構は、29 個の T ビットがすべてである。T ビットには、幅の狭いタイプと、やや幅広で底面に杭穴をもつタイプがある。縦半割または小口掘りによって断面を観察したところ、杭の痕跡が開口部付近にまで達しているものがある。大きさや平面形にも多少のバリエーションがある。これらは各タイプごとに列をなして分布する傾向があり、当遺跡でも最低 3 列が認められている。伴出遺物はなく、時期はわからない。

今日、T ビットを獣の陥し穴とする説が有力である。現在のところ、これを否定する資料はない。しかしこれは、崩落等によってかなり短期間のうちに埋まってしまうことが予想されるが、崩落土を処理した形跡はない。したがって、これを陥し穴とした場合、短期間の使用、おろろくひとシーズン限りのものと考えねばならないだろう。

出土遺物は、主として縄文時代早期末（Ⅰ群 b-4 類）、後期末～晩期初頭（Ⅳ群 c 類、Ⅴ群 a 類）の土器およびこれに伴う石器類であるが、量は多くはない。

以下に各層位別遺物一覧表を付しておく。（森田知忠）

出土遺物数一覧表

層位	遺物計	陶磁器	金属製品	古銭	土器	石器等	礫	フレイク	漆器	その他
表土	167	87	28	38						14
I 黒上面	1,328	26	71	4		31	1,188	4	1	3
I 黒	26,515		301		22,273	118	3,628	195		
II 黒	10,005				6,928	700	272	2,105		
表採	642	21			551	19		51		
總計	38,657	134	400	42	29,752	868	5,088	2,355	1	17

II 表土の遺構と遺物

1 旧室蘭街道と美々舟着場

旧室蘭街道は、千歳市街地方面から現在の滑走路に沿うように南に伸び、美沢川の谷と出会うあたりで大きく東へ弧を描いて美々8遺跡を縦断し、苫小牧へと続いていく。この街道は、明治5(1872)年に北海道開拓使が開削したもので、昭和28(1953)年に現在の国道36号線が開通するまで、札幌と室蘭方面を結ぶ幹線道路として利用されていた(図5)。明治12年から15年まで美沢川と美々川の合流点付近におかれていた「開拓使美々鹿肉缶詰製造所」は、この街道を利用してつくられたものである⁴¹⁾。

江戸時代においても、このルートは「シコツ越」、「ユウフツ越」等とよばれ、日本海側と太平洋側を結ぶ内陸交通路として、重要な位置を占めていた。17世紀後半にはすでにこの交通路の存在が記されており⁴²⁾ 18世紀後半から19世紀初めにかけて申原正峯、武藤勘藏らはイシカリ(石狩)からこのルートをとどり、ユウフツ(勇払)へ抜けている⁴³⁾ その経路は、石狩川を舟で溯ってシコツ(千歳)川に入りシコツ(現在の千歳)で上陸、陸路を通過してビビ(美々)に至り、再び舟で美々川を下ってユウフツ(勇払)へ出るものであった。

千歳から美々にいたる山道は、文化年間(1804~18)に勇払場所の惣支配人をして山田文右衛門によって整備された。後の室蘭街道の原形となるものである。この山道は、千歳川でとれた鮭を運ぶのに利用され、大変にぎわったことが知られている。

美々の舟着場は、千歳川の鮭や周辺で焼かれた炭を積出すのに重要な場所でもあった。弘化3(1846)年「ユウフツ越」をした松浦武四郎は、「再航蝦夷日誌」に美々について、

從_ニチトセ番屋_一、山道或_ハといへども近きヤ=覚_ツ。此処小惣所有。うらに夷人小屋或_ハ野有。此山中=而焼たる炭を皆此処へ出す。是よりして□□に□□也。又秋味は此処に□□□□り積来り□より小船に而送る。此処より上船す。

と記している。この美々舟着場は、川が浅くなったため、下流のビボエカリ(美沢川と美々川の合流点付近⁴⁴⁾)に移った。1850年頃のことである⁴⁵⁾。

最初に美々舟着場のあった場所が、美々7・8遺跡付近の美沢川辺りであるとする説がある⁴⁶⁾ 千歳から美々にかけて、火山灰が厚く堆積して比較的平坦な地形を呈しており、目的地までの道は最短距離がとられたはずである。かつての美々山道にもつづいたと思われる旧室蘭街道が、千歳からまっすぐ南に伸び、美々7・8遺跡付近に達しているのは、舟着場がその付近にあったからにはかならない。そこでカーブを描くのは、舟着場の位置が下流に移ったためと考えられる。これがその説のあらましである。

この説の当否を判定するには、今後の調査を待たざるを得ない。だが少なくとも美々8遺跡における表土層の遺構と遺物の多くが、「ユウフツ越」と「室蘭街道」に関係するものとみなす

ことができるのではなからうか。

- 注) 1. 佐藤一夫 1975『苫小牧市美々「開拓使美々鹿内街詰製造所」址発掘調査報告書』苫小牧市教育委員会
2. 享保16(1731)年『津軽一統志』、寛文10(1670)年『寛文拾年秋蜂起集書』

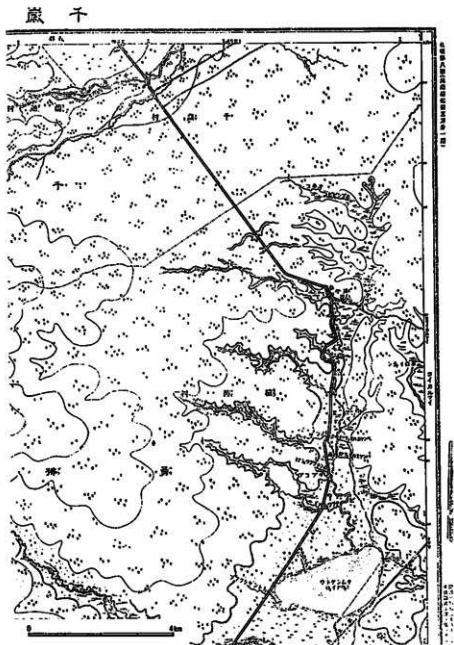


図5 明治中頃の室蘭街道

3. 佐藤玄六郎 天明6 (1786) 年『蝦夷拾遺』、串原正峯 寛政4 (1792) 年『夷俗俗語』、武藤勘蔵 寛政10 (1798) 年『蝦夷日記』
4. 山田秀三『美沢附近の旧地名』
5. 松浦武四郎 安政5 (1857) 年『西蝦夷日誌』、玉虫左太夫 安政4 (1856) 年『入北記』
6. 長見義三氏のご教示による。

2 遺構 (図6・7、図版2~4)

現在の旧室蘭街道は、丘陵上の高い部分を削平し、沢の部分に盛土をして築かれている。だが、かつてはほぼ地形の凹凸に従っていたようで、盛土の下に礫や小砂利を敷いた部分があるところ残存している。また、d-64-87 から c-65-60 にかけて小砂利層と同レベルにつくられた枝道跡がみつまっている。

この枝道と本道にはさまれた d-64-67~68 に、浅い堅穴状の遺構がある。その大半が、本道を築くための土取り作業により攪乱されており、全体の形は不明である。わずかに残存している部分から、柱穴と思われる小ビットが数個検出され、その周囲に古銭、玉などの遺物が散乱していた。また、攪乱部分からも流れ込んだと思われる古銭、玉、鉄がみつまっている。

遺構から出土した遺物は、寛永通宝 19 点 (図7-21~36)、天保通宝 4 点 (17~20)、文久永宝 15 点 (37~49)、折りたたみの洋式ナイフ 1 点 (3)、ガラス製ボタン 1 点 (6)、ガラス小

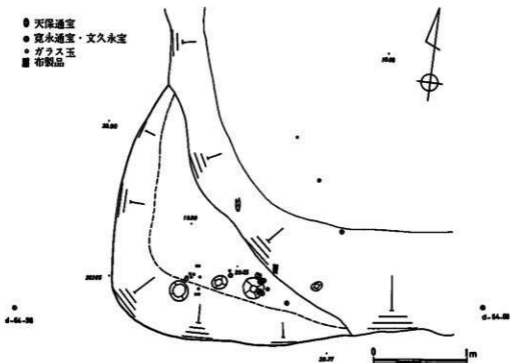


図6 堅穴状遺構

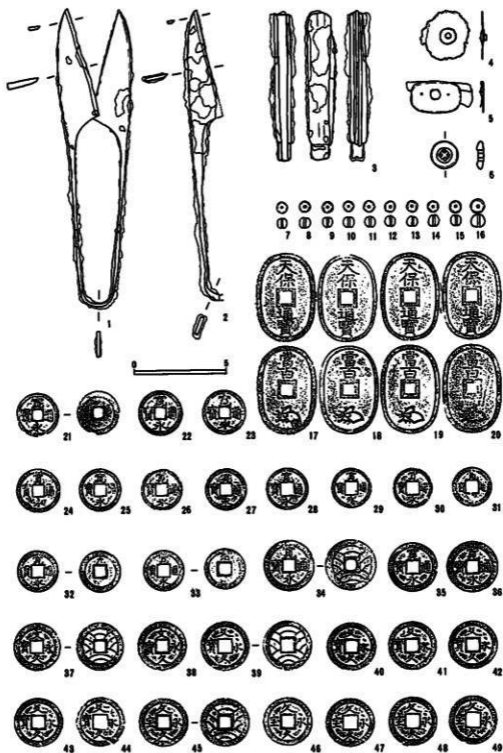


図7 罌穴状遺構出土の遺物

壑穴状遺構出土の遺物 (図7)

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)			重さ(g)	材 質	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
1	金属製品	摺 鉄	d-64-87	16.3	4.5	1.3	51.3	鉄	
2	"	"	"	15.7	—	1.1	23.4	"	
3	"	折りたたみナイフ	"	8	1.8	1.4	23.8	"	3枚刃
4	"	止め金	"	2.6	2.7	0.7		銅	革に装着
5	"	"	"	(3.7)	(1.8)	—		"	
6	ガラス製品	ボタン	"	1.4	1.4	0.4	1	ガラス	
7	"	玉	"	0.7	0.7	0.6	0.2	"	乳白色
8	"	"	"	0.65	0.7	0.6	0.3	"	"
9	"	"	"	0.7	0.7	0.65	"	"	"
10	"	"	"	0.7	0.7	0.6	0.2	"	"
11	"	"	"	0.6	0.6	0.5	0.25	"	"
12	"	"	"	0.6	0.6	0.5	0.3	"	"
13	"	"	"	0.6	0.6	0.6	0.3	"	"
14	"	"	"	0.7	0.7	0.6	0.3	"	"
15	"	"	"	0.6	0.6	0.6	0.3	"	"
16	"	"	"	0.9	0.8	0.7	0.8	"	"
17	古 銭	天保通宝	"					銅	
18	"	"	"					"	
19	"	"	"					"	
20	"	"	"					"	
21	"	寛永通宝	"					"	古寛永
22	"	"	"					"	"
23	"	"	"					"	"
24	"	"	"					"	
25	"	"	"					"	
26	"	"	"					"	
27	"	"	"					"	
28	"	"	"					"	
29	"	"	"					"	
30	"	"	"					"	
31	"	"	"					"	
32	"	"	"					"	背元
33	"	"	"					"	"
34	"	"	"					"	背11波
35	"	"	"					"	"
36	"	"	"					"	"
37	"	文久永宝	"					"	"

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)			重さ(g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
38	古 銭	文久永宝	d-64-87				銅	背11波	
39	"	"	"				"	草文・背11波	
40	"	"	"				"	"	
41	"	"	"				"	"	
42	"	"	"				"	"	
43	"	"	"				"	"	
44	"	"	"				"	"	
45	"	"	"				"	玉宝	
46	"	"	"				"	"	
47	"	"	"				"	"	
48	"	"	"				"	"	
49	"	"	"				"	"	

玉 10点(7~16)、革が残った銅製止め金(4、5)、織維製品である。また、攪乱部分からみつかった鑿鉄2点(1、2)もこの遺構に伴うものと考えられる。このうち銅製止め金と織維製品は、本来ひとつのもので袋状をなしていたと考えられる。古銭にはひもで纏られていた形跡をとどめているものがあり、ナイフや玉等とともに袋のものに入れられていたものと推定される。

この遺構の年代は、明治になってからの円を単位とした貨幣がみられないことから、文久永宝の鑄造された文久3(1863)年以降、明治初年代までと考えられる。

この他、表土層より掘り込まれた穴がI黒層上面で数か所検出された。いずれも埋戻しを行った形跡がみられず、自然に埋没したものである。底からベルト先につける銅製金具、紙片が出土している。いわゆる「たこ穴」であろうか。

3 遺物

表土の遺物は、遺構に伴うものを除いてほとんど道路の盛土中から出土したものである。若干の陶磁器、ビール壺、鉄製品がある。

陶磁器(図8-1~7, 図版5)

猪口(1)、皿(2)、茶碗(3)は、いずれも呉須による染付がなされている。茶碗2個体(4、5)は、ほぼ同一器形の白磁で見込に文字が刻されている。紅緑である。酒徳利(6)は、表面に淡青色の釉がかけられており、裏面は無釉である。同一個体と思われる胴部片には、呉須により文様が描かれている。焼酎徳利(7)は、表面に灰釉が、内面には鉛色の釉が施されている。図示したもののほか、土瓶、徳利、茶碗片等が出土しており、コバルトを用いて施文している破片もある。また徳利には、新潟の松郷屋で焼かれ明治10年以後道内に持ち込まれたものがある。

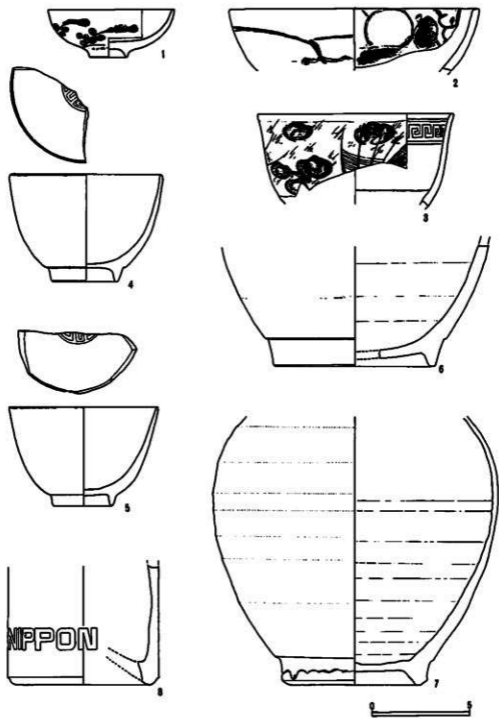


図8 表土の遺物 (1)

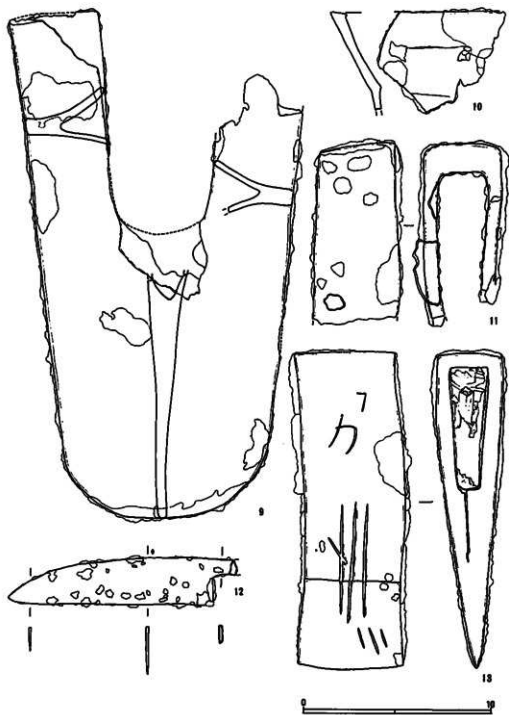


図9 表土の遺物(2)

陶磁器は、江戸時代末期から明治初頭にかけてのものと、それ以降のものまでかなり年代幅がみとめられる。

ビール壺（図8-8）

揚げ底の壺で、……NIPPON……の文字がある。大正8年以降、昭和19年までに半自動で製作された大日本麦酒会社の壺である。

金属製品（図9、図版5）

鋏先または鋤先（9）は、攪乱穴の中から出土した。腐蝕はさほど進行していない。鍋（10）は、自動車教習所跡にある浅い凹地で採集した。腐蝕が進んでいて、全体に亀裂が入っている。斧は2点出土した。3は、柄に装着する部分の破片で、道路脇から出土した。5は、完形品で枝道跡から出土した。わずかに腐蝕しているだけである。12は、鉄製の刃物である。

このほか、枝道跡より小型の馬の歯が出土している。

以上の遺物のうち、斧はこの周辺で行われていた炭焼きと関係があるものと思われる。また、鍋、陶磁器、農耕具があることから、付近に小屋が営まれていた可能性がある。

なお、陶磁器について松下亘氏のご教示を得た。（越田賢一郎）

表土の遺物（図8・9）

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)	重 さ(g)	材 質	備 考
1	陶 磁 器	猪 口	c-64道路下	口径(6.5)×2.4			
2	"	皿	c-64-08	口径(13.0)			
3	"	茶 碗	c-64道路下	口径(10.2)			
4	"	"	d-64道路下	口径(8.0)×5.6			見込に刻印あり
5	"	"	"	口径(7.8)×5.1			"
6	"	酒 徳 利	d-64-79	底径(8.4)			
7	"	焼酎徳利	d-64-58	底径(6.8)			
8	ガラス製品	ビール壺	d-64-68	底径7.8			
9	鉄 製 品	鋏 先	e-65-39	27.2×(15.1)×3.1	(1010)		
10	"	鍋	c-65-13				
11	"	斧	e-65-84	—×4.7×4.8			
12	"	ナイフ	d-64-88	(12.2)×2.8×0.4	(16.7)		
13	"	斧	d-64-99	17.2×5.8×3.8	1112		

Ⅲ 第Ⅰ黒色土層上面の遺構と遺物

1 遺構

(1) 道跡 (図10, 図版6)

Ta-b火山灰層を除去したところ、b-65-16から19にかけて浅い溝がみられ、さらに南北方向にのびていた。Ⅰ黒層上面のレベルでTa-b層が残った状態が図版6である。溝の幅は30~40cm、深さは5cm程度である。溝は、丘陵の鞍部を越えて、南側の美沢川の谷と北側の浅い沢を結ぶように続いており、底面はややしまった感がある。溝の周囲には、2基の柱穴列と数多くの焼土がみられ、片口鉢、鉄器等の遺物が散布していて、生活跡があったことを示している。これらの遺構と溝が重複していないことも考えに入れ、道跡であろうと推定した。

道跡の脇に、礫が2点みられた。また、直径5mmにも満たない小砂利が、溝とその周辺に散在しているのが注目される。

(2) 柱穴列 (図10, 図版7)

道跡の東側に、東西に2基並んで検出された。この他にも多数の柱穴がみられるが、規則性を見出させるものはない。柱穴は、Ⅰ黒層上面では不明確で、Ta-c層まで掘り下げた段階で



図10 柱穴群の分布

確認されたものである。主柱穴は、径 10~15 cm で Ta-c 層下の II 黒層に達している例がある。いずれも掘り方がはっきりしない。

東側の柱穴列は、3 本ずつ 3 列をなす 9 本の柱穴列の南側に、張り出し部を持つ平面形を呈する。柱穴間隔は、南北 1.3 m、東西 1.9 m ほどである。中央部にある焼土は、柱穴位置と重複するため伴うものではない。

西側の柱穴列は、3 本ずつ 3 列をなしている。南側に表土からの掘り込みがあるためはっきりしないが、地形からみて柱穴列は続かないものと考えられる。

(3) 焼土群

道跡、柱穴群がある丘陵の鞍部に集中している。焼土中にカワシンジュガイ、鹿の骨、サケの椎骨、炭化物等が含まれている。炉跡と考えられる。

焼土には、I 黒層最上面に堆積していて、Ta-b の軽石粒を含むものと、2~3 cm の黒色土を除去した後に現われるものがあり、時間的な幅があると考えられる。

このほか焼土群とはば分布を一にして、焼土を伴わないカワシンジュガイや骨の集積がみられる。

2 遺物

I 黒層上面の遺物では、珠洲系陶器、金属製品、古銭、石器、漆器、骨角器など 1328 点がある。

(1) 珠洲系陶器 (図 13、図版 7・8)

還元炎焼成による須恵質の片口鉢で、灰褐色を呈している。いわゆる、珠洲系陶器である。全体の $\frac{1}{2}$ ほどが現存しており、推定口径 39~42 cm、底径 15~16 cm、器高 15~18 cm で、ゆがみが認められる。器体はほぼ直線的に開くが、口唇部に平坦面を作り出す整形のため、口縁部で外反している。口唇部は、やや内削ぎで幅 2 cm の平坦面を有し、櫛描きによる波状の文様

I 黒層上面の遺物

総計 1,328 点

遺物名	分類	数量	備考	遺物名	分類	数量	備考
陶器	珠洲系陶器	26	1 個体分	やじり	IA 5	1	
金属製品	カスガイ	14		石皿	IV B 1	1	
〃	釘	14		砥石	VI B 2	14	
〃	鉈	1		フレイク チップ	IX B	4	
〃	斧	1		使用痕のある 礫	X B	14	
〃	マレット	1				1,188	
〃	小札	7		石製品		1	
〃	その他の鉄器	29		漆器		1	痕跡のみ
〃	銅製品	4		骨角器		3	焼けて破砕
古銭	渡来銭	3	照取元室 1、 洪武通宝 2	合計		1,328	
〃	廻銭	1					

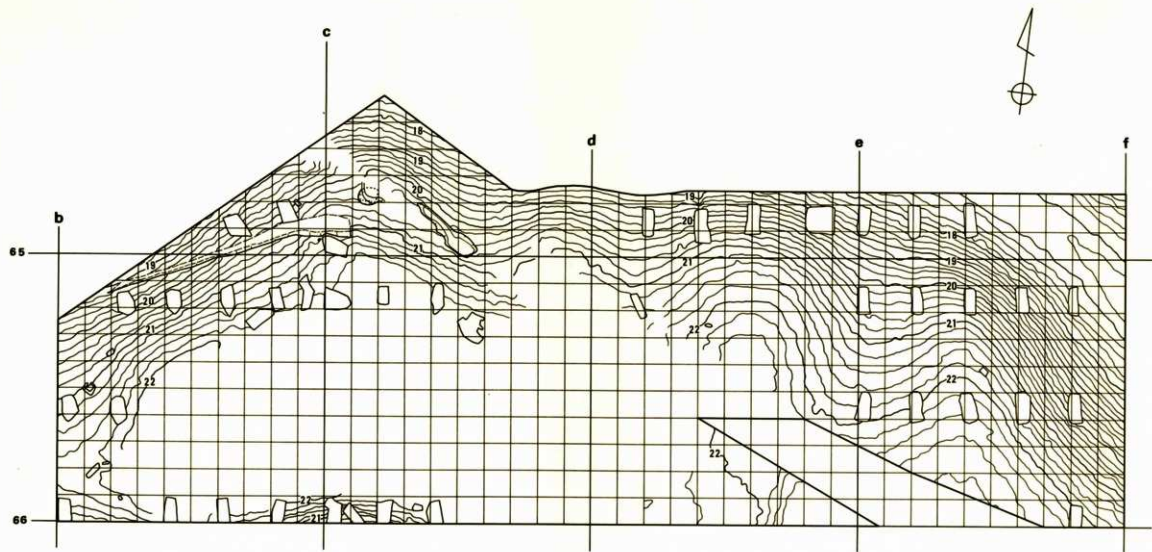


図11 I層上面の地形

0 20m

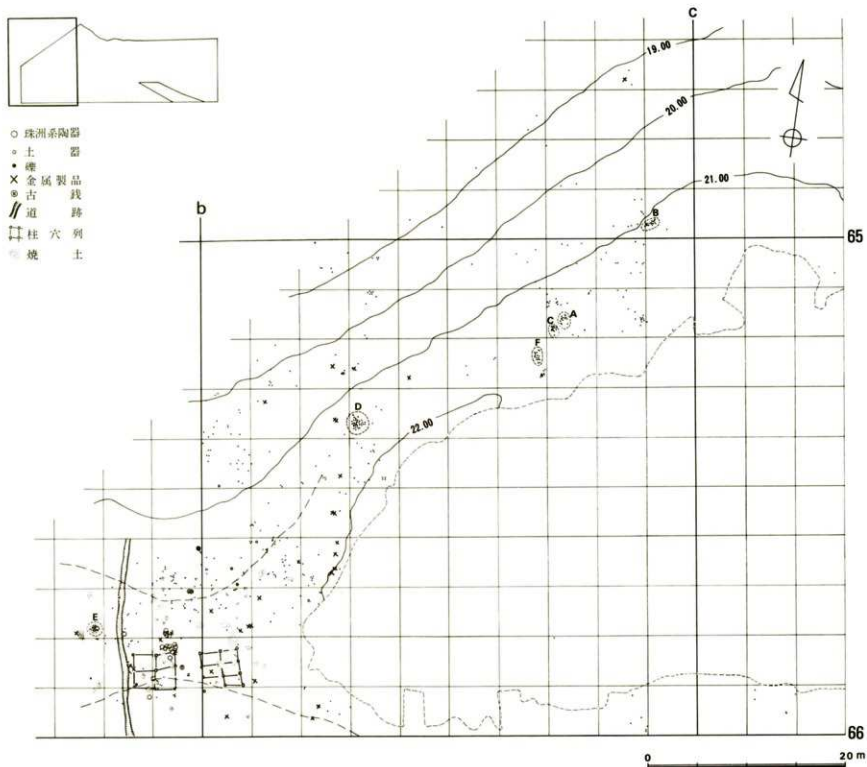


図 12 I 黒層上面の遺物分布

が施されている。内面には、口縁から少し下ったところから卸し目が密に施されている。単位は10本前後である。本来は見込にも卸し目が施されていたはずであるが、使用により半分以上が磨耗しており、底部の厚さも薄くなって0.7 cmの部分がある。底面には、静止糸切り痕が残っている。胎土は、砂礫を多く含み、焼成もあまりよくない。

器形は、珠洲V期の特徴を示しているが、胎土や焼成の状態はIV期のそれに近い。⁽⁹⁾このことから、製作時期は15世紀の中頃と推定される。だが、磨耗の具合からみて長期間使用された後廃棄されたものであろう。

注) 吉岡康暢氏のご教示による。

(2) 金属製品 (図14・15・16, 図版9~11)

カスガイ (図14-1~14, 図版9)

断面形が扁平なもの(1~11)と正方形に近いもの(12~14)にわけることができる。背の長さが10 cmを越す大型のものから、2 cmほどの小型のものまでさまざまである。9は、木質部が一部残っている。1はとくに大型で、他の用途をもつ可能性がある。

釘類 (図14-15~27, 図版9)

断面形が扁平なもの(15, 16, 20~23)と、正方形に近いもの(17~19, 25~27)にわけることができる。また頭部が折り曲がるもの(15~19)と、直線状のもの(21~22)がある。23は、両端がすぼまっており、釘でないかもしれない。

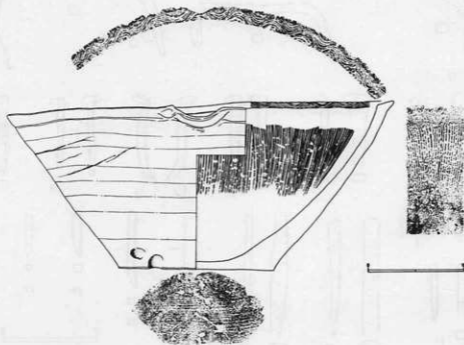


図13 1 黒層上面の遺物 (1)

蛇 (図 15-28, 図版 10)

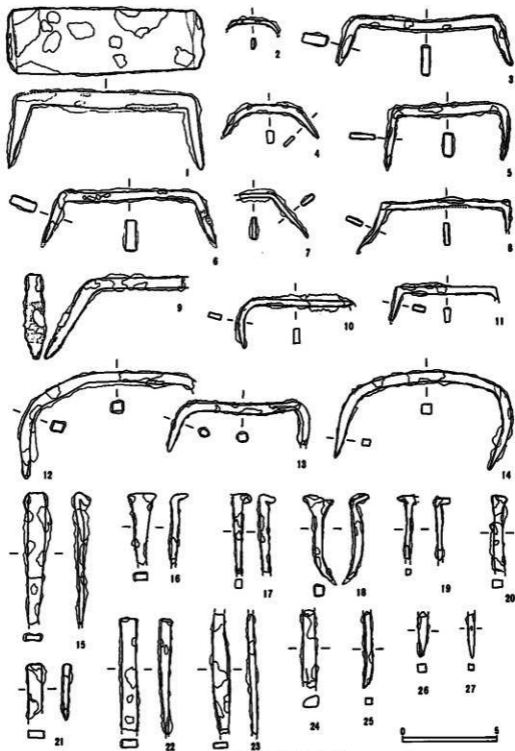


図 14 I 黒層上面の遺物 (2)

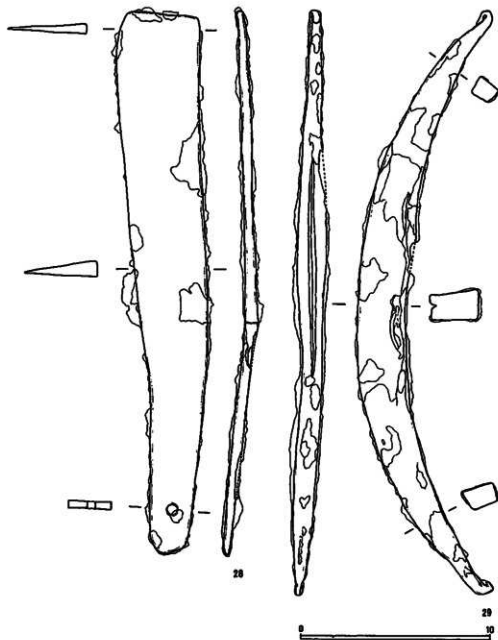


图15 I层上面の遺物(3)

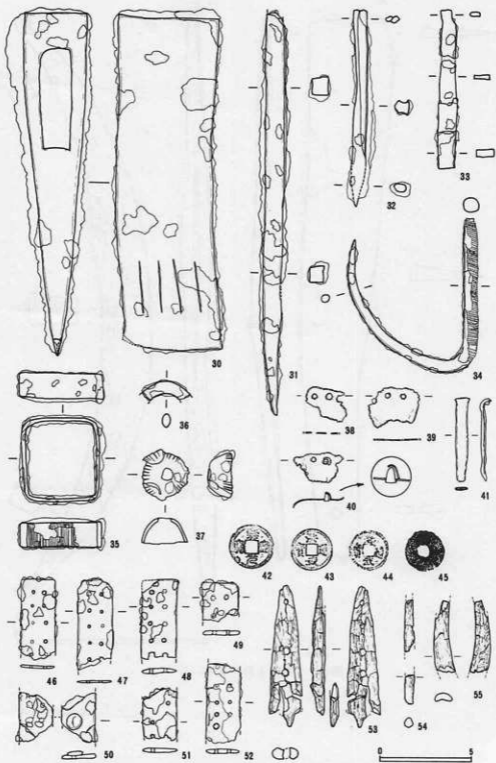


図16 I 黒層上面の遺物 (4)

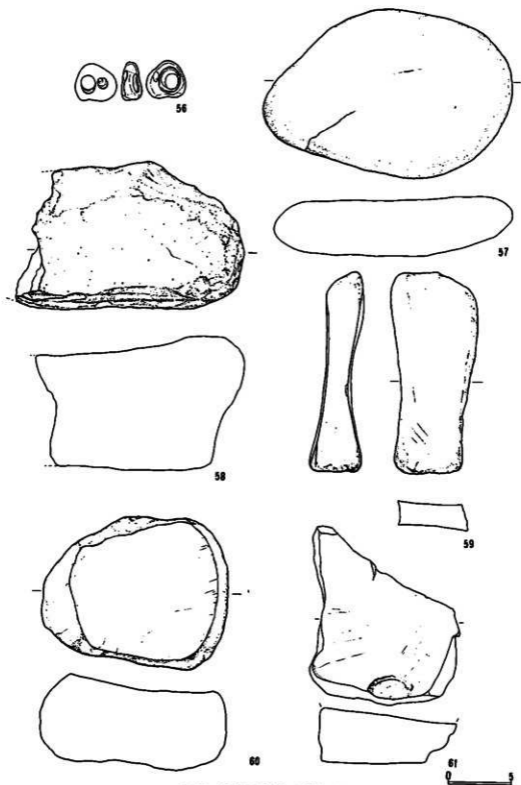


図17 I層上面の遺物 (5)

銚 (図15-28, 図版10)

I 黒層最上面より出土した。完形品で、中央部がわずかに折れ曲がっている。

斧 (図16-30, 図版10)

刃先の一部がわずかに欠けているだけの完形品である。錆のためはつきりしない部分があるが、両面に4本の刻線がみられる。

マレット (図16-34, 図版11)

銚漁用の鈎である。断面は丸形に近い。先に返しが無い。基部に、木柄と連結するために糸を巻いた跡がみられる。

鉄環 (図16-35, 図版11)

柄の先に道具を取り付ける時に、締めつける役割をする金具である。内面の一部に木質部が残存している。

飾り金具 (図16-37~40, 図版11)

37は、鉄製で腐蝕が進んでいる。周辺に刻みがみられ、中央部に穴がある。

38~40は、銅製の飾り板であろう。穴部に飯と思われるものが残っている例がある。

小札 (図16-46~52, 図版11)

2列の穴があるタイプで、幅は約2cmに規格されている。黒漆が残っている部分がある。

(小札は、昭和54年度の詳細分布調査の際、重機により掘り出されたもので、出土層位は明らかでない。出土地点の周辺にI 黒層上面の遺物が集中していたので、ここに入れておいた。)

その他の金属製品 (図15-29, 図16-31~33・36・41, 図版10・11)

29は、弓形の鉄製品で、両端が折り返されている。31は、尖頭部をもつ大型の鉄器である。ヤスに用いられた可能性がある。32、33、36は、いずれも用途不明である。41は、銅製品で筒状のものがつぶれたものであろう。

(3) 古銭 (図15-42~45, 図版11)

柱穴群の近くに4点みられる。42は、熙寧元宝〔北宋 熙寧元(1068)年〕、43、44は、洪武通宝〔明 洪武元(1368)年〕で、重なった状態で出土した。45は、鑑銭であろう。

(4) 骨角器 (図16-53~55, 図版11)

b-65-08から回転式離頭銚1点、b-65-17の炭化物層中から骨角器と思われるもの2点が出土した。いずれも火を受けて細片となっており、整理段階で気付いたものである。

回転式離頭銚は、鹿角製で推定長さ7.7cm、幅1.8cm、厚さ0.8cmの細身のものである。先端部には金属製の鎌部を取り付けるための溝が設けられており、径2mmほどの目釘孔がある。溝を境に、片方の先端が欠落しており、内側の削り跡が観察される。この部分に錆が付着しており、鉄製の鎌が取りつけられていたと思われる。索孔は、縦に2つ並ぶ。径4mmである。索孔をつなぐ溝の有無ははつきりしない。索孔部分より下部は残りが悪く、茎溝部の形は不明である。また、かえしの部分の破片は、図の形に想定されよう。

その他の2点はいずれも小片で、全体形は不明である。2、は断面が円形に近く、棒状を呈

I 黒層上面の遺物 (図13~17)

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)			重さ(g)	材質	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
	陶磁器	片口鉢	b-65-08	(42)	18	16			珠洲系陶器
1	金属製品	カスガイ	c-65-97	10.35	4.50	3.65	210.0	鉄	
2	"	"	b-65-08	(2.80)	0.85	0.70	(10.1)	"	
3	"	"	c-65-97	9.30	2.75	1.80	58.4	"	
4	"	"	c-65-95	(5.10)	1.65	0.90	(6.6)	"	
5	"	"	c-65-72	6.80	3.15	1.40	28.6	"	
6	"	"	c-65-97	9.25	2.95	1.65	41.1	"	
7	"	"	c-65-83	(6.30)	2.60	1.05	(4.3)	"	
8	"	"	c-65-83	8.00	2.75	1.40	15.9	"	
9	"	"	c-65-98	(7.35)	4.2	1.1	(18.8)	"	
10	"	"	d-64-85	(3.45)	2.30	1.2	(11.5)	"	
11	"	"	c-65-83	(5.75)	1.88	1.00	(9.4)	"	
12	"	"	b-65-18	9.5	5.50	0.80	20.6	"	
13	"	"	c-65-79	7.55	2.90	0.65	12.0	"	
14	"	"	c-65-79	9.43	4.90	0.85	22.0	"	
15	"	釘	b-65-18	(6.95)	0.96	1.50	(11.8)	"	
16	"	"	d-64-37	(3.80)	0.95	1.50	(5.5)	"	
17	"	"	c-65-87	(4.20)	0.95	1.05	(5.0)	"	
18	"	"	c-65-83	(4.60)	1.05	1.65	(6.8)	"	
19	"	"	d-64-38	(3.40)	0.90	0.85	(1.7)	"	
20	"	"	f-65-44	(4.05)	0.80	0.80	(3.1)	"	
21	"	"	b-65-08	(3.00)	0.60	11.0	(2.7)	"	
22	"	"	f-65-87	(6.20)	0.70	1.05	(12.7)	"	
23	"	" (?)	e-65-15	(6.45)	0.60	11.0	(6.8)	"	
24	"	"	c-65-76	(4.18)	0.80	0.98	(7.9)	"	
25	"	"	c-65-76	(4.00)	0.70	0.65	(2.9)	"	
26	"	"	f-65-44	(2.40)	0.65	0.60	(1.3)	"	
27	"	"	c-65-88	(2.45)	0.50	0.50	(0.6)	"	
28	"	鉋	e-65-51	28.85	1.05	4.60	212.0	"	
29	"	弓状鉄製品	c-65-73	30.70	1.90	2.65	410.0	"	
30	"	斧	c-65-62	19.00	4.70	5.90	1,340.0	"	
31	"	ヤス先(?)	c-65-74	(22.15)	1.40	1.55	(127.2)	"	
32	"	不明	c-65-11	(10.80)	1.12	1.40	(27.5)	"	
33	"	斧 (?)	c-65-86	(8.60)	0.55	1.20	(9.1)	"	
34	"	マレット	c-65-76	8.40	7.2	1.00	40.3	"	
35	"	鉄環	c-65-76	4.55	1.4	4.85	31.1	"	
36	"	不明	e-65-09	(2.60)	1.10	—	(1.5)	"	
37	"	飾り金具	c-65-52	2.60	1.35	2.50	5.6	"	
38	"	"	c-65-75	(2.00)	(0.15)	(2.15)	(0.8)	銅	

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)		重さ(g)	材質	備考
				最大長×最大幅×最大厚				
39	金属製品	飾り金具	c-65-75	(2.10)×(0.40)×(2.80)	(2.2)	鋼		
40	"	"	c-65-75	(1.75)×(0.70)×(2.70)	(1.7)	"		
41	"	不明	c-64-16	4.55 × 0.65 × 0.75	2.4	"		
42	古銭	熙寧元宝	c-65-08			"		
43	"	洪武通宝	b-65-07			"		
44	"	"	b-65-07			"		
45	"	鑑銭	b-65-06			"		
46	金属製品	小札	c-65-99	(4.45) × 0.55 × 2.00	(6.4)	鉄		
47	"	"	c-65-99	(5.00) × 0.55 × 2.00	(7.0)	"		
48	"	"	c-65-99	(2.35) × 0.70 × 2.15	(2.8)	"		
49	"	"	c-65-99	(4.60) × 0.45 × 2.00	(6.8)	"	漆付着	
50	"	"	c-65-99	(2.75) × 0.9 × 1.95	(3.4)	"	"	
51	"	"	c-65-99	(2.95) × 0.65 × 2.10	(3.6)	"	"	
52	"	"	c-65-99	(4.45) × 1.00 × 2.10	(6.0)	"	"	
53	骨角器	回転式離頭匙	b-65-08	(7.7) × (1.8) × 0.8		鹿角		
54	"	?	b-65-17	径 0.5		"		
55	"	?	"			"		
56	礫		c-65-94	3.2 × 2.9 × 1.6	13.4	Mud.	孔あり	
57	石皿	ⅥB	e-65-83	18.5 × 4.7 × 12.5	1,850	"		
58	砥石	ⅦB 2	e-65-03	17.3 × 9.1 × 11.5	3,000	"		
59	"	ⅦB 2	c-65-42	15.5 × 3.8 × 16.0	420	Sa.		
60	"	ⅦB 2	c-65-86	14.6 × 5.3 × 12.0	1,420	Mud.		
61	"	ⅦB 2	c-65-96	15.2 × 5 × 11.2	770	"		

するものである。3、は、へら状のものである。曲がりは火を受けたためかもしれない。いずれも鹿角製である。
(越田賢一郎)

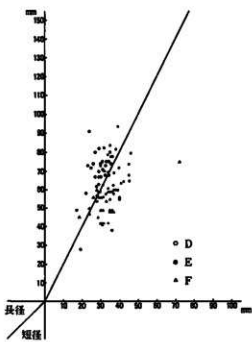
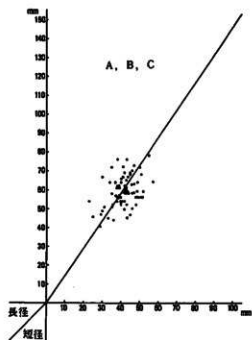
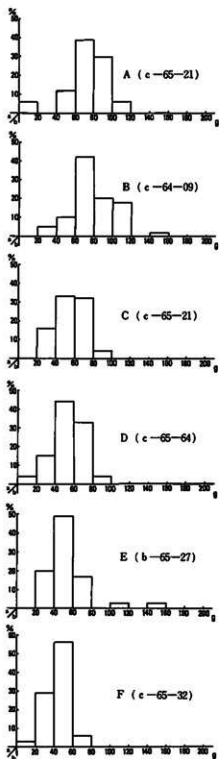
(5) 石器 (図 17)

I 黒層上面からは、剥片石器、礫石器あわせて 16 点、フレイク、礫・礫片が 1,283 点出土している。剥片石器は有茎のヤジリ (図 41-8) が 1 点のみであるが、これは攪乱等が原因でこの層に混入したものと推定される。礫石器は、泥岩製の石皿 (図 17-57) が 1 点、砥石 (58-61) が 13 点である。59 の砥石は砂岩製の粒子の荒いもので、使用面が 3 カ所ある。60 は、泥岩製の粒子の細かいもので、広い平滑な使用面をもつものである。56 は孔のあいた自然石である。
(遠藤香澄)

(6) 集中礫 (図 18)

I 黒層上面には、1,188 点の礫があり、7 カ所に集中地点がみられた (図 12)。集中礫のうち、A-E までの 6 群について比較したのが次のページの表である。

礫の形は、卵形のやや扁平なものが多く、特に細長いものはやや角柱に近いものがある。破砕礫は少なく、円礫がほとんどである。大きさは、長径 4-8 cm、短径 2-5 cm、重さは 30-100



a—百分比, b—重量

图18 I 黒層上面の礫

gの幅に集中しており、稀に200gを超す礫が含まれている。

各群の重量をみると、A、Bが平均79、87gと最も重く、C、D、Eが60g前後にまとまり、Fが42gと最も軽くなっている。

長径と短径の関係では、A、B群がほぼ同じところにまとまっている。また重量では差があるものの、C群もA、B群に近いところにまとまっている。A、B、C群は、全体として長径と短径の差が少ないもの、つまり円に近い平面形をもつものといえよう。これに対し、D、E群は細長い礫である。D群の場合平均で長径は短径の倍以上になっている。F群も、小型ではあるが、細長い形状をしている。

(7) 自然遺物

I黒層上面にみられた自然遺物は、次表の通りである。エゾシカの骨が多く、ほかに大型タジラの骨、アカニシ、ホタテガイなど海産のものがみられる。また、サケの歯、椎骨、ウグイの椎骨等がかなり含まれている焼土がある。表の他、カワシンジュガイが各所より検出されている。

第I黒色土層上面の自然遺物

発掘区	焼土	陸 獣	海 獣	魚・貝	発掘区	焼土	陸 獣	海 獣	魚・貝
d-65-79	—	エゾシカ			c-65-97	有	エゾシカ		サケ顎骨・歯 椎骨、ウグイ 椎骨
d-65-89	—	エゾシカ					鹿	角	
c-64-59	—			アカニシ					
c-65-64	—	鹿	角		c-65-98	有			サケ・ウグイ 椎骨
c-65-74	—			ホッキガイ?					
c-65-79	—	鹿	角					タジラ	
		エゾシカ			b-65-06	—			
c-65-84	—			ホタテガイ	b-65-08	有			ウグイ椎骨
c-65-87	—	エゾシカ			b-65-09	—	エゾシカ		
		角	座		b-65-18	—	エゾシカ		

3 珠洲系陶器とユウフツ越

珠洲系陶器は、東北日本の日本海沿岸を中心に、北海道まで広く分布している。かつては、能登半島の珠洲で生産されていた陶器が、日本海航路によって一元的に流通したと考えられていたが、最近の研究では、秋田周辺でも窯が発見されており、さらに産地が増加する可能性がある。¹⁸⁾産地の問題については、胎土の化学分析によって追究が行われており¹⁹⁾、珠洲諸窯の調査に基く編年作業とともに、珠洲系陶器の実体が次第に明らかになってきている。

北海道内において、珠洲系陶器は本遺跡のほか檜山・渡島地方を中心に、寿都町海岸、神恵内観音洞窟、千歳市末広遺跡、室蘭市絵柄遺跡から出土している。²⁰⁾上ノ国竹内屋敷出土の壺片は、I期(12世紀末～13世紀初)とされており、瀬棚からはIII期(13世紀後半)の片口鉢が出土している。²¹⁾しかし、ほかにはほとんどIV期(14世紀代)、V期(15世紀前半)、VI期(15世紀後半)のもので、V期以降が主体をなしている。器種は、片口鉢が多くI～IV期に壺、甕がわず

かにみられるだけである。V期以降は、片口鉢に限定されてしまう。

14・5世紀の珠洲系陶器に伴う中国陶磁には、青磁の碗・皿・鉢・盤等、天目碗がある。余市町大浜中出土のものは有名である。また国産陶器には、瀬戸の灰釉陶器皿・鉢、天目碗、越前の甕・片口鉢等がある。⁶²⁾

16世紀になると、道内には環元炎焼成の珠洲系片口鉢がみられなくなり、越前や東北地方北半の生産と考えられている酸化炭低火度焼成の片口鉢等にかわる。その理由として、16世紀初めに珠洲諸島の流通圏が能登半島の一部に限定され、越前の製品が東北日本に広がることあげられる。この時期の中国陶磁には、明の青磁・白磁に加えて、染付碗・小皿が多くみられるようになる。国産陶器には、越前のほか瀬戸・美濃の灰釉皿・天目碗も多い。⁶³⁾

本道跡周辺では、千歳市末広道跡から、珠洲系片口鉢のほか、明染付小皿・碗、美濃灰釉小皿・天目碗等が出土している。片口鉢の時期ははっきりしないが、他は16世紀中頃に位置づけられる。⁶⁴⁾また、釜加道跡では、赤褐色を呈する摺鉢がみられる。備前系統で、17世紀代のものである。⁶⁵⁾一方、本道跡の珠洲系片口鉢は、V期からVI期頃のもので、15世紀中頃の年代が考えられる。使用痕からみて、かなり伝世したものと思われるが、他の中世陶磁器類は出土していない。以上のことから、千歳市周辺では、15世紀代の珠洲系片口鉢を伴う時期と、16世紀代の染付等を伴う時期と17世紀代の備前系摺鉢の伴う時期の3つの遺物群の存在を想定することができそうである。だが、3者が連続するものかどうか、またそれぞれの遺物の組み合わせがどうなのかは、まだはっきりしていない。

本道跡のI黒層上面における片口鉢は、2～3cmの黒色土に覆われて出土している。Ta-b火山灰を直接かぶった状態で出土している焼土や鉈、斧などの遺物と比べて、古いものである。従って、I黒層上面の遺構・遺物は、15世紀中頃以降、Ta-b火山灰が降下する1667年までの約200年間に残されたものと考えられることができる。

ところで、中世陶磁器類の分布をみると、海岸に近い道跡から出土したものがほとんどでそれも日本海側に多い。これは当時日本海航路が盛んで、その延長として沿岸航路がひらけていたためと考えられる。これに対し、内陸にある千歳市の釜加、末広、美々8遺跡の陶磁器は、海岸部から内陸交通路によってもたらされたものである。この3遺跡が、後にユウフツ越とよばれるルート上にあることは、注目してよいであろう。

ユウフツ越は、千歳を経て日本海側と太平洋側を結ぶ交通路の、江戸時代後半における呼び名であり、美々7・8遺跡付近がこのルート上の美々舟着場であった可能性があることは、前章で述べた通りである。

Ta-b火山灰が降下した寛文7(1667)年頃に、この交通路が存在していたことを示す記録がある。寛文9(1669)年のいわゆるシャクシャインの乱について記した『寛文拾年秋蜂起集書』と『津軽一統志』に川筋を利用した舟による往来のことが簡単に記されている。また、寛文7年といわれる『蝦夷図』に、シコツ(千歳)をはさんで、石狩川上流の沼と勇弘川上流の沼を結ぶ交通路が線で示されている。⁶⁶⁾

これらの記録を裏付けるように、ユウフツ越の重要な水路の一つになっている勇弘川の岸辺から、Ta-b層に覆われた5艘の丸木舟が出土している。¹⁰丸木舟は、Ta-b火山灰の降下により沈没したと考えられている。厚さ1m近いTa-a層とb層が堆積する以前には、美沢川や美々川、勇弘川の流域は通航に便利で、これを利用して河川交通が開けていたのであろう。

美々8道跡のⅠ黒層上面に残された道構と道物は、何らかの形でこの交通路と関わりをもっていたのではないだろうか。出土遺物を見ると、珠洲系片口鉢をはじめ、金属製品はすべて本州よりの渡来品であり、わずかにマレックのみが地元で手を加えられた可能性がある。また、柱穴列の周辺よりカスガイや釘が出土することから、これによって上屋が築かれたと考えられる。このことは、和物だけが交易により流入したのではなく、和人が渡来した可能性を示すものといえよう。

生活跡に残された道跡と思われる溝は、美沢川の谷と北側の沢につらなっている。この道跡や柱穴の周辺に小砂利が散布している。小砂利は本来Ⅰ黒層中に含まれていないもので、川から運びあげた物などに付着していたものがこぼれ落ち、広がったものであろう。この道を下った美沢川の淵に、舟着場がつくられていたと考えるのは無理であろう。（越田賢一郎）

- 注) 1. 吉岡康暢 1981「中世陶器の生産と流通 (二)」考古学研究 110
2. 三辻利一 1981「分析化学的手法による古代土器の産地推定とその問題点」考古学研究 110 等
3. 吉岡康暢 1971「北海道の中世陶器」日本海文化 6
4. 注 3 文献
5. 佐々木達夫 1981「日本海の陶磁交易」日本海文化 8
6. 注 5 文献
7. 大谷敏三他 1981『木広道跡』
8. 吉岡康暢氏のご教示による。
9. 北方未公開古文書集成 7 所収
10. 佐藤一夫 1966「苫小牧市沼の端丸木舟発掘調査概要報告書」

IV 第I黒色土層の遺構と遺物

1 遺構

(1) 土 壙 (図19, 図版13)

位 置 f-65-88

規 模 上面 (1.10×1.05) 床面 (0.87×0.89) 深さ 0.42

形 状 平面形はほぼ円形。Ta-c層中に掘り込まれ、床面はわずかに第II黒色土層を掘り込んで作られている。用途は不明である。時期は鎌倉時代と思われる。

土 層 I : I 黒

II : 黒褐色土 (I 黒 > Ta-c)

III : 黄褐色土 (Ta-c > I 黒)

IV : 黒色土

遺 物 覆土と床面から鎌倉土器片5点と破片3点が出土した。

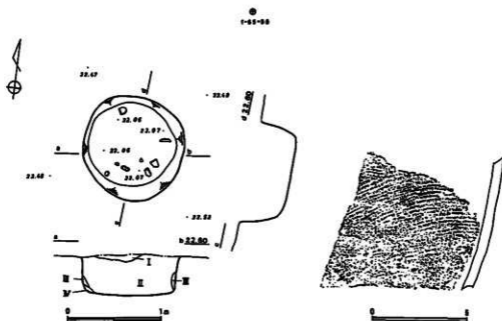


図19 土 壙

(2) 柱穴群 (図20)

c-65 南西部と、e-65 の一部に検出された。調査区域外におよぶため、その広がりは明らかでない。柱穴は、径 15~20 cm の太めのものから、径 5 cm ほどの細いものまでみられる。

柱穴の分布に規則性はみられない。しかし、柱穴群が検出された区域は、第Iグループの土器が多く出土した範囲と一致する。また I 黒層下部から Ta-c 層上面にかけ、踏み固められた

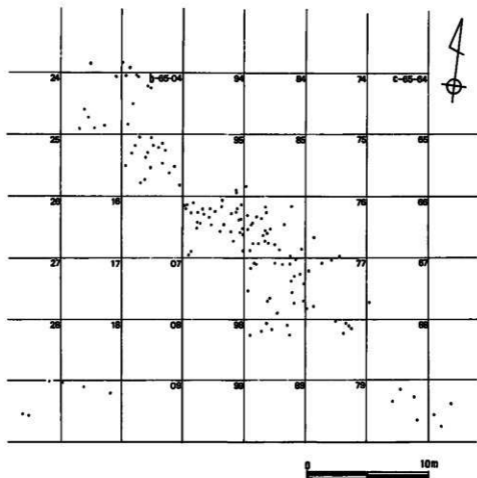


図20 柱穴群の分布

かのように堅い部分がある。簡単な建物が存在した可能性がある。

2 遺物

(1) 土器 (図25～図37、図版14～24)

第I黒色土層から出土した土器は縄文時代に属するものが主体である。他に縄文時代晩期末葉と縄文時代に属する土器が少量出土している。

縄文時代に属する土器には壺、甕、鉢、碗、皿、高坏、坏の器形があり、なかでも壺と坏が多い。壺には横走沈線を多用するもの、斜行沈線、縦走沈線、短刻線などの刻文が施されたものがあり、坏には粘土層積み成形のもの、ロクロ水挽き成形のものなどがある。これらの土器を層位的にとらえることはできなかったが、土器の分布は大きくみて三つの集中地区に分けら

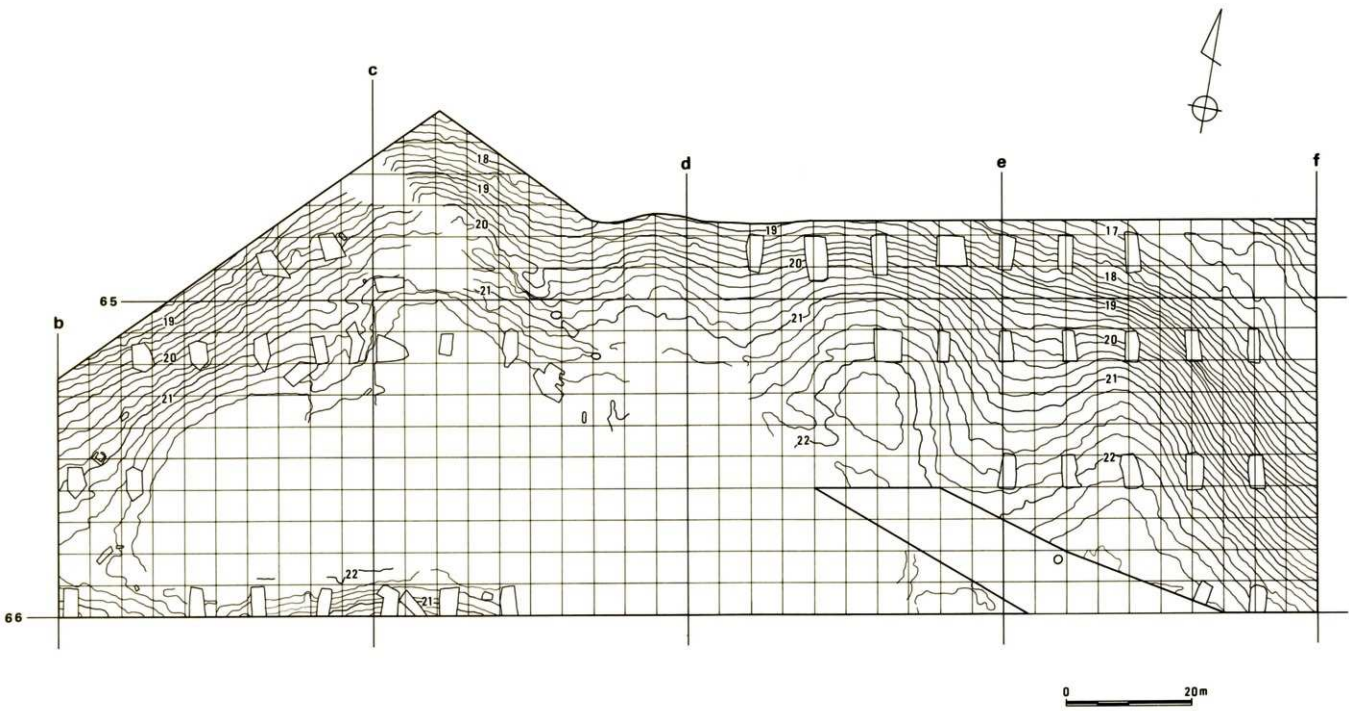


図21 I 黒層下面の地形

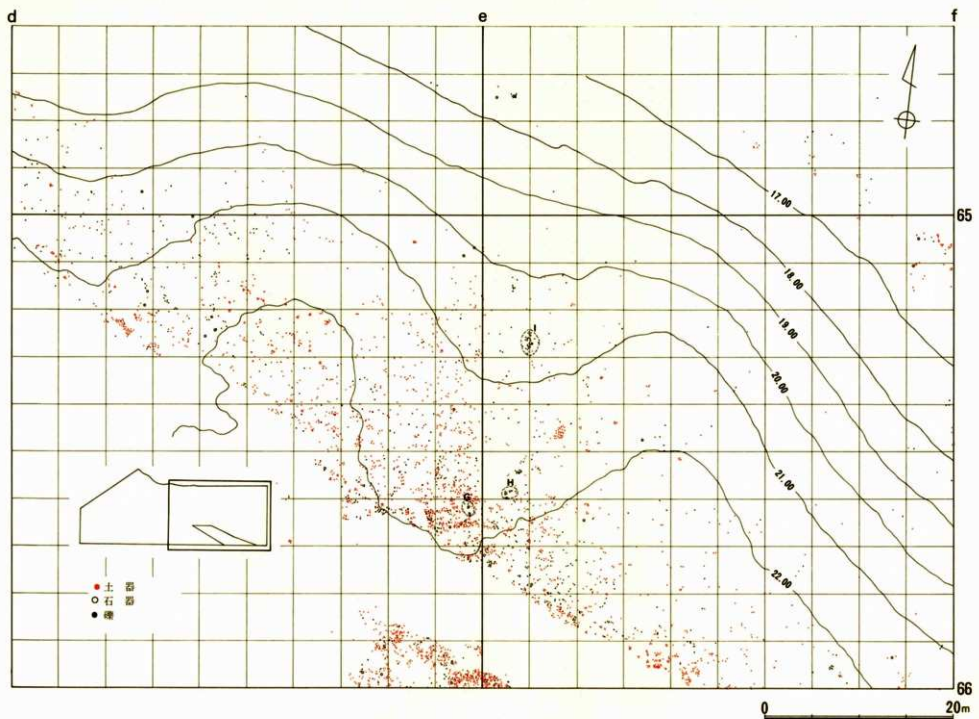


図22 I 黒層の遺物分布 (1)

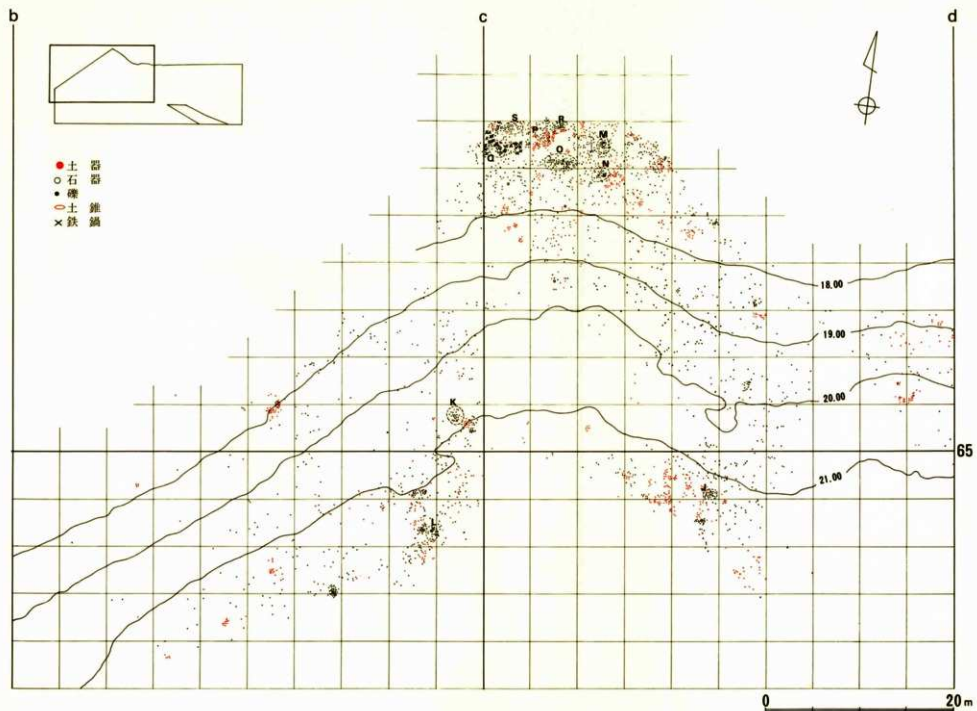


図23 Ⅰ層の遺物分布 (2)

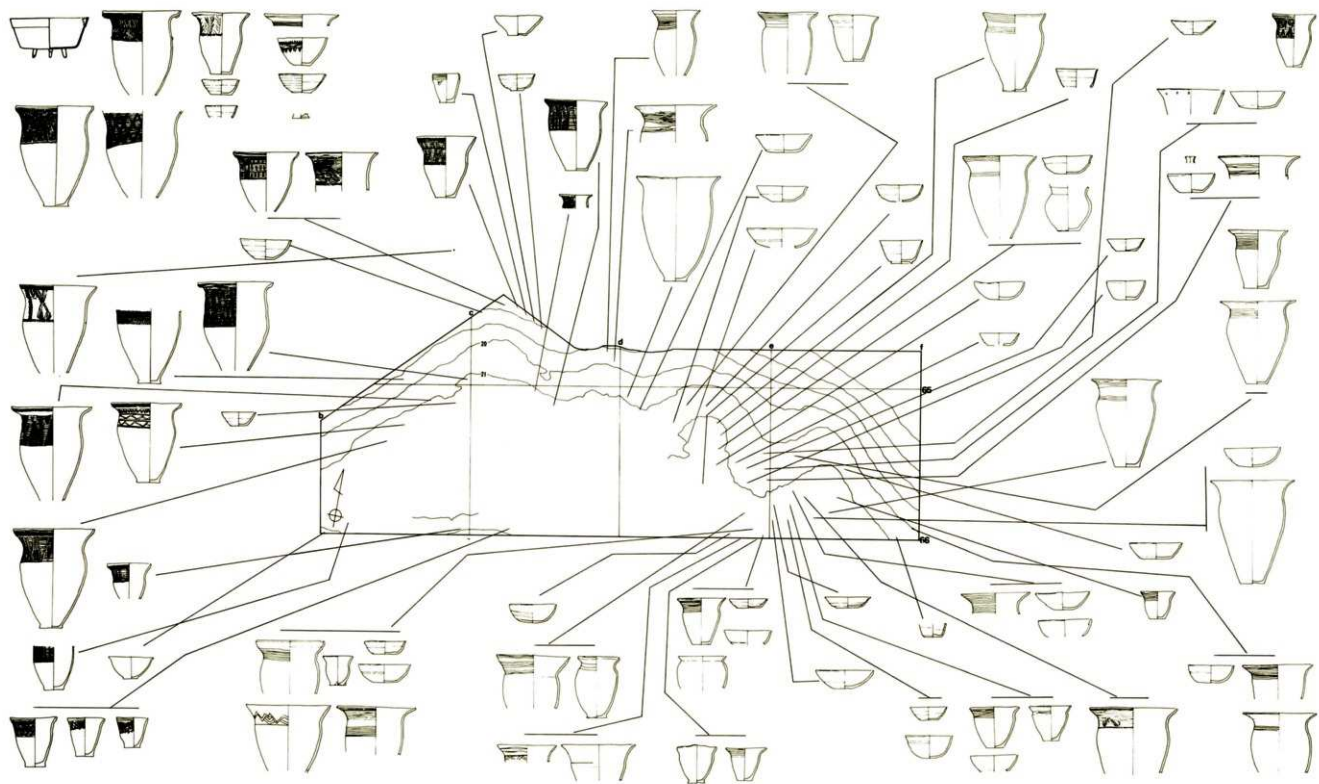


図24 古墳時代の土器分布

I 黒層の遺物

総計 26,515点

遺物名	分類	数量	備考	遺物名	分類	数量	備考
土器	I b-4	3		たたき石	VA3	1	
	Vc	205		擦石	VA1	1	
	W	1			WA	3	
	W(原文土器)	19,843		石皿	WB1	1	
	W(土師器)	1,831		砥石	WB2	7	
	W(須恵器)	390			WB破片	3	
土器計		22,273		石鍾	WA2	1	
やじり	IA3	9			WA破片	1	
	IA5	3		コア	IXA	7	
やり先・ナイフ	IB1	1		フレイタ・チップ	IXB	195	
石雑類	IIA	1		使用痕・加工痕のあるフレイタ	XA	6	
つまみ付きナイフ	IIIA2	1		使用痕のある礎	XB	18	
スタレイバー	IIIB2	1		礎		3,628	
石斧	WA2	2		土製品	土鍾	45	11個体
	WA破片	1			不明	1	
たたき石	VA1	1		金属製品	鍋	301	1個体
	VA2	3		石器等計		4,242	

れ、甕の場合、横走沈線を多用するものと、刻文の施されたものが集中地区を具にしている(図-24)。これらの集中をそれぞれ第1グループ、第2グループ、第3グループと名付け、グループごとに概略を記すことにする。個々の土器については観察表に示す通りである。

第1グループ(図25~図32)

発掘区の東南部から北西部にかけての台地上および北側の沢に向かう緩かな斜面に分布している(e-64, e-65, f-64, f-65)。

このグループの土器は口縁部に横走沈線をめぐらす甕で特徴づけられる。刻文が施されるものは少ない。甕は口縁部が外反するものが主体で、肩に段をもつものもたないものがあるが、両者に横走沈線をめぐらすものがある。横走沈線には棒状工具によるものと、へら状工具を引いて段を作出するものがあり、一個体の土器に併用されることもある。口縁部の一部、あるいは全周に刻目をもつものがある。甕の他には壺、碗、鉢、皿、坏がある。坏には紐痕み成形のもの、口ロ成形成のものがあり、前者には体部に段を作出するものが多い。

第2グループ(図33~図37)

発掘区の西側から北側にかけての沢と、沢に向かう斜面に分布している(c-64, c-65, d-64,

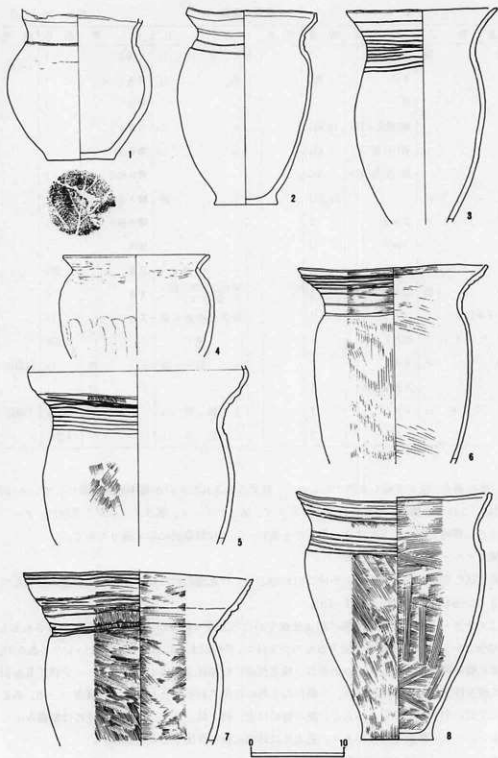


図25 I 黒層の遺物 (1)

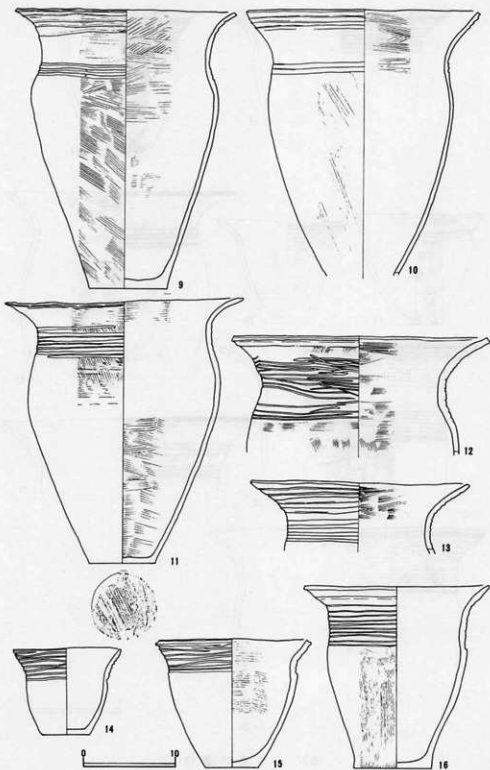


図26 I 黒層の遺物(2)

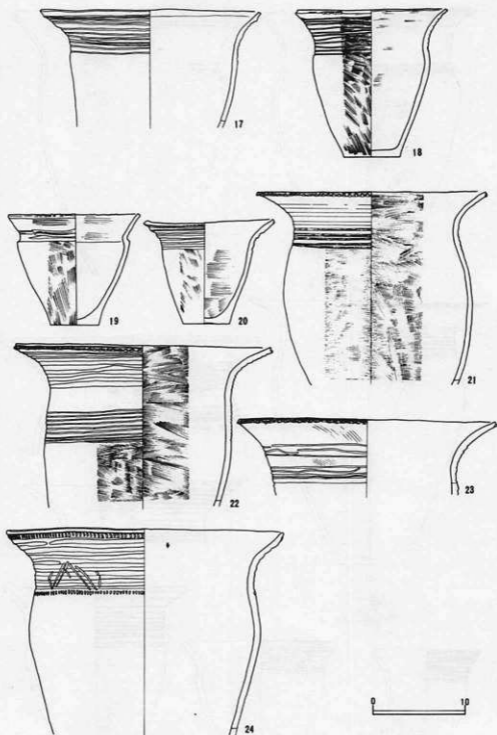


図27 I 黒層の遺物 (3)

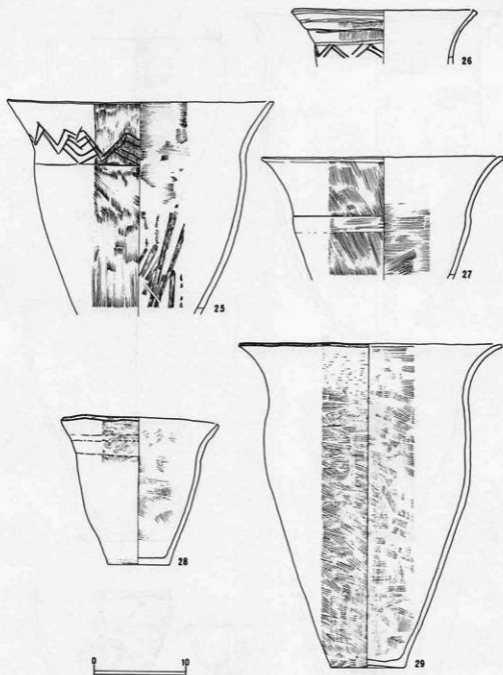


図28 I 黒層の遺物 (4)

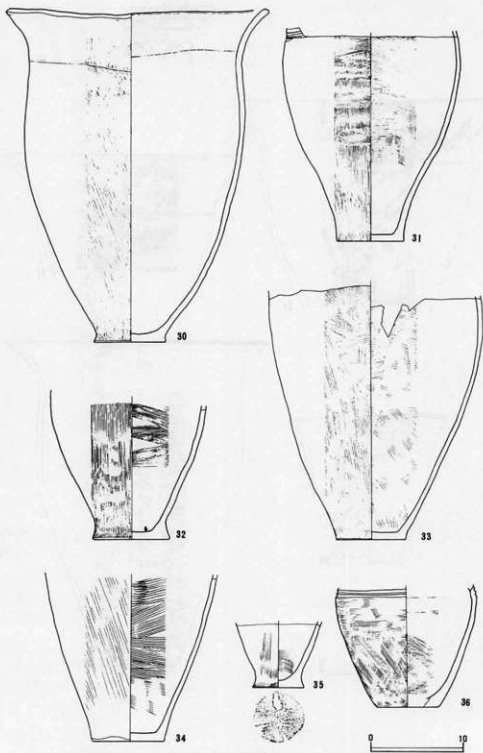


図29 I 黒層の遺物 (5)

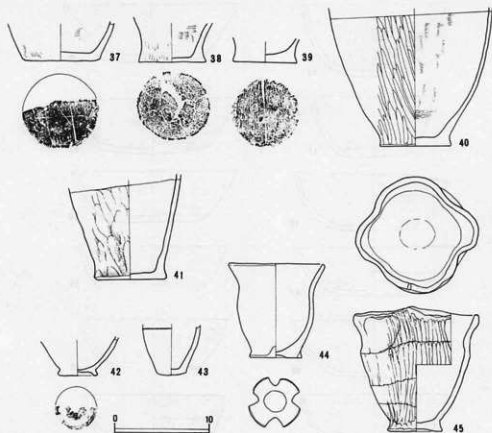


図30 I 黒層の遺物 (6)

d-65)。特にc-64区の沢の部分に集中する傾向がみられる。

刻文の施された甕が主体である。刻文が施された甕には口縁部が外反するものと、口縁部が外反して上部で立ち上るものがあるが、後者が多い。横走沈線、交差する斜行沈線、縦走沈線、短刻線などが組み合わされた文様帯をもつ。なお文様帯の地に横走沈線をもたないもの、あるいは文様帯が多段となるものがある。甕の他には刻文が施された鉢、土師器杯、椀、土師系須恵器杯、土師器系鉢などがある。

第3グループ (図37)

発掘区西部の美沢川に向かう南側斜面で比較的せまい範囲に集中していた。三つのグループのうち分布範囲が最もせまく、出土点数も少ない(c-65, d-65)。

第2グループと同様、刻文の施された甕が主体で、他に体部にハケ目をもつ内黒の鉢がある。

第1グループ、第2グループでみられた土師器杯、須恵器杯は出土していない。(工藤研治)

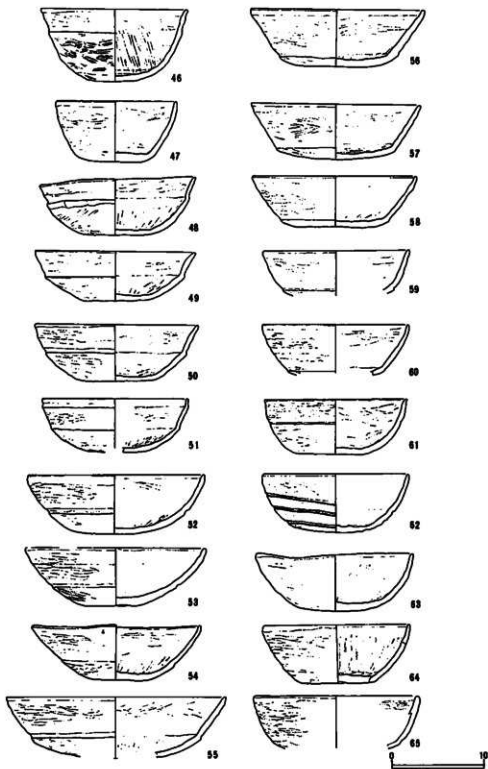


図31 I 風層の遺物 (7)

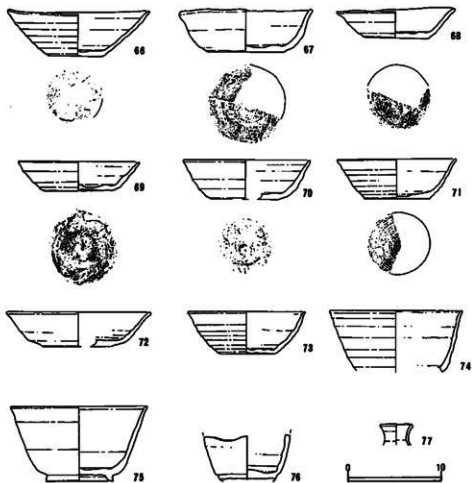


図32 I 風層の遺物 (8)

1) 土師器・須恵器等について

第1～3グループの土器には、土師器、須恵器、土師質須恵器*、土師器系土器*、刻文土器がある。ここでは刻文土器を除いた各種土器の観察の結果をのべることとする。

- ※1 色調が淡褐色ないし灰褐色を呈し、器肌が土師器的で、須恵器的な製作技法をもつものを土師質須恵器とした。
- ※2 一般的な整形技法は土師器と同様のものであるが、形體的にはここで言う土師器とは明らかに差がみられ、いわば土師器的様相をもった土器である。

(65ページに続く)

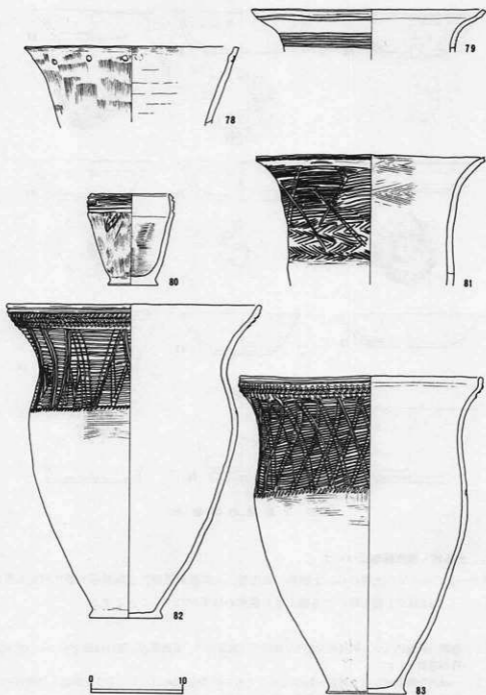


図33 I 黒層の遺物 (9)

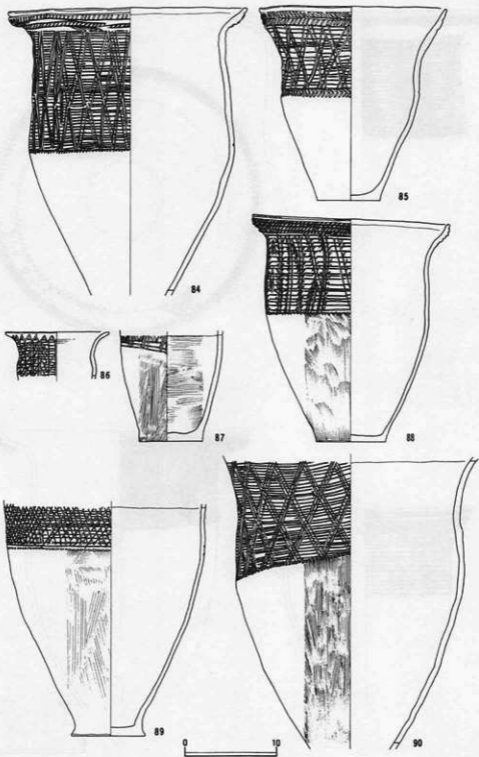
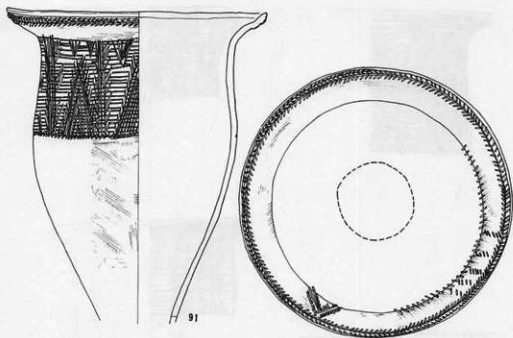
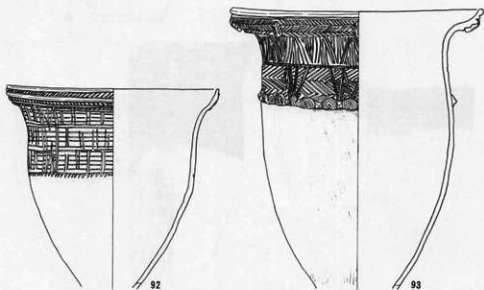


図34 I 黒層の遺物 (10)



91



92

93

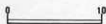


図35 I 黒層の遺物 (1)

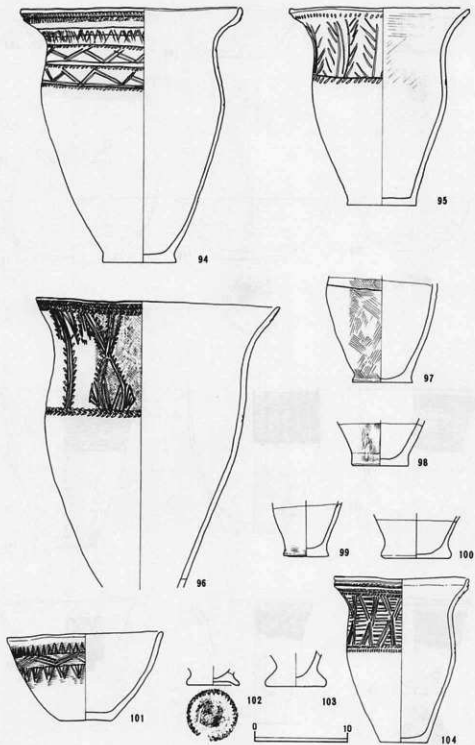


図36 I 黒層の遺物 (2)

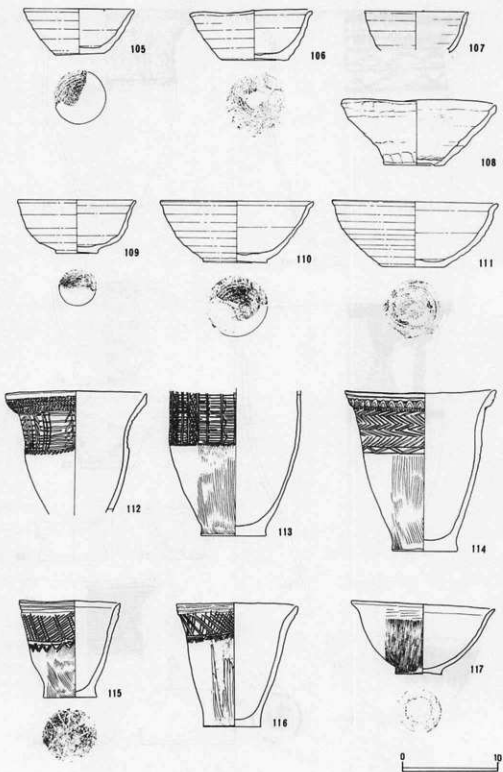


図37 I 黒層の遺物 (3)

土師器 (1、2、4、46~65、105、109~111)



壺(1、2)・甕(4)：壺、甕に共通する整形手法は、口頸部のなでおよび胴部のヘラみがきである。4は内面を黒色処理しており、胴部中位以下にはヘラけずりがなされ、その後口頸部および胴部の内外面ともにヘラみがきが行なわれている。整形手法は後述する粘土紐積み上げ成形の鉢、碗、坏に共通する。壺、甕とも最大幅を胴部にもつ。

鉢(55)：整形手法は粘土紐積み上げ成形の坏と同じである。丸底をなすものと思われる。

碗(46、47、109~111)：46は体部上位に稜(段)をもち、体部にハケ目を残すが、最終的な器面調整はヘラみがきである。47は体部が内凹気味に立ち上がり、体部、底部の内外面ともにヘラみがきがなされる。109~111はいずれもロクロ成形で、109、110には高台がつく。110の内面には黒色処理がなされる。109~111とも切り離しは回転糸切りによる。

坏(48~54、56~66、105)：① 粘土紐積み上げ成形のものが大半を占める(48~54、56~65)。これらに共通した整形手法は、体部および底部の内外面にみられるヘラみがきである。体部の中位から上位、体部の下端に稜(段)を作出するもの(48~54、56~60)とそうでないもの(61~65)とがある。底部形態には丸底と平底があり、平底のものは、底面観が直線的でなくやや丸味をおびる。

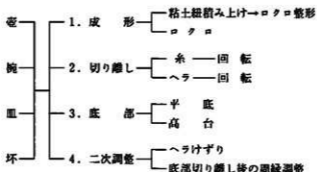
② 内面を黒色処理しているものが多い(48~54、56、58、60~65)

③ ロクロ成形のものは、第1・第2グループに各1点のみである(66、105)。66は右回転ヘラ切り離し、105は回転糸切り離しがなされる。105の体部下端にはヘラけずりによる器面調整が行なわれている。

碗と坏についてみると、第1グループには粘土紐積み成形のものが多く、第2グループはロクロ成形のものだけである。第1グループと第2グループには時間差があるものと思われる。

須恵器(68~72、74~77)

第2・第3グループには出土していない。



壺(76, 77)：いずれもロクロ成形である。76には高台が付き、器形および内面のつくりから短頸壺の一種と思われる。77は口頸部だけで、薄手のものである。頸部は短く、肩部が張る器形をなすものと思われる。

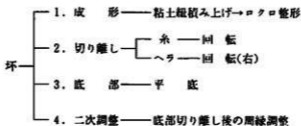
碗(74, 76)：2個とも深底で、ロクロ成形。75は付け高台である。いずれも器面の荒れはみられず丁寧な仕上がりである。他の須恵器よりも整形、胎土が良い。

皿(68, 69, 72)：ここで皿としたものは、内面で底部と体部の境が明瞭でなく扁平な形状をもつもので、坏よりも浅い。3個とも胎土に多くの砂粒が含まれている。68, 69, 72は粘土紐積み成形の後にロクロによる整形がなされたものである。72は高台状の底部をもつ。68は左回転ヘラ切り離し、69は右回転ヘラ切り離し、72は回転糸切り離しが行なわれている。

坏(70, 71)：2個とも胎土に多くの砂粒を含んでいる。70, 71とも粘土紐積み成形の後にロクロ整形がなされている。70, 71ともに切り離しは回転糸切りである。

土師質須恵器 (67, 73, 106, 107)

坏だけである。



67, 73は右回転ヘラ切り離しで、105は回転糸切り離し後に底部周縁を手もちヘラけずりによって調整している。107は口縁部だけが青灰色を呈しており、焼成は他の3点とくらべて良い。いずれも粘土紐積み成形後にロクロ整形がなされたもので、須恵器の成形と共通する。

土師器系土器 (3, 5~8, 9~23, 27~36, 44, 45, 79, 80, 108, 117)。

このタイプの土器は大半が第1グループに含まれており、第2, 3グループではわずかであ

(88ページに続く)

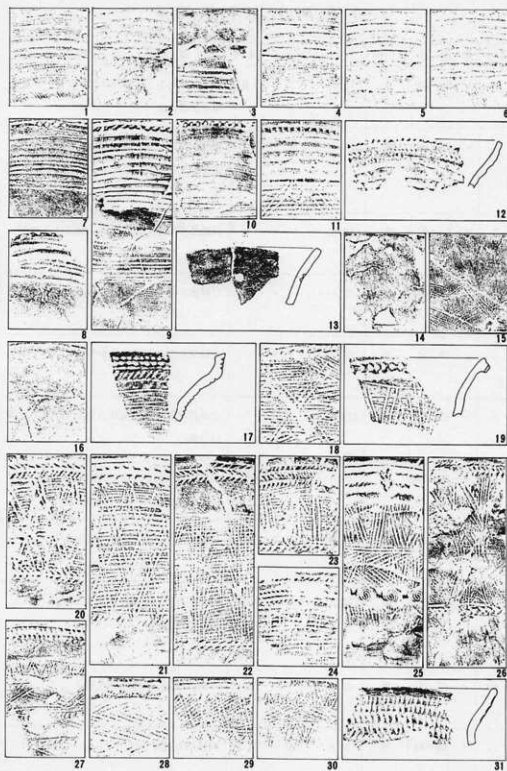


図38 I 黒層出土土器の文様

I 黒層の土器観察表

番号	発掘区	名称	口・底・高(㎝)	器形の特徴
1	e-65-34	壺	(13.0)・7.2・(15.6)	肩部に段をもつ。胴部は球形に近い。最大幅を胴部にもつ
2	e-65-18	甕	14.5・7.0・20.7	頸部がくびれ、口縁部が垂直に立ち上がる。頸部および肩部に段をもつ。底部が張り出す
3	d-64-07	甕	(16.5)・—・—	口縁部がゆるやかに外反。胴部はやや丸味をおび、細身である
4	e-65-09	甕	(22.8)・—・—	口縁部が「く」の字形に外反する
5	e-65-51	甕	20.7・—・—	口縁部外反。肩部に段をもつ
6	e-65-19	甕	(24.0)・—・—	口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。肩部は段状
7	e-65-18 -19	甕	25.0・—・—	口縁部は肩部から直線的に外反する。肩部に段をもつ
8	e-65-32	甕	21.3・7.7・26.2	口縁部外反。肩部が張り段をもつ
9	f-65-78	甕	24.2・8.5・30.2	口縁部外反。肩部が張り段をもつ
10	e-65-34 -43	甕	25.3・—・—	口縁部外反。肩部がやや張る
11	f-65-84	甕	26.0・7.3・28.3	口縁部大きく外反

成 形 の 特 徴	文 様	備 考
口頸部など。肩部から胴部下半にかけてヘラミがき。内面みがき		土師器 底面木葉痕
口頸部内外面ともになって。肩部から胴部下半にかけてヘラミがき	頸部に浅い横走沈線をもつ	土師器
口頸部など。胴部ハケ目+みがき。内面ハケ目あり	頸部から胴上部にかけて横走沈線をもつ	土師器系土器
口縁部横方向へのヘラミがき。胴部上半などで。胴部下半ヘラけずり。内面みがき		土師器 内黒
口縁部と底部の内外面にヘラミがき。胴部条痕+みがき。内面粗い条痕		土師器系土器
口縁部など。頸部から胴部ハケ目+みがき 内面ハケ目		土師器系土器
頸部縦位粗いハケ目。胴部は主として粗いハケ目。内面にも粗いハケ目あり	口頸部横走沈線	土師器系土器
口頸部など。肩部から胴部下半にかけてハケ目。内面ハケ目	口縁部は段状をなし以下無文帯をはさみ横走沈線をもつ	土師器系土器
口縁部など。頸部から底部にかけて条痕あり。内面では口縁部から胴上部にかけて条痕、胴下部みがき	口縁部は段状をなし以下無文帯をはさみ横走沈線をもつ	土師器系土器
口縁部など。頸部ヘラミがき。胴部条痕+みがき。内面条痕+みがき	口縁部段状をなす。以下無文帯をはさみ浅い横走沈線	土師器系土器
口縁部など。頸部、胴上部条痕+みがき。胴部から底部にかけてヘラミがき	頸部に横走沈線をもつ	土師器系土器 底面ヤヤ状痕

番号	発 期 区	名 称	口 ・ 底 ・ 高 (mm)	器 形 の 特 徴
12	e-65-05	甕	26.5 ・ — ・ —	口縁部外反
13	e-65-96	甕	23.7 ・ — ・ —	口縁部外反
14	f-65-57	甕	11.8 ・ 5.0 ・ 9.4	口縁部外反
15	f-65-87 -88	甕	16.9 ・ 5.7 ・ 14	口縁部外反。肩部に段をもつ。口唇に稜をもつ
16	f-65-84	甕	20.1 ・ 8.5 ・ 19.9	口縁部外反。肩部に段をもつ。底部やや張り出す
17	f-65-69	甕	24.0 ・ — ・ —	口縁部外反
18	e-65-09	甕	16.5 ・ 6.2 ・ 15.8	口縁部外反。口唇に稜をもつ。肩が張る
19	f-65-87	甕	14.3 ・ 5.3 ・ 11.8	口縁部外反。肩部に段をもつ
20	e-66-00	甕	14.3 ・ 4.8 ・ 10.8	口縁部外反。口唇に稜をもつ
21	f-65-69	甕	25.0 ・ — ・ —	口縁部外反
22	e-65-19	甕	28.2 ・ — ・ —	口縁部外反。口唇部に稜をもつ
23	e-65-06	甕	28.0 ・ — ・ —	口縁部外反

成 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
口縁部から頸部にかけてハケ目+なで。内面ハケ目+なで	頸部に横走沈線	土師器系土器
口縁部なで。口縁部内面ハケ目	口縁部から頸部にかけて段状をなす	土師器系土器 口縁部内外面に丹塗
口縁部から頸部にかけてなで。胴部および内面ハケ目	口縁部から頸部にかけて横走沈線	土師器系土器
口縁部なで。胴部ヘラみがき。内面ハケ目	口縁部から頸部にかけて横走沈線	土師器系土器
口縁部から頸部にかけてなで。胴部縦位のハケ目。内面なで	口縁部は段状をなし頸部から肩部にかけて横走沈線をもつ	土師器系土器
口縁部から頸部にかけてなで。胴部内外面ともにハケ目。口縁部内面ハケ目+なで	口縁部から頸部にかけて横走沈線	土師器系土器
口縁部から頸部にかけてなで。胴部内外面ともにハケ目。口縁部内面ハケ目+なで	口唇の稜線上の一部に刻み目をもつ	土師器系土器
口縁部なで。胴部ハケ目。内面みがき	口唇上の一部に刻み目。頸部に横走沈線をもつ	土師器系土器
口縁部なで。胴部ハケ目+ヘラけずり	口唇稜線上の一部に刻み目	土師器系土器
口縁部なで。胴部内外面ともにハケ目。口縁部内面ハケ目+なで	口唇上に刻み目がめぐる。口縁部から頸部にかけて横走沈線をもつ	土師器系土器
口縁部から底部にかけてなで。胴部内外面ハケ目	口唇部稜線上に刻み目がめぐる。口縁部段状。無文帯をはさみ横走沈線あり	土師器系土器
口頸部内外面ともにハケ目+みがき	横走沈線あり	土師器系土器

番号	発掘区	名称	口・底・高(㎝)	器形の特徴
24	f-65-77	甕	30.0・—・—	口縁部外反しややたちあがる
25	e-65-19	甕	29.0・—・—	口縁部外反
26	e-66-10	甕	20.2・—・—	口縁部外反しややたちあがる
27	e-66-00	甕	(26.2)・—・—	口縁部外反。肩にゆるやかな段をもつ
28	e-65-51	甕	17.2・6.7・16	口縁部ゆるく外反。肩にゆるやかな段をもつ。口唇に段をもつ
29	f-65-78	甕	28.6・8.0・35.1	口縁部外反
30	e-65-90	甕	28.7・7.7・35.5	口縁部外反。底部張り出す
31	f-65-69	甕	—・7.4・—	
32	f-65-99	甕	—・8.4・—	底部張り出す
33	f-65-86	甕	—・7.5・—	
34	e-65-16	甕	—・7.8・—	
35	e-66-10	甕	—・5.4・—	底部張り出す

成 壺 形 の 特 徴	文 様	備 考
口縁部など。胴部および内面へラミがき	口縁部から頸部にかけて横走沈線。部分的に斜位の沈線。口縁部肩部に刻み目	丹塗り痕跡あり
胴上半ハケ目。胴下半ハケ目+ミがき。口縁部内面ハケ目。胴部内面ハケ目+ミがき	頸部に鋸歯状の沈線	
口縁部内外面ともにハケ目+なで	口縁部はゆるい段をなし無文帯をはさんで頸部に横走沈線。横走沈線の下に鋸歯状沈線	
口縁部ハケ目。肩部・胴部ハケ目+へラミがき。肩部のへラミがき強い。内面口縁部ハケ目+へラミがき。胴部ハケ目		土師器系土器
口縁部ハケ目。胴部ハケ目+へラミがき。頸部部分的に横走するなで。内面ハケ目		土師器系土器
口縁部から頸部にかけてなで。胴部ハケ目。内面ハケ目		土師器系土器
口縁部内外面ともになで。頸部ハケ目+なで。胴部ハケ目+へラミがき。胴部内面ハケ目		土師器系土器
胴部ハケ目+部分的にミがき。内面ハケ目+なで	頸部横走沈線	土師器系土器
内外面ともにハケ目		
内外面ともにハケ目		
胴部粗いハケ目+へラミがき。内面粗いハケ目		
胴部ハケ目+へラミがき。内面ハケ目		底面ヤヤ圧痕

番号	発掘区	名称	口・底・高(m)	器形の特徴
36	e-65-09	甕	—・6.8・—	
37	e-65-19		—・8.0・—	
38	e-65-29		—・7.2・—	底部張り出す
39	f-65-69		—・—・—	底部張り出す
40	e-65-06		—・6.9・—	底部やや張り出す
41	e-65-34		—・7.8・—	底部やや張り出す
42	e-65-42		—・4.3・—	底部張り出す。揚げ底
43	e-65-41		—・3.5・—	
44	e-65-19		10.3・5.5・9.8	口縁部外反。やや肩が張る。底部四ヶ所切りこみあり。底面くぼみあり
45	e-66-00		13.3・57・13.0	口縁部四ヶ所突出。底部張り出す
46	f-65-88	碗	16.0・—・8.0	口縁部外に広がる。体部上位わずかに稜が作出される。丸底
47	e-63-16	碗	13.1・6.5・6.7	
48	e-65-34	坏	16.6・6.0・6.0	口縁部外反。体部上位に稜をもつ
49	e-65-62	坏	17.5・6.0・5.7	口縁部外反。体部中位に稜をもつ
50	e-65-19	坏	17.8・6.5・6.0	口縁部外反。体部中位に稜をもつ

成 形 の 特 徴	文 様	備 考
胴部ハケ目+ヘラミがき。内面ハケ目	頸部横走沈線	土師器系土器 底面サヤ圧痕
底部内外面ともにハケ目		底面サヤ圧痕
底部ヘラミがき。内面ハケ目+ヘラミがき		底面木葉痕
底部なで。内面ハケ目		底面サヤ圧痕
胴部ヘラミがき。底部ハケ目+なで。内面ハケ目+ヘラミがき		
胴部ハケ目+ヘラミがき		
胴部ヘラミがき		
内外面ともになで		
口縁部胴部内外面ともにミがき。底部なで		土師器系土器
外面粗雑なヘラミがき。口縁部内面なで。胴部内面ミがき	底部刻み目あり	土師器系土器
口縁部なで+ミがき。体部粗いハケ目+ミがき。底部ヘラ削り+ミがき。内面斜めのヘラミがき		土師器 内黒
体部ヘラミがき。底部なで。内面ヘラミがき+なで		土師器
口縁部なで。体部および底部丁寧なヘラけずり。内面、口縁部なで。底部放射状のヘラミがき		土師器 内黒
内外面ともにヘラミがき		土師器 内黒
口縁部なで。体部および底部ヘラミがき。内面ヘラミがき+なで		土師器 内黒

番号	発掘区	名称	口・底・高(㎝)	器形の特徴
51	e-65-41	坏	22.0・—・8.0	口縁部・体部に稜をもつ。直立に近い口縁部をもつ
52	f-65-78	坏	19.4・—・6.3	半球形を呈し口縁部わずかに内傾する。体部に浅い沈線を環しわずかな稜を作出している。丸底に近い。
53	f-65-98	坏	19.8・5.5・6.4	口縁部外反。体部に稜をもつ
54	f-65-86	坏	18.5・5.5・6.0	口縁部外反。口唇がわずかに内傾する
55	e-65-53	鉢	25.3・—・—	口縁部外反。体部下位に稜をもつ
56	e-65-81	坏	19.0・8.5・6.0	口縁部外反。体部下端に稜をもつ
57	e-65-05	坏	18.4・—・6.0	口縁部外反。体部下端に稜をもつ。丸底に近い。
58	f-65-55	坏	17.8・9.5・5.5	口縁部外反。体部下端に稜をもつ
59	e-65-09	坏	16.0・—・—	口縁部外反。体部下端に沈線を環しわずかな稜をもつ
60	f-65-87	坏	22.8・—・—	口縁部外反。体部下端に稜をもつ
61	f-65-69	坏	15.5・9.0・5.3	半球形を呈し腕に近い形態をとる。体部に浅い沈線を環す
62	e-65-29	坏	15.9・—・6.5	半球形を呈し腕に近い形態をとる。丸底
63	e-65-35	坏	13.1・6.5・6.7	半球形を呈す。丸底に近い。

成 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
体部へラミがき。底部粗いハケ目+へラミがき。内面へラミがき		土師器 内黒
口縁部まで。体部底部へラミがき		土師器 内黒
体部内外面ともにへラミがき。底部へラけずり		土師器 内黒
体部内外面ともにへラミがき。底部内面放射状のへラミがき		土師器 内黒
口縁部内外面ともになで。体部内外面ともにへラミがき		土師器
内外面ともにへラミがき		土師器 内黒
口縁部まで。体部底部粗いハケ目+へラミがき。内面へラミがき		土師器
口縁部まで。体部底部へラミがき。底部内面放射状のへラミがき		土師器 内黒
口縁部まで。体部内外面ともにへラミがき		土師器 内黒
口縁部、体部内外面ともにへラミがき		土師器。内黒。縦縞が認められる
口縁部、体部内外面ともにへラミがき		土師器 内黒
体部内外面ともにへラミがき		土師器 内黒
内外面ともにへラミがき。底部内面放射状のへラミがき		土師器 内黒

番号	発掘区	名称	口・底・高	器形の特徴
64	e-65-06	坏	15.9・6.5・6.5	口縁部わずかに内彎
65	f-65-86	坏	18.5・—・6.0	口縁部わずかに内彎
66	e-65-04	坏	15.2・6.0・4.5	底部から直線的に広がる体部をもつ。内外面ともにわずかな凹凸をもつ
67	e-65-19	坏	17.8・6.5・6.0	底部から体部にかけてやや内彎ぎみに立ち上がり、口縁に至って外反する。底部内面に凹凸あり
68	e-65-09	皿	16.0・10.5・5.3	底部内面に凹凸をもち体部にかけてやや内彎ぎみに立ち上がり口縁部に至って大きく外反する
69	f-65-87	皿	22.8・—・7.6	底部内面に凹凸をもち体部にかけてやや内彎ぎみに立ち上がり口縁部に至って外反する
70	f-65-57	坏	—・—・—	底部内面に凹凸をもち内彎ぎみに立ち上がり、口縁部でわずかに外反する
71	e-65-15	坏	12.8・(7.0)・4.2	底部から内彎ぎみに立ち上がり口縁部で外反する。体部に明瞭な凹凸をもつ
72	f-65-97	皿	(15.0)・(7.0)・3.5	底部から体部にかけて内彎ぎみに立ち上がり口縁部で外反する。底部と体部の境に調整を加えわずかに高台を作出する
73	e-65-24	坏	13.5・7.5・3.5	底部から体部にかけて内彎ぎみに立ち上がり口縁部で外反する
74	e-65-33	碗	14.0・—・—	体部はやや直立ぎみに立ち上がる。体部に凹凸を残す

成 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
口縁部にて。体部底部へラみがき。体部内面縦位へラみがき		土師器 内黒
口縁部にて。体部内外面ともにへラみがき		土師器 内黒
底部右回転へら切り。ロクロ成形		土師器
底部右回転へら切り。粘土紐積みの後、ロクロ整形		土師質須恵器
底部左回転へら切り。粘土紐積みの後、ロクロ整形		須恵器
底部右回転へら切り。粘土紐積みの後、ロクロ整形		須恵器
回転糸切り。粘土紐積みの後、ロクロ整形		須恵器
回転糸切り。粘土紐積みの後、ロクロ整形		須恵器
回転糸切り。粘土紐積みの後、ロクロ整形		須恵器
底部右回転へら切り。粘土紐積みの後、ロクロ整形		土師質須恵器
ロクロ成形		須恵器

番号	発掘区	名称	口・底・高 ^{mm}	器形の特徴
75	e-65-46	碗	14.6・7.2・7.8	底部内面に凹凸をもち内湾ぎみに立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。貼り付け高台
76	f-65-19	壺	—・(5.5)・—	底部内面に凹凸をもち直立ぎみに立ち上がる。高台付き
77	e-65-36	壺	(3.5)・—・—	口縁部に稜をもつ
78	d-64-08	甕	22.5・—・—	口縁部ゆるやかに外反
79	d-64-73	甕	22.5・—・—	口縁部外反し、ゆるやかに立ち上がる
80	d-64-65	甕	(13.6)・5.5・9.9	口縁部が垂直に立ち上がり、口唇が内傾。底部が張り出す
81	d-64-74	甕	(24.8)・—・—	口縁部外反し稜をもつ
82	c-65-53	甕	28.7・7.9・33.9	口縁部外反しやや内傾。口縁部に隆帯あり。底部張り出す
83	d-64-94	甕	26.3・8.6・34.4	口縁部外反し上部で立ち上がる。口縁部に隆帯あり。底部張り出す
84	c-64-09	甕	28.8・—・—	口縁部外反し上部で立ち上がる。口縁部に隆帯あり

成 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
底部ヘラ切り。口クロ成形		須恵器
内面外面ともなで。口クロ成形		須恵器
口頸部なで。口クロ成形		須恵器
口縁部内外面ともになで。胴部ハケ目+ヘラミがき	外側から突いた突縮文あり	
口縁部内外面ともになで。頸部内面ハケ目	口縁部頸部無文帯をはさんで横走沈線あり	土師器系土器
口縁部内外面ともになで。胴部ハケ目+ヘラミがき。底部ハケ目+なで。胴部内面ハケ目	口縁部横走沈線	土師器系土器
口縁部なで。頸部ハケ目。胴部ハケ目+ヘラミがき。内面粗いハケ目+ヘラミがき	口縁部稜線上に斜めの短刻。頸部上半横走沈線+斜行沈線。頸部下半絞杉状沈線+斜行沈線	
口縁部ヘラミがき。頸部ハケ目。胴部ハケ目+ヘラミがき。内面ヘラミがき	口縁部隆帯上および文様帯下端に短刻あり。頸部横走沈線+斜行沈線	内黒
口縁部なで。頸部ハケ目。胴部ハケ目+ヘラミがき。底部ハケ目。内面ヘラミがき	口縁部隆帯上および文様帯下端に短刻あり。頸部横走沈線+斜行沈線	
口縁部なで。頸部ハケ目。胴部ヘラミがき。内面ヘラミがき	口縁部隆帯上および文様帯下端に短刻あり。頸部横走沈線+縦および斜行沈線	

番号	発掘区	名称	口・底・高(m)	器形の特徴
85	d-64-64	甕	20.4・6.7・21.0	口縁部外反し上部で立ち上がる。口縁部隆帯あり
86	d-65-50	甕	(11.3)・—・—	口縁部外反
87	d-65-41	甕	21.5・7.4・24.2	口縁部外反し上部でやや立ち上がる
88	d-65-51	甕	—・6.8・—	
89	c-64-49	甕	—・8.0・—	底部張り出す
90	d-64-93	甕	—・—・—	口縁部外反すると思われる
91	c-65-21	甕	27.5・—・—	口縁部外反し上部で立ち上がる
92	d-64-74	甕	22.5・—・—	口縁部外反し上部で立ち上がる
93	d-64-93	甕	26.8・—・—	口縁部外反し上部で立ち上がる

成 形 の 特 徴	文 様	備 考
口縁部など。頸部ハケ目。胴部ヘラミがき。 内面ヘラミがき	口縁部隆帯上および文様帯下端 に刻み目あり。頸部横走沈線＋ 斜行沈線	
口縁部および頸部など。内面ヘラミがき	横走沈線＋縦および斜行沈線	
口縁部など。胴部および底部粗いハケ目＋ なで。内面ヘラミがき	口縁部隆帯上および文様帯下端 に短刻あり。頸部横走沈線＋縦 走沈線＋斜位短刻	
胴部内外面ともに粗いハケ目	頸部横走沈線＋斜行沈線。文様 帯下端に短刻あり	
頸部ハケ目。胴部ハケ目＋ヘラミがき。底 部ハケ目＋なで。内面ハケ目＋ヘラミがき	頸部横走沈線＋斜行沈線。文様 帯下端に短刻あり	
胴部ハケ目＋部分的にヘラミがき。内面ヘ ラミがき	頸部横走沈線＋斜行沈線。文様 帯下端に短刻あり。沈線はごく 浅い	
口縁部ハケ目＋なで。頸部ハケ目。胴部ハ ケ目＋部分的にヘラミがき。内面ヘラミが き	口縁部隆帯上および文様帯下端 に短刻あり。頸部横走沈線＋縦 走沈線＋山形沈線＋斜位短刻	
口縁部など。胴部および内面ヘラミがき	口縁部隆帯上および文様帯下端 に短刻あり。頸部横走沈線＋縦 走沈線＋斜行沈線	
口縁部など。頸部および胴部ハケ目。内面 ヘラミがき	口縁部隆帯上に貼り縮。隆帯お よび貼り縮上に短刻線あり。文 様帯は横走沈線を境に上下二分 割される。文様帯下端隆帯上に うず巻き状の型押し文あり	

番号	発掘区	名称	口・底・高(㎝)	器形の特徴
94	c-65-42	甕	24.3・8.0・27.5	口縁部外反し上部で内傾。底部張り出す
95	d-64-93	甕	19.5・7.5・21.2	口縁部外反。底部やや外反
96	c-65-	甕	26.5・—・—	口縁部外反し上部でやや内傾
97	d-65-51		—・6.7・—	底部張り出す
98	d-65-70		—・6.3・—	底部やや張り出す
99	d-65-60		—・5.5・—	底部やや張り出す
100	d-64-93		—・4.2・—	底部やや張り出す
101	d-64-73	鉢	17.0・5.4・9.4	口縁部やや外反
102	d-64-83	高坏?	—・5.5・—	底部は張り出し低い脚をもつ
103	d-64-83	鉢?	—・—・—	底部張り出し
104	g-65-94	甕	14.5・5.0・17.8	口縁部外反し上部で立ち上がる
105	c-65-11	坏	11.8・5.5・5.3	底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部はわずかに外反
106	d-64-93	坏	12.9・6.8・5.3	底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部は外反する。体部には凹凸がみられる

成 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
口縁部などで。頸部および胴部へラミがき。 底部などで。内面へラミがき	口縁部隆帯上に短刻あり。頸部 文様帯は横走沈線と短刻を境に 三段に分割される	
口縁部などで。頸部および胴部ハケ目+ミが き。底部ハケ目+などで。内面へラミがき	口縁部浅く幅広い横走沈線+短 刻。頸部縦走沈線+山形沈線。 文様帯下端横走沈線+短刻	
口縁部などで。頸部ハケ目。胴部へラミがき。 内面へラミがき	口縁部および文様帯下端に短刻。 頸部縦走あるいは斜行する沈線 にそって短刻	
胴部および底部ハケ目。内面ハケ目+ヘラ ミがき	胴上部に横走沈線あり	
胴部ハケ目。底部ハケ目+などで。内面ヘラ ミがき		
胴部および内面へラミがき。底部などで。		
底部ハケ目+などで。内面へラミがき		
口縁部体部下半および内面へラミがき。体 部上半文様帯の部分だけハケ目	山形沈線+平行沈線+鋸歯状沈 線	
底部などで。内面および底面へラミがき	底面短刻あり	
底部などで		
口縁部および底部などで。頸部胴部および内 面へラミがき	口縁部横走沈線+短刻。頸部横 走沈線+斜行沈線。文様帯下端 短刻	
体部下端へラけずり。回転糸切り		
体部下端へラけずり。回転糸切りの後、周 縁を左回りへラけずりによって調整		土師質須恵器

番号	発掘区	名称	口・底・高(m)	器形の特徴
107	d-64-93	坏	15.2・—・—	体部は内湾ぎみに立ち上がり口縁部はわずかに外反する
108	d-64-55	鉢	16.5・6.2・6.7	体部はほぼ直線的に立ち上がる。貼り付け底部
109	d-64-56	碗	12.5・4.0・2.5	体部は内湾ぎみに立ち上がり口縁部は外反する。体部中にわずかな稜をもつ。体部下端はすぼまり高台を作出している
110	d-64-54	碗	16.0・6.5・6.6	体部はやや内湾ぎみに立ち上がり口縁部は外反する。高台をもつ
111	d-64-95	碗	17.5・6.0・7.0	体部はやや内湾ぎみに立ち上がり口縁部は外反する
112	c-65-09 d-65-99	甕	15.0・—・—	口縁部外反し上部で内傾。やや肩が張る
113	d-65-89	甕	—・6.7・—	底部わずかに張り出す
114	d-65-79	甕	15.8・7.0・16.7	口縁部ゆるやかに外反。底部張り出す
115	d-65-79	甕	11.0・5.4・9.2	口縁部外反。底部やや張り出す
116	d-65-79	甕	12.8・6.0・13.0	口縁部外反。底部やや張り出す
117	d-65-99	鉢	15.3・4.9・7.4	底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部外反する。高台をもつ

成 整 形 の 特 徴	文 様	備 考
体部下端へラけずり。口口ロ成形		土師質須恵器
口縁部および体部下端へラけずり。内面へラけずり+へラみがき		土師器系土器 体部丹塗り
回転糸切り。粘土紐積みの後、口口ロ整形		土師器
回転糸切り。粘土紐積みの後、口口ロ整形		土師器 内黒
回転糸切りの後、周囲をへラけずりによって調整		土師器
口縁部にて。頸部ハケ目。胴部および内面へラみがき	口縁部および文様帯下端沈線+短刻。頸部横走沈線+縦走沈線+短刻	
胴部および底部ハケ目。内面へラみがき	平行沈線+縦走沈線+斜沈線。 文様帯下端短刻	
口縁部にて。頸部胴部底部粗いハケ目。内面へラみがき	口縁部隆帯上にうず巻き状の型押し文あり。頸部縷杉状の沈線。文様帯下端横走沈線+縷齒状沈線	底面ササ圧痕あり
口縁部にて。胴部底部ハケ目。内面へラみがき	口縁部横走沈線。胴部上半斜行沈線。文様帯下端横走沈線+縷齒状沈線	木葉痕あり
口縁部にて。頸部ハケ目。胴部底部ハケ目+へラみがき。内面へラみがき	口縁部幅広の横走沈線。頸部斜行沈線。文様帯下端横走沈線+山形短刻	底面ササ圧痕あり
口縁部へラみがき。体部および底部ハケ目。内面へラみがき		土師器系土器 内黒



る。このようなあり方は、土師器の甕と坏にみられる成整形手法の相違によるあり方と一致する。なお、胴下部または底部だけのものは除いておく。

甕(3、5～23、27～31、36、44、45)：甕が主体をなす。なお、深鉢としてよいものもみられるが、大型の甕をそのまま縮小したような器形をしているため、小型甕としてここに含めておく(14、15、18～20、28、44、45)。

これらの甕には、① 頸部がくびれて口縁部が大きく外反するもの(5、6、8、9、11、21)

② 頸部と胴部の境が明瞭でなく、頸部がやや垂直に立ち上がり、口縁部が外反するもの(12、13、16～18、22、23、79)

③ 頸部のくびれがそれほど顕著でなく、口縁部がゆるやかに外反するもの(3、29、30)

④ 肩部から直線的に外方に広がる口縁部をもつもの(この器形は、小型甕に多くみられる。7、10、14、15、18～20、27、28、44、45)

⑤ 頸部をもたず、口縁部が垂直に立ち上がるもの(80)などがある。さらに、

① 口縁部から頸部にかけて数条の横走沈線をめぐらすもの(3、5～17、20、31、36)

② 無文のもの(27、28、30、44、45)

③ 口頸部にめぐらす横走沈線と口縁部に付す刻みをもつもの(18、19、21～23)

に分けられる。

44は底部の4カ所に切り込みがなされ、45は口縁部の4カ所に押圧が加えられ四隅が突出したような上面観をなす例外的なものである。

以上の甕に共通した整形手法は、口縁部内外面のなで、頸部から胴部下半に至るハケ目とみがき、内面でのハケ目とみがきである。

鉢(108、117)：108は体部が直線的に立ち上がり、底部の周縁には粘土紐を貼り付けており、高台状をなす。体部下端ではヘラけずりが、体部中位から口縁部にかけてはヘラみがきによる器面調整がなされる。体部は丹塗されている。117は内鬲気味に立ち上がる体部をもち、口縁部がわずかにひろく、底部には粘土紐を貼り付けており高台状をなす。体部に粗いハケ目を残す。口縁部ではヘラみがき、内面は黒色処理が行なわれている。(矢吹俊男)

2) 刻文土器について

第1グループから第3グループの刻文が施された土器のほとんどは甕で、他に鉢などがある。甕には口縁部が外反するものと、口縁部が外反して上部で立ち上るものがあり、後者が多い。文様は横走沈線、交差する斜行沈線、縦走沈線、短刻線などの組み合わせで構成され、口縁部の隆帯上と文様帯下端に刻み目が施されることが多い。これらの土器は文様帯の地に横走沈線をもつもの(24、89~92、112、113)と、横走沈線をもたないもの(93~96、114~116)とに分けられる。前者をみると、24は横走沈線上の一部分に山形の沈線が施されている。82~85、92は交差する斜行沈線および、斜行沈線と縦走沈線の組み合わせされたものである。88~90も同種のものと思われる。このうち85の口縁部は刻み目をもたない。91、112、113は斜行あるいは縦走する沈線にそって短刻線が施される。文様帯の地に横走沈線がみられないものには94のように文様帯が多段となる土器がある。93の文様帯下端には隆帯の上にくず巻き状の型押し文が付されている。同種の型押し文は114の口縁部にもみられる。115、116は口縁部に横走沈線が引かれているだけで刻み目をもたず、文様帯の下端に山形の短刻線が施されている。101は鉢で鋸歯状沈線と山形沈線が組み合わされている。102は高坏の脚と思われるもので、もし高坏だとすれば本道跡唯一の例である。

なお、口縁部に外側から突いた突窟文が施された土器が出土している(78、図38-13)。78は口縁部内外面ともに横なで、胴部ではハケ目を付した後へラみがきがおこなわれている。もう一片は小片であるが、内外面ともにへラみがき認められる。この種の突窟文が施された土器は一般的に北大式に含めて考えられているが、器面の整形をみた場合、第1グループの甕と共通する点が多い。(工藤研治)

(2) 鉄鍋(図39-1~7、図版25)

d-64-93から出土した。腐蝕が進んでいて、301個の小片に割れているが、1個体分と思われる。口縁部(1、2、3)と体部および足が3本(5、6、7)が認められる。

器形は次のようになると推測される。底部は平坦で3本の足がある。体部は、底部からやや開き気味で直線的に立ちあがり、1段屈曲して口縁部に続く。口縁部は、2.5cmほどの幅で、帯状である。口唇部は、やや内削ぎの平坦面をもっている。耳の形は明らかでない。

千歳市末広道跡⁽⁴⁾から、同じ口縁形態で足をもつ内耳鉄鍋が出土している。本道跡例も内耳鉄鍋の可能性が大きい。4は耳の一部かもしれない。

鉄鍋の出土地点は、浅い沢の底にあたり、周囲には刻文をもつ擦文土器の甕、糸切り底の坏、土罐、罌等が数多くみられる。いずれも流れ込んだものでなく、ほぼ廃棄された原位置を保っているものと思われる。遺物の出土レベルを比較すると(図40)、鉄鍋片は土器片よりわずかに高位にある。しかし、塚群のレベルは、鉄鍋片と土器片を含むように位置しており、3者は区分しがたい。若干の問題は残るが、鉄鍋は擦文土器に伴う可能性が高い。(越田賢一郎)

注) 大谷敬三ほか 1981 『末広道跡における考古学的調査(上)』

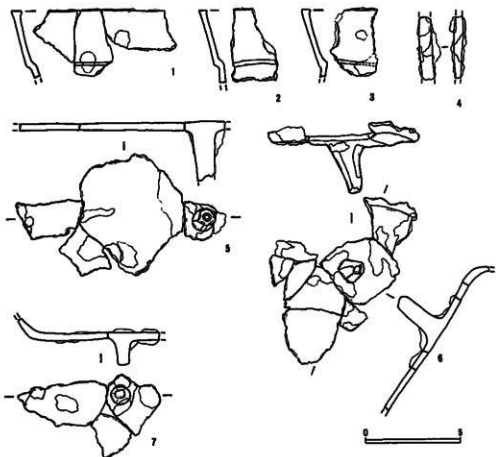


図39 I黒層の遺物 (14)

(3) 石器 (図41・42)

I黒層からは剥片石器16点、礫石器25点、およびコア・フリイト202点が出土した。剥片石器では、縄文時代晩期～続縄文時代のものと思われる二等辺三角形をなす有茎のやり(図41-9)無茎のやり(図41-1～7)、太い基部を特徴としているやり先(図41-10)のほか、つまみ付きナイフ、スタレイバーがあるのみである。III A 1のつまみ付きナイフ(図41-11)は、I黒層の遺物ではないと思われる。礫石器では、砥石・擦石の占める割合が大きい。図42-19の砥石は粒子の細かい泥岩製のもので、4面に使用面がありそのうちの2面を集中的に使用している。使用面は中くぼみになっており、相当長期間にわたって使用されたのではないと思われる。両端部には細かいたたき痕がみられる。図42-20の砥石も粒子の細かい泥岩製で、2面に使用面があり、手に持って使用するのに手頃な大きさのものである。いずれの砥石も金属製の刃物を研磨するために使用したものではないかと考えられる。擦石(図42-14～16)は3点とも小型のものである。16の擦石は砂岩製で擦り面を4カ所もつものである。砥石・擦石は擦文時代のものである可能性が大きい。(遠藤香澄)

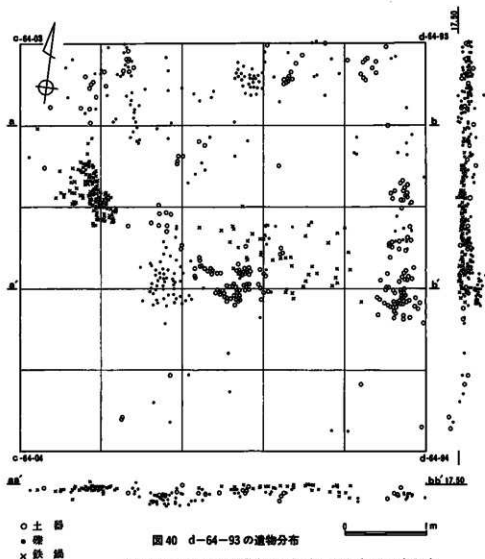


図40 d-64-93の遺物分布

(本図には、d-64-93の遺物出土位置と出土レベルを示してある。ただし、東西方向のレベルは、a-a'とb-b'の2×5m内出土のものに限っている。また、垂直距離は水平距離の2倍である。)

(4) 土鍾 (図43, 図版25)

遺跡北部の沢の底にあたる所からまとまって出土した。周辺には、第2グループの土器と礫が数多く出土している。土鍾は、長さ6~7cm、径2cmほどで、重さは25g前後である。孔の径は4~6mmで片側が太い。粘土の芯に棒状のものを通し、手で握って整形しただけの簡単なもので、握りあとがそのまま残っている。小片となっているものがあり確実でないが、11個体分と思われる。

道内では、幕別町⁽¹¹⁾と松前町静浦D遺跡⁽¹²⁾に出土例がある。幕別町の伴出土器ははっきりし

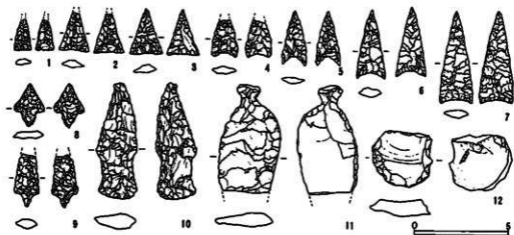


図41 I層の遺物 09

ないが、静浦D遺跡では擦文土器に伴って出土している。いずれも本遺跡のものより小型である。

また東北部では、土師器に伴った土鍾の出土例がある。

注) 1 斎藤米太郎 1968 土製管玉遺跡について『北海道考古学』第4輯

2 久保春氏のご表示による

I層の石器等 (41~43)

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)			重さ(g)	材 質	備 考
				最大長	最大幅	最大厚			
1	や じ り	IA 3	c-65-85	(1.6) × 0.9 × 0.3	(4)	Obs.			
2	"	"	e-65-60	(2.0) × (1.5) × 0.3	(0.7)	"			
3	"	"	e-65-96	2.4 × 1.7 × 0.3	1.0	Che.			
4	"	"	e-64-79	(1.9) × 1.3 × 0.3	(0.6)	Obs.			
5	"	"	f-65-00	2.8 × 1.3 × 0.3	0.7	"			
6	"	"	e-65-00	3.6 × 1.5 × 0.4	1.4	Che.			
7	"	"	f-65-00	4.8 × 1.8 × 0.4	2.5	"			
8	"	IA 5	b-65-07	2.2 × 1.6 × 0.4	0.8	Obs.			
9	"	"	f-64-97	(2.7) × 1.3 × 0.4	(1.2)	"			
10	や り 先	IB 1	c-65-95	(6.1) × (2.0) × (8.0)	(9.1)	"			
11	つまみ付きナイフ	IIA 1	e-65-39	(5.6) × 3.0 × 0.5	(14)	Che.			
12	スクレイパー	IIIB 2	e-65-09	3.0 × 3.2 × 0.7	8	Obs.			
13	たたき石	VA 2	e-65-19	12.0 × 8.1 × 4.6	670	Gran.			
14	擦 石	VA 1	e-65-06	7.2 × 13.3 × 6.8	600	Mud.			
15	"	VA 2	d-64-63	5.1 × 8.0 × 2.5	162	Sa.			
16	"	VA 1	e-65-35	4.6 × 6.7 × 3.3	105	"			
17	石 皿	VB	d-64-86	17.3 × 14.0 × 2.8	1,160	Mud.			

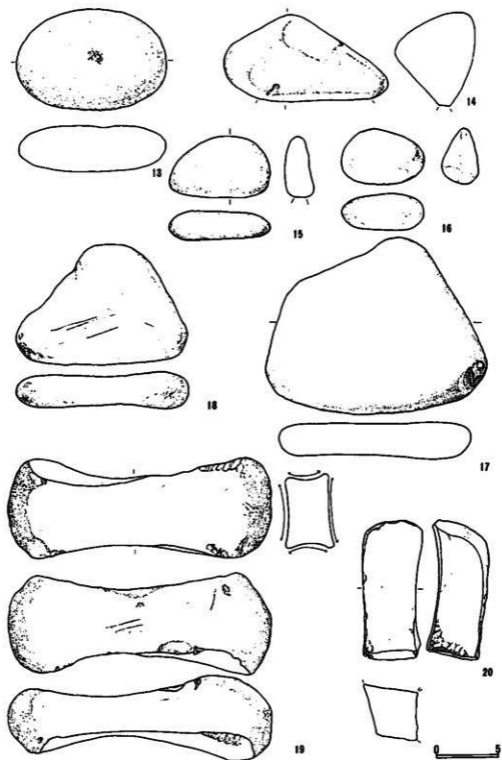


图42 I 層の遺物 09

番号	名	称	分類	発掘区	大 き さ (cm)			重さ(g)	材 質	備 考
					最大長×最大幅×最大厚					
18	底	石	WB 2	f-65-64	13.9 × 9.8 × 3.0		600	Mud.		
19	"	"	"	d-64-84	21.1 × 8.4 × 6.3		1,050	"		
20	"	"	"	d-64-93	(11.0) × 5.0 × 4.0		410	"		
21	土	鍾		d-64-83	2.0 × 1.8 × 6.6		24.5	"		
22	"	"		"	2.2 × 2.0 × 6.7		27.0			
23	"	"		"	2.4 × 1.9 × 6.2		26.8			
24	"	"		d-64-73	2.1 × 2.0 × 5.7		20.7			
25	"	"		d-64-83	2.2 × 1.8 × 7.1		(23.5)			
26	"	"		"	2.2 × 1.9 × (6.3)		(21.9)			
27	"	"		"	2.0 × 1.7 × (5.0)		—			
28	"	"		"	2.1 × 1.8 × 6.2		—			
29	"	"		"	1.8 × (1.5) × —		—			
30	"	"		"	(2.0) × (1.8) × —		—			
31	"	"		"	(2.0) × (1.8) × —		—			

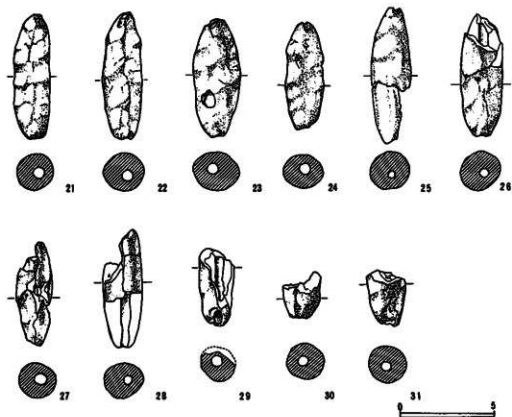


図43 I 層の遺物 (7)

(5) 集中礫 (図 44、45)

I 黒層には、3,628 点の礫があり、数多くの集中地点がみられる。集中礫は、土器の出土範囲とはほぼ一致してみられ、第 1 グループに伴うもの (G~I) と、第 2 グループに伴うもの (J~S) に区分できる。さらに後者は、丘陵上の 21 m 等高線付近に位置するもの (J~L) と沢の底にまとまるもの (M~S) にわけることができる (図 20・21)。代表的なものを比較したのが図 44、45 である。

I 黒層の集中礫は、2 つのタイプに分けられる。〔1〕タイプの例は G と H で、平均重量が 200 g を越す大型のものである。大きさではある程度まとまりをもつものの、重さのばらつきが大きい。〔2〕タイプは、G と H 以外のもので、普遍的にみられる。ほとんどの礫が重さ 40~120 g、長径 5~8 cm、短径 3~5 cm の範囲におさまる。長径と短径の比は、1.5 前後である。

先述した I 黒層上面の集中礫のうち、A~C は〔1〕タイプに含められる。一方、D~F の細長い礫は、〔3〕タイプとする。長径と短径の比は、1.7 以上である。

各タイプと土器群との関係を見ると、〔1〕タイプが第 1 グループの分布範囲だけに存在するのに対し、〔2〕タイプのものは、両方のグループに伴ってみられる。なお〔3〕タイプは、単独の礫で細長いものはあるが、礫群としては I 黒層にはみられない。

〔2〕タイプで第 1 グループに伴う I は、重さ 40~60 g、長径 5~7 cm、短径 3~5 cm に集中する小型のものである。第 2 グループに伴う礫群のうち J~L は、それぞれの平均値を比較するとかなり違いがある。これに対し、M~S は相互に大きな差がみられず、全体としてほぼ同一規格の礫がまとまっているようである。J~L に比べやや小型である。これは、I 黒層上面出土の A~C とほぼ一致する。

このような集中礫は、縄文期の堅穴住居跡中にまとまって出土する例がある。石狩町ワッカオイヤ札幌市 K 460 遺跡にもみられ、報告者はこれを「卵形小石」と呼び「アイヌ民族はソッカカラ *soxkara* あるいはルサ *rusa* と云われる炭産を編む際に、タテ糸の経には長さ 7 cm ぐらいの小石 (pit ビツ) を用いている。」¹⁴⁰ ことからむしろ織に使われる罫織としての役割りを想定している。¹⁴¹ 本遺跡の〔3〕タイプのものは、重さはやや軽いが、この用途に最も適した形をしている。また〔2〕タイプのものの一部も同じ用途に使われた可能性がある。しかし、M~S のように狭い範囲に相当数まとまって出土するものは別の様々な用途が考えられようである。

たとえば、M~S には土鏝が伴っている。土鏝は重さ 25 g 前後で、礫の平均重量の半分以下であり、すぐ同じ用途と結びつけるのは問題があるかもしれない。しかし、同じ大きさ重さの礫を集め網の重りとする民俗例があり¹⁴² 礫の形は、編み込むか包み込んで用いるため、細長いものではなく、扁平なものが多くいようである。重量の比較ができないのでははっきりしないが、網の重りとしての用途を 1 つの可能性として挙げておきたい。

(越田賢一郎)

注) 1 飽津博史 1975 「住居出土の礫」『Wakkaoi』

2. 上野秀一 1980 棒状礫について 『札幌市文化財調査報告書』XXII

3. 青森県立郷土館 1980 「青森県の漁具」

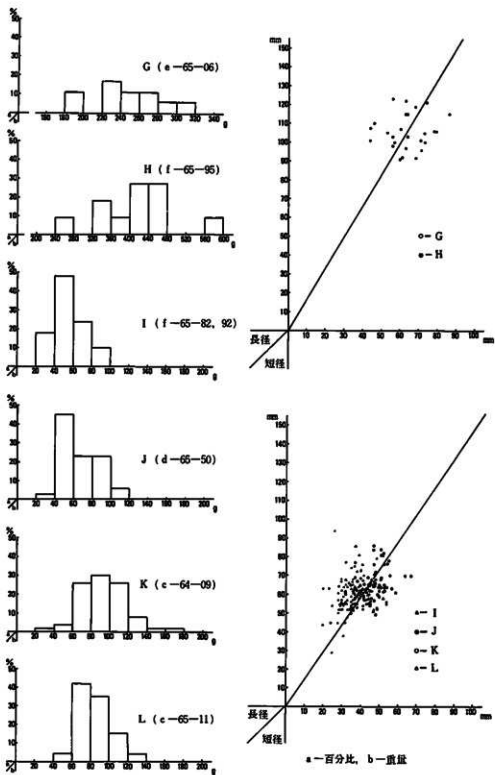


図44 I 黒層の卵 (1)

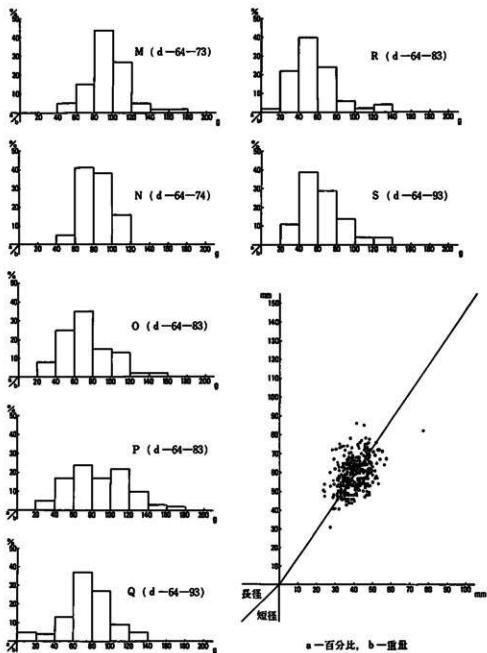


図45 I 層の礫 (2)

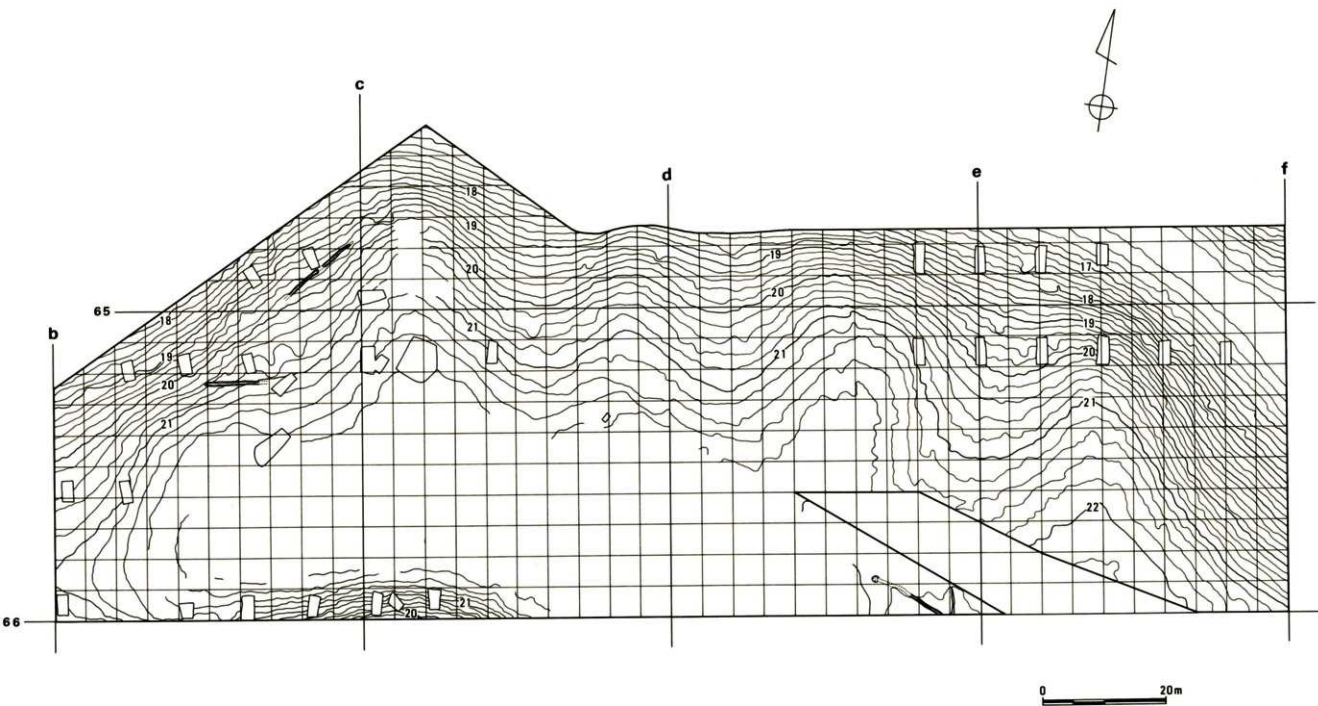


図46 II 黒層上面の地形

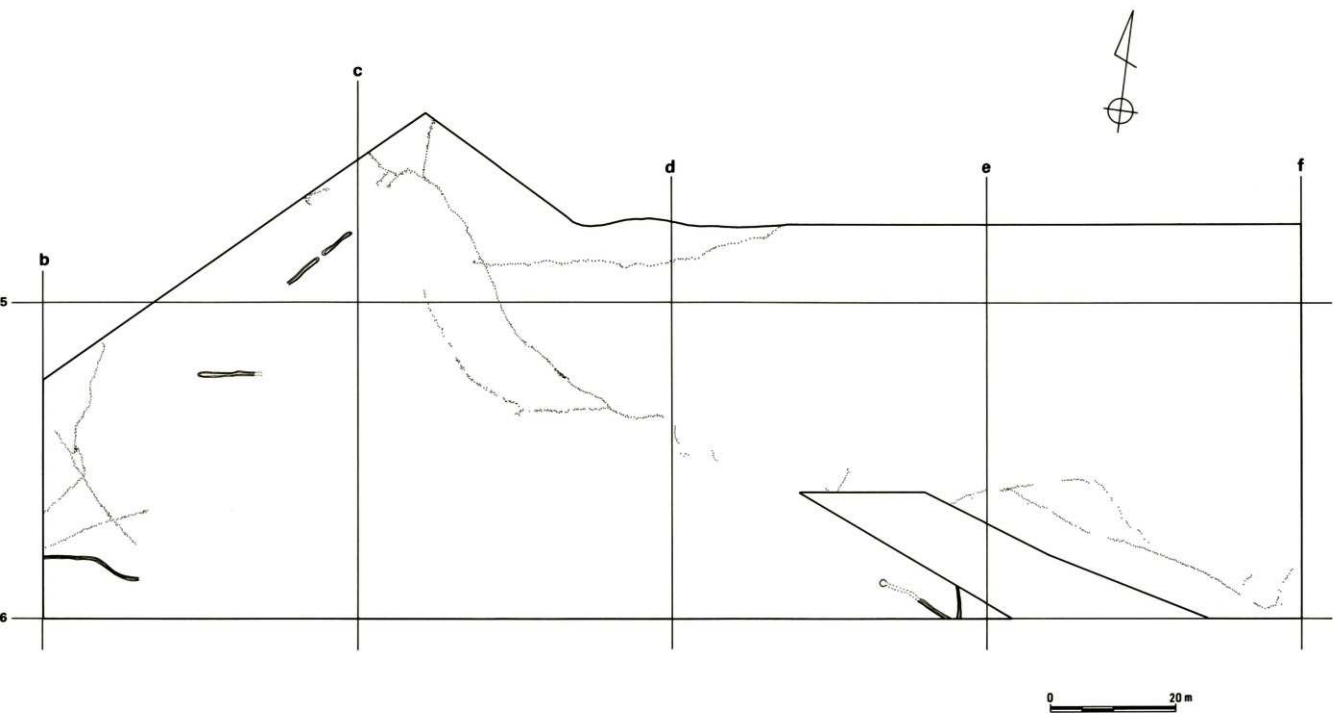


図47 足あと等の分布

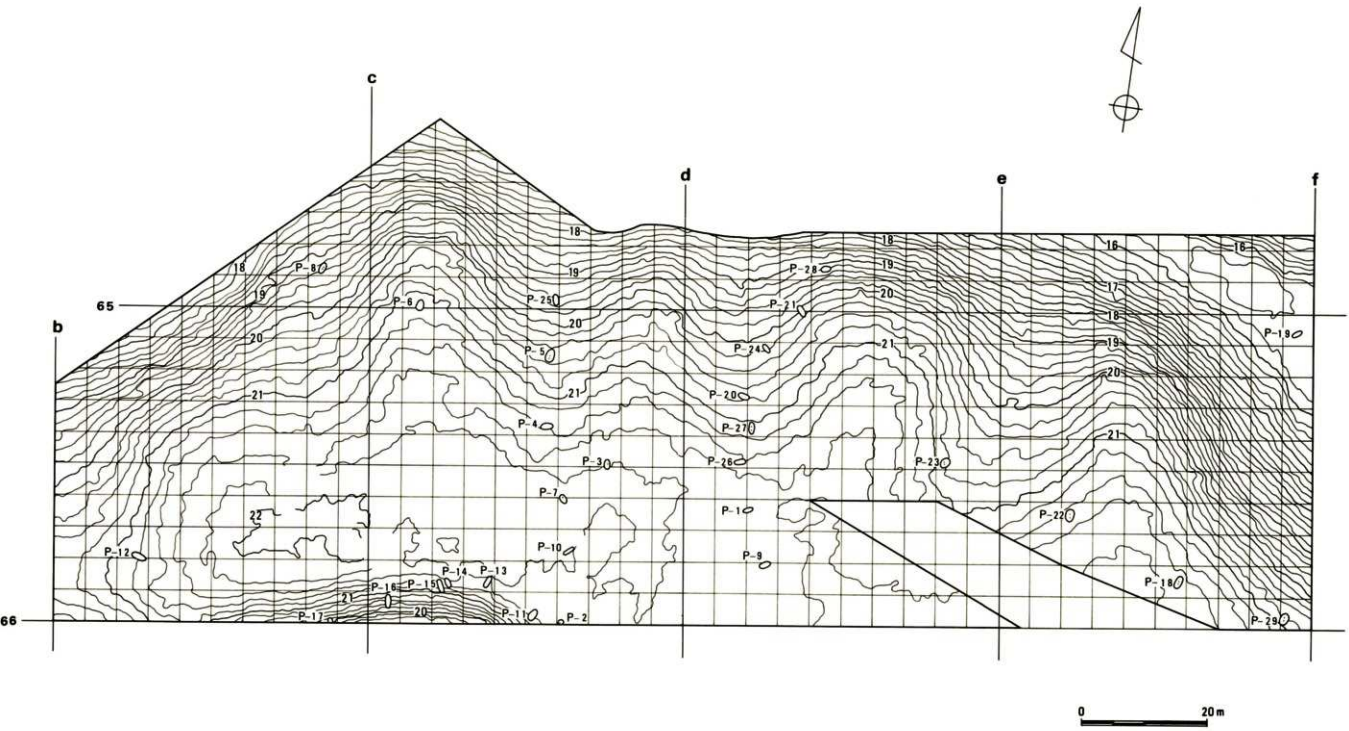


図48 II 黒層下面の地形

美々8遺跡出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学 三辻利一

1. はじめに

北海道千歳市美々8遺跡出土須恵器の胎土分析の結果について報告する。

胎土分析による産地推定の方法は、前以って、産地と考えられる地域内の窯跡出土須恵器片を多数分析しておき、その化学特性の相違から、いくつかの窯跡群グループに整理しておく。次いで、遺跡から出土した土器を分析し、その化学特性から、どの窯跡グループに対応するかを調べる。その結果、全ての化学特性が対応する窯跡グループが産地と推定される訳である。本報告では、考えられる産地の代表として、距離的に北海道に近い青森地方、陸前地方、それに、日本海側の須恵器生産地の一つである能登・金沢の3地域がとり上げられた。

2. 分析法

資料片は北海道埋蔵文化財センターから提供された。試料片は、すべて表面を超硬質の研磨機で研磨し、付着汚物を除去したのち、超硬質乳鉢で100~200メッシュ程度に粉碎した。粉末試料は圧縮機でコイン状にプレス成形してのち、蛍光X線分析法により、Fe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)を定量した。定量分析には岩石標準試料JG-1を使用した。データは岩石標準試料JG-1で規格化した値で表示された。

3. 分析結果

はじめに、生産地の特性を示そう。図1には、仙台周辺と能登・金沢周辺の窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示す。この分布図を使用するのは、全国の窯跡出土須恵器の分析結果より各地の土器の地域特性をよく表示することが分かったからである。中央に引かれた新座標軸は全国の須恵器のRb, Srの平均値である。仙台周辺の窯跡としては、仙台市内の大蓮寺窯、金山窯、陸前古川市の日の出山1号、8号窯が使われた。また、能登・金沢周辺の窯としては、若緑3号、黒川2号、春木、箱宮5号、浅川1号、2号と末窯が使用された。図1をみると、仙台周辺の窯跡出土須恵器はRbが全国平均よりかなり少なく、Srもやや少ないのに対し、能登・金沢周辺の須

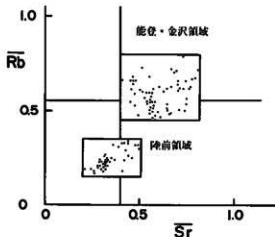
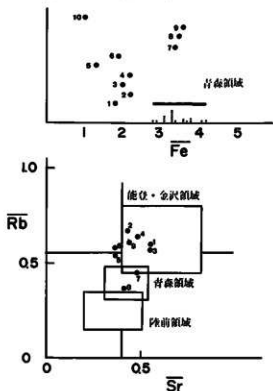


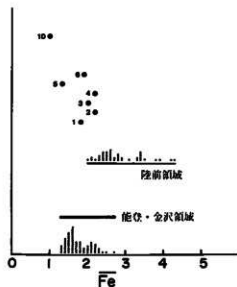
図1 能登・金沢および陸前地方窯跡出土須恵器のRb-Sr分布

恵器はRbは平均なみで、Srは平均より多いことが分かる。この結果、仙台周辺の須恵器は能登・金沢周辺のものとは、Rb-Sr分布図上で明確に異なることが分かった。これらの分析値をすべて包含するようにして各領域は決められている。図iiの下部には、このようにして決められた能登・金沢領域、青森領域、陸前領域が決められている。青森県の窯跡としては五所川原市の数基の窯、青森市の三内窯、浪岡町の郷山前窯が使われた。この3領域には十分相互識別の可能性があると図iiより分かる。そして、美々8遺跡出土須恵器の分析結果も示されている。陸前領域に対応するものは1つもないことが分かる。試料番号7、8は青森領域に対応し、残りの多くは能登・金沢領域に対応する。図iiの上部には、Feの分析結果が示されている。同時に、青森地方の窯跡出土須恵器の分析結果も示してある。試料番号7、8はRb-Sr分布図のみならずFe量でも青森領域に対応し、その産地は青森地方である可能性が高いことを示す。試料番号9はFe量で青森領域に対応しているが、Rb-Sr分布図では青森領域より大きくはずれており、その産地が青森地方である可能性は少ない。帰属未定とした。

図iiiには、能登・金沢周辺の窯跡出土須恵器のFe量を示してある。同時に、帰属未定の美々8遺跡出土須恵器の分析結果を示してある。試料番号1、2、3、4、5、6は能登・金沢領域に対応していることが分かる。このうち、1、2、3、4はRb-Sr分布図でも能登・金沢領域に対応しており、その産地が能登・金沢周辺である可能性はある。5、6はFe量では能登・金沢領域に対応するが、Rb



図ii 美々8遺跡出土須恵器の産地推定

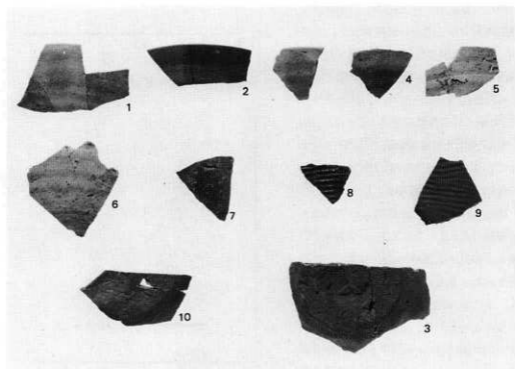


図iii 美々8遺跡出土須恵器のFe量

-Sr 分布図では、少しはずれており、その産地が能登・金沢周辺である可能性は少ない。5、6は酒田市周辺が産地である可能性もある。試料番号10の産地は何処か推定出来なかった。最後に、胎土分析による産地推定の結果を表1にまとめておく。

表1 美々8遺跡出土須恵器の胎土分析結果

試料番号	出土地点	層序	器種	胎土分析による推定産地	備考
1	e-65-07	I 黒層	坏	能登・金沢	図32、No69
2	e-65-19	I 黒層	坏	能登・金沢	
3	e-65-04	I 黒層	坏	能登・金沢	
4	f-65-87	I 黒層	坏	能登・金沢	
5	e-65-43	I 黒層	坏	酒田(?)	
6	e-65-19	I 黒層	坏	酒田(?)	
7	d-64-99	I 黒層	壺(?)	青森	
8	—————	I 黒層	甕(?)	青森	
9	d-64-68	I 黒層	甕(?)	?	
10	e-65-45	I 黒層	坏	?	



V 第II黒色土層上面にみられた獣の足あと等

Ta-c層除去後のII黒層上面で、径数cmから10cm内外、深さ2~3cmのくぼみが30cmほどの間隔で、点々と続いているのが発見された(図47、図版26)。シャベルやじょれんを用いて、火山灰除去後の清掃を行なったところ、腐植土の表面にくぼみがあり、軽石粒が象嵌されたような状態で検出されたものである。分布は、図47に示すとおり、調査地区のはほぼ全面にわたっている。これらのくぼみの配列は、線状をなし、大部分は直線的であるが、一部で旋回したり交差したのも認められる。配列を徹視的にみると、一直線に続く部分、やや千鳥状になる部分のほかに、2個は直線方向でつぎの2個がこれと交差するように配される、石けりの“ケンケンバ”のような形のものもある。

これらは動物の歩行のあとと考えられるものであるが、残されてからTa-cの降下までには若干の時間の経過があったらしく、プリントは鈍くなっており、足指または踵の形はわからない。しかし、これらの足あとは、歩幅約30cmで、平面形が円形であることから、ヒトのものとは異っている。もちろん、鳥類は考えられない。したがって、これらは何らかの獣の足あとであろうが、動物の特定は困難であった。

北海道警察本部鑑識課の石脊型採取による鑑定では、動物の種類を明らかにすることはできなかったが、北海道開拓記念館主任学芸員門崎允昭氏は、現地調査の結果、歩行の特徴から、大部分についてはキツネ、一部についてはウサギの可能性を指摘しておられる。遺跡におけるこのようなものの調査例はきわめて少なく、かつ、脆弱なために保存が困難であり、調査工程の関係もあって、上記2氏のほかは、専門家の応援を得ることができなかった。

以上のように、これらの獣については不明な点が多い。人間との関わりも不明である。Ta-c層との関係から足あとが残されたのは縄文時代晩期末葉のころであり、後述(VI章)するV群c類土器の時期に相当するが、この時期の遺物の分布は稀薄で、関連を見出すことはできない。また、Tピットを獣の陥し穴とする説があるが、29個発見されたTピットはいずれもTa-c降下時には埋まりきっていることが確かなので、これとも関係はない。

興味深いのは、当時の環境であろう。門崎氏があげた動物の体重は、せいぜい数キログラム程度である。これらの小獣の足あとが付くには、地面が十分軟いことが必要である。美々8遺跡は、美沢川との比高十数mの火山灰性の台地にあり、地表水はかなり浸透しやすいはずである。雨後や融雪期としても、地表面の植生が問題となろう。このようなことから推測すると、少なくとも足あとのある部分だけでも裸の地面でなくてはならない。それも、かなり広範囲にわたっているらしいので、今後、Ta-c軽石降下直前の植生の研究とあわせて検討する必要がある。

また、I 黒層上面で道跡としたものに類似の浅い溝状のくぼみが、数カ所から検出されている(図 47)。長さ 20 m を超えるものはないが、e-65 南東隅や c-65 南西寄りのものは、平地あるいは尾根上にあり、地表水の流路とは考えにくいので、さきに I 黒層上面でみたのと同様、道の痕跡としてよいものかもしれない。

なお、獣の足あとの一部については、①土塊ごと切り取って樹脂で保護する、②地面に樹脂を塗布して転写する、の 2 方法により保存した。

(森田知忠)

VI 第II黒色土層の遺構と遺物

1 遺構

検出された遺構は、Tピットのみである。Tピットの図は、すべてN-7-Eを上にして掲載したが、念のため、各図版に1カ所のみ方位を示した。

Tピットは29個発見された。平面形についてみると、①細い溝状のもの、②小判形のもの2種類に分けることができる。②はさらに底面に杭穴を1個もつものと2個もつものに分けられる。①のタイプは上面長軸長の平均が1.9m、上面短軸長の平均が72cmで、極端に底が狭く、断面形はV字状を呈している。本遺跡では18個発見された。②のタイプは明瞭な底面をもつもので、杭穴が1個のものが3個、杭穴が2個のものが7個発見された。上面長軸長と上面短軸長の平均を比べてみると、それぞれ、1.25m×0.9m、1.9m×1.4mで、杭穴が2個のTピットの方が大きい。又、杭穴が2個のTピットで、底面の杭穴に続く杭の痕跡が認められた。杭はTピットの開口部付近まで達している。

Tピットの分布をみると、列をなすものが3例ある。ひとつの列は同じタイプのTピットで構成される特徴がある。①のタイプのTピットの列は2例ある。ひとつは、南側台地上から北側の浅い沢に沿って弧状につらなる一群で(P-9・1・26・20・24・21)、もうひとつは、台地南縁辺部に沿って弧状にならぶ一群である(P-11・13・14・15・16・17)。いずれの列も、Tピットの長軸方向の等高線とはほぼ直交している。②のタイプのTピットの列は、東側の台地上から西側の沢につらなる一群である(P-8・6・5・27・23・18・29)。P-6以外は底面に杭穴を2個もつものである。P-6では杭穴は検出されなかったが、平面形、規模、位置から、この列に含めることが妥当であろう。その他のTピットはすべて①のタイプに属するものであるが、規則的な配列は認められなかった。

11個のTピットの覆土中から遺物が出土しているが、いずれもTピットに伴うものではない。Tピットの埋没状態、底面の杭穴に続く痕跡を観察するために、次の様な発掘方法を試みた。

- 1) Tピット全体を短軸方向で、数回にわたって垂直に切りセクション図を作成する。
- 2) 10cm~20cmづつ、プランに沿って数回にわたって水平に掘り下げる。
- 3) 長軸方向で半截する。

P-1 (図49)

位置 e-65-76, -86

規模 上面(1.86×0.56) 底面(1.75×0.21) 深さ1.13

形状 平面形は細い溝状。

土層 I: 黒褐色土(II黒>Ta-d₁)

II: 赤褐色土(Ta-d₂)

III: 明茶褐色土(III黒)

IV: 暗茶褐色土 (II黒 > Ta-d₁ + Ta-d₂)

V: 暗赤褐色土 (Ta-d₂ > 黒色土)

VI: 黒色土

VII: 黄褐色土 (En-a)

VIII: 黒褐色土 (黒色土 > Ta-d₂ + En-a)

遺物 覆土からフレイタが1点出土した。

P-2 (図49)

位置 d-65-39, d-66-30

規模 上面 (1.09×0.65) 底面 (0.98×0.33) 深さ 0.97

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に、径5cm、深さ9cmの杭穴がある。壁は南西部でややオーバー・ハンダする。

土層 I: 黒色土 (II黒 > Ta-d₂)

II: 暗赤褐色土 (Ta-d₂ + En-a > 黒色土)

III: 黄褐色土 (En-a)

IV: 黄褐色土 (En-a > Ta-d₂ > 黒色土)

V: 暗黄褐色土 (En-a + Ta-d₂)

VI: 黄褐色土 (En-a + Ta-d₂)

VII: 黒色土

VIII: 黒色土 (En-a + 黒色土)

IX: 黒色土

P-3 (図49, 図版29)

位置 d-65-24, -25

規模 上面 (1.27×0.88) 底面 (0.87×0.17) 深さ 1.13

形状 平面形は小判形。底面の長軸線上はほぼ中央に、径9cm、深さ20cmの杭穴が1個ある。

土層 I: 黒色土 (II黒 + Ta-d₁)

II: 赤褐色土 (Ta-d₂)

III: 黒色土

IV: 黒褐色土 (Ta-d₁ > II黒 > Ta-d₂)

V: 暗灰褐色土 (III黒)

VI: 赤褐色土 (II黒 + Ta-d₁ + Ta-d₂)

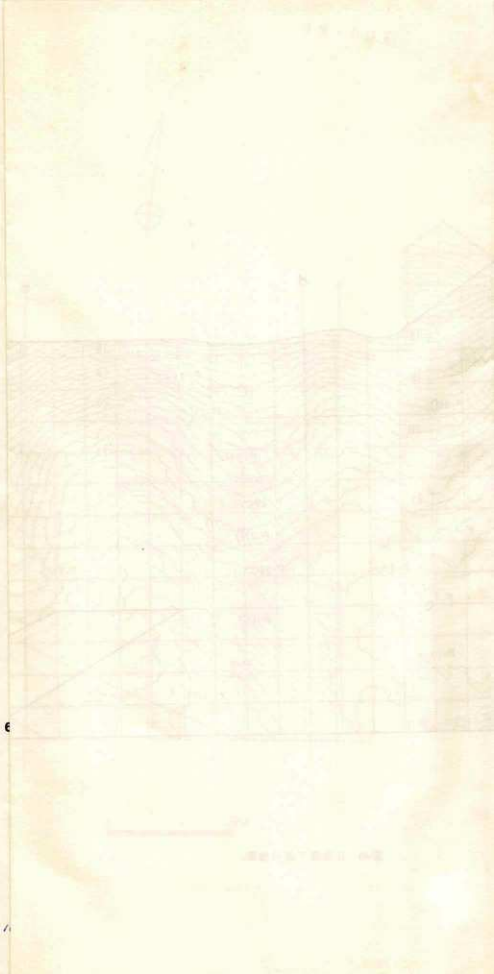
VII: 黒色土

VIII: 暗褐色土 (Ta-d₁ + III黒)

IX: 黒色土

X: 黄褐色土 (En-a > Ta-d₂)

XI: 黒色土 (黒色土 > En-a)



6

7

XII: 黄褐色土 (En-a) > 黒色土)

XIII: 黒色土

XIV: 黒色土

遺物 覆土からI群b-4類の土器片が4点、フレイクが1点出土した。

備考 プランに沿って、7回にわたり水平に掘り下げた。

P-4 (図50)

位置 d-65-43

規模 上面 (2.10×1.06) 底面 (1.84×0.23) 深さ 1.53

形状 平面形は細い溝状。

土層 I: 黒褐色土 (II黒 > Ta-d₁ + Ta-d₂)

II: 茶褐色土 (II黒 + Ta-d₁)

III: 赤褐色土 (Ta-d₂)

IV: 暗赤褐色土 (Ta-d₂ > 黒色土 > Ta-d₁)

V: 暗黄褐色土 (En-a) > III黒 + Ta-d₂)

VI: 黄褐色土 (En-a)

VII: 暗黄褐色土 (En-a + 黒色土 > Ta-d₂)

VIII: 黒色土

IX: 茶褐色土 (Ta-d₂ + En-a)

X: 暗黄褐色土 (黒色土 + En-a)

遺物 覆土からI群b-4類の土器片が2点、フレイクが1点出土した。

P-5 (図50)

位置 d-65-41

規模 上面 (2.13×1.50) 底面 (1.25×0.32) 深さ 1.43

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に枕穴が2個ある。それぞれ径8cm、深さ24cm、径9cm、深さ28cmである。底面の枕穴に続く枕の痕跡が認められた。この枕はTピットの開口部付近まで達している。

土層 I: 黒色土 (II黒 > En-a > Ta-d₂)

II: 茶褐色土 (II黒 + Ta-d₁ > Ta-d₂)

III: 黄褐色土 (En-a > 黒色土)

IV: 黒褐色土 (黒色土 + Ta-d₁ > Ta-d₂)

V: 赤褐色土 (Ta-d₂)

VI: 暗赤褐色土 (Ta-d₁ + Ta-d₂ + En-a)

VII: 暗褐色土 (Ta-d₁ > 黒色土 > Ta-d₂)

VIII: 明黄褐色土 (En-a)

IX: 黒褐色土 (黒色土 > Ta-d₁)

- X: 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 > En-a + Ta-d_1$)
 XI: 茶褐色土 (黒色土 $> Ta-d_1 + Ta-d_2$)
 XII: 明赤褐色土 ($Ta-d_2 > En-a > 黒色土$)
 XIII: 赤褐色土 ($Ta-d_2$)
 XIV: 黄茶褐色土 ($En-a + Ta-d_1 + Ta-d_2 > 黒色土$)
 XV: 暗黄褐色土 ($En-a + Ta-d_1 + Ta-d_2$)
 XVI: 黒色土 (黒色土 $> Ta-d_2$)
 XVII: 灰茶褐色土 ($En-a > 黒色土$)

備考 短軸方向で2回垂直に切り、セクション図を作成した。

P-6 (図50)

位置 d-64-89, d-65-80

規模 上面 (2.04×1.26) 底面 (1.06×0.52) 深さ 1.28

形状 平面形は小判形。

- 土層 I: 黒色土 (II黒 $> Ta-d_1$)
 II: 茶褐色土 ($Ta-d_1 + Ta-d_2 > 黒色土$)
 III: 暗褐色土 ($Ta-d_1 + Ta-d_2 + 黒色土 > En-a$)
 IV: 黒褐色土 (黒色土 $> Ta-d_2$)
 V: 赤褐色土 ($Ta-d_2 > 黒色土$)
 VI: 赤褐色土 ($Ta-d_2 > En-a$)
 VII: 黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2$)
 VIII: 暗黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2 + 黒色土$)
 IX: 黄褐色土 ($En-a + Ta-d_2 > En-a$)
 X: 褐色土 ($En-a > Ta-d_2 + 黒色土$)
 XI: 黄褐色土 ($En-a$)
 XII: 黄赤褐色土 ($Ta-d_2 + En-a$)
 XIII: 黒色土 (黒色土 $+ En-a$)

遺物 覆土から、I群b-4類の土器片が1点出土した。

P-7 (図51)

位置 d-65-35, -36

規模 上面 (1.39×1.11) 底面 (1.01×0.41) 深さ 1.20

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に、径9cm、深さ14cmの枕穴が1個ある。

- 土層 I: 赤褐色土 ($Ta-d_2$)
 II: 黒色土 (II黒 $> En-a + Ta-d_1 + Ta-d_2$)
 III: 黒褐色土 ($Ta-d_1 + 黒色土 > Ta-d_2$)
 IV: 赤褐色土 ($Ta-d_2 > 黒色土$)

- V : 褐色土 (黒色土 > Ta-d₁ + Ta-d₂)
 VI : 黒色土 (III黒 > Ta-d₁ + Ta-d₂)
 VII : 黒茶褐色土 (Ta-d₁ > 黒色土 + Ta-d₂)
 VIII : 茶褐色土 (Ta-d₂ > En-a)
 IX : 黒色土 (黒色土 > Ta-d₂)
 X : 黄褐色土 (En-a > Ta-d₂)
 XI : 暗黄褐色土 (En-a + 黒色土)
 XII : 暗黄褐色土 (En-a + 黒色土 > Ta-d₂)
 XIII : 灰褐色土 (En-a > 黒色土 + Ta-d₂)
 XIV : 黄褐色土 (En-a > 黒色土)
 XV : 暗黄褐色土 (En-a + Ta-d₂ > 黒色土)
 XVI : 黒色土 (黒色土 > En-a)

遺物 覆土からフレイタが1点出土した。又、炭化した植物の種子が少量検出された。

P-8 (図51)

位置 c-64-18

規模 上面 (1.65×1.16) 底面 (1.00×0.33) 深さ 1.35

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に枕穴が2個あり、それぞれ径6cm、深さ14cm、径7cm、深さ21cmである。

- 土層 I : 黒色土 (II黒 > Ta-d₂)
 II : 黒褐色土 (II黒 > Ta-d₂ + En-a)
 III : 赤褐色土 (Ta-d₂ > En-a)
 IV : 暗黄褐色土 (III黒 > Ta-d₂ + En-a)
 V : 黄褐色土 (En-a)
 VI : 茶褐色土 (Ta-d₂ + En-a + III黒)
 VII : 暗黄褐色土 (En-a > Ta-d₂)
 VIII : 黒色土 (黒色土 > Ta-d₂ + En-a)
 IX : 暗赤褐色土 (Ta-d₂ > En-a > 黒色土)
 X : 黒色土 (黒色土 > Ta-d₁ + Ta-d₂ > En-a)

P-9 (図51)

位置 e-65-77, -78

規模 上面 (1.77×0.59) 底面 (1.53×0.13) 深さ 1.08

形状 平面形は細い再状。西端部の壁がわずかにオーバー・ハングする。

- 土層 I : 黒色土 (II黒 > Ta-d₁ + Ta-d₂)
 II : 赤褐色土 (Ta-d₂ > 黒色土 + Ta-d₁)
 III : 明黄褐色土 (En-a > III黒 > Ta-d₂)

IV: 暗褐色土 ($Ta-d_1 > Ta-d_2 + En-a$) 黒色土)

V: 黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2$)

VI: 黒色土

VII: 明黄褐色土 ($En-a$)

VIII: 黒色土

P-10 (図 51)

位置 d-65-37

規模 上面 (1.82×0.47) 底面 (1.71×0.18) 深さ 1.15

形状 平面形は細い溝状。南西部の壁がわずかにオーバー・ハングする。

土層 I: 黒褐色土 (II黒 $> Ta-d_1 > Ta-d_2$)

II: 赤褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1$)

III: 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 + Ta-d_1 +$ 黒色土)

IV: 暗黄褐色土 ($En-a >$ 黒色土)

V: 黄褐色土 ($En-a$)

VI: 茶褐色土 ($En-a > Ta-d_1 + Ta-d_2 +$ 黒色土)

VII: 黒色土 (III黒)

VIII: 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 >$ 黒色土 $> En-a$)

IX: 黄褐色土 ($En-a$)

X: 黒色土 (黒色土 $> Ta-d_2$)

XI: 暗黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2 >$ III黒 $>$ 黒色土)

XII: 黄褐色土 ($En-a$)

XIII: 暗黄褐色土 (黒色土 $+ Ta-d_2$)

XIV: 黄褐色土 ($En-a$)

XV: 黒色土 (黒色土 $> En-a > Ta-d_2$)

遺物 覆土から、I群 b-4 類の土器片が 1 点、フレイタが 4 点出土した。

備考 長軸方向で半截した。

P-11 (図 52)

位置 d-65-49

規模 上面 (2.08×0.94) 底面 (1.84×0.23) 深さ 1.43

形状 平面形は細い溝状。

土層 I: 黒色土 (II黒 $> Ta-d_2$)

II: 黒色土 (II黒 $> Ta-d_2 > En-a$)

III: 暗褐色土 (II黒 $+ Ta-d_1 > Ta-d_2$)

IV: 暗赤褐色土 ($Ta-d_1 + Ta-d_2 >$ 黒色土)

V: 黄褐色土 ($En-a$)

VI: 黒色土

VII: 暗黄褐色土 (III黒 > En-a > Ta-d₂)

P-12 (図 52, 図版 27)

位置 c-65-77, -78

規模 上面 (2.34×0.76) 底面 (1.45×0.18) 深さ 1.39

形状 平面形は細い溝状。壁は、西端部では垂直に近く、東端部では緩やかに立ちあがる。

土層 I: 黒褐色土 (黒色土 > Ta-d₁ > Ta-d₂)

II: 暗茶褐色土 (黒色土 > Ta-d₂ > Ta-d₁)

III: 赤褐色土 (Ta-d₂ > Ta-d₁ > 黒色土)

IV: 暗茶褐色土 (黒色土 > Ta-d₂ > Ta-d₁)

V: 灰黄褐色土 (En-a + III黒 + Ta-d₂)

VI: 黄褐色土 (En-a > III黒)

VII: 黒褐色土 (Ta-d₁ + 黒色土)

VIII: 茶褐色土 (黒色土 + Ta-d₁ + Ta-d₂ > En-a)

IX: 赤褐色土 (En-a + Ta-d₂ > Ta-d₁ > 黒色土)

X: 黒色土

XI: 黒褐色土 (黒色土 > Ta-d₁ + Ta-d₂)

XII: 暗赤褐色土 (Ta-d₁ + Ta-d₂ > En-a + 黒色土)

XIII: 黒褐色土 (黒色土 > Ta-d₁ + Ta-d_b)

XIV: 暗黄褐色土 (黒色土 + En-a)

XV: 黒色土 (黒色土 > Ta-d₂)

備考 短軸方向で3回垂直に切り、セクション図を作成した。

P-13 (図 52)

位置 d-65-68

規模 上面 (2.15×0.75) 底面 (1.60×0.28) 深さ 1.46

形状 平面形は細い溝状。

土層 I: 黒色土 (II黒)

II: 黒色土 (II黒 > Ta-d₂)

III: 暗褐色土 (II黒 + Ta-d₂ > III黒)

IV: 黄褐色土 (En-a)

V: 赤褐色土 (Ta-d₂ > II黒 > En-a)

VI: 黄褐色土 (En-a)

VII: 暗褐色土 (Ta-d₂ + En-a)

VIII: 暗黄褐色土 (En-a + III黒 > Ta-d₂)

IX: 黒色土

X: 黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2$)

XI: 茶褐色土 ($En-a + Ta-d_1 + \text{黒色土} > Ta-d_2$)

XII: 暗褐色土 ($En-a + \text{黒色土}$)

XIII: 黒色土

遺物 覆土からフレイクが1点出土した。

備考 長軸方向で半載した。

P-14 (図53)

位置 d-65-78

規模 上面 (1.78×0.67) 底面 (1.15×0.14) 深さ 1.52

形状 平面形は細い溝状。

土層 I: 黒色土 (II黒 $> Ta-d_1 + Ta-d_2$)

II: 暗黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2$)

III: 明茶褐色土 ($Ta-d_2 + \text{III黒} + En-a$)

IV: 暗黄褐色土 ($En-a > \text{III黒} + Ta-d_2$)

V: 黄褐色土 ($En-a > En-a + \text{III黒}$)

VI: 黒褐色土 ($\text{黒色土} > Ta-d_1 + Ta-d_2$)

VII: 茶褐色土 ($En-a + Ta-d_2$)

VIII: 黒褐色土 ($\text{黒色土} > Ta-d_1 + Ta-d_2$)

IX: 黄褐色土 ($En-a$)

X: 明茶褐色土 ($Ta-d_1 + Ta-d_2 + \text{黒色土} + En-a$)

XI: 黒色土 ($\text{黒色土} > Ta-d_1 + Ta-d_2 > En-a$)

XII: 黄褐色土 ($En-a$)

XIII: 黒色土

XIV: 黄褐色土 ($En-a$)

XV: 黒色土

備考 短軸方向で3回垂直に切り、セクション図を作成した。

P-15 (図53)

位置 d-65-78、-79

規模 上面 (2.16×0.51) 底面 (2.33×0.16) 深さ 1.61

形状 平面形は細い溝状。南端部の壁がオーバー・ハンダする。

土層 I: 黒色土 (II黒 $> Ta-d_1 + Ta-d_2$)

II: 茶褐色土 ($\text{黒色土} > Ta-d_1 + Ta-d_2$)

III: 黒褐色土 ($\text{黒色土} + En-a + Ta-d_1 + Ta-d_2$)

IV: 黒色土 ($\text{黒色土} > Ta-d_2$)

V: 黄褐色土 ($En-a$)

- VI: 茶褐色土 (En-a+Ta-d₂>黒色土)
 VII: 暗黄褐色土 (En-a>黒色土+Ta-d₂)
 VIII: 黒色土
 IX: 黄褐色土 (En-a>黒色土)
 X: 黒色土 (黒色土+En-a)
 XI: 黄褐色土 (En-a>黒色土)
 XII: (黒色土>En-a)

備考 長軸方向で半截した。

P-16 (図 53, 図版 27)

位置 d-65-99

規模 上面 (2.32×0.79) 底面 (1.86×0.22) 深さ 1.35

形状 平面形は細い溝状。

- 土層 I: 黒色土 (黒色土>Ta-d₂>En-a)
 II: 茶褐色土 (Ta-d₂>II黒>Ta-d₁)
 III: 赤褐色土 (Ta-d₂)
 IV: 黄褐色土 (En-a)
 V: 明茶褐色土 (黒色土+Ta-d₁+Ta-d₂+En-a)
 VI: 黄褐色土 (En-a>Ta-d₂)
 VII: 黒色土 (黒色土>Ta-d₂)
 VIII: 明茶褐色土 (黒色土+Ta-d₁+Ta-d₂+En-a)
 IX: 黒色土 (黒色土>Ta-d₂)
 X: 明茶褐色土 (黒色土+Ta-d₁+Ta-d₂+En-a)
 XI: 黒色土 (黒色土>Ta-d₂)

遺物 覆土から礫が2点出土した。

P-17 (図 54)

位置 c-65-19, c-66-10

規模 上面 (-×0.72) 底面 (-×0.15) 深さ 1.64

形状 平面形は細い溝状。

- 土層 I: 黒色土 (II黒>Ta-d₁+Ta-d₂)
 II: 黒色土 (II黒)
 III: 赤褐色土 (Ta-d₂>II黒)
 IV: 暗黄褐色土 (En-a>黒色土)
 V: 暗褐色土 (II黒>En-a)
 VI: 暗赤褐色土 (Ta-d₂+En-a+黒色土)
 VII: 黄褐色土 (En-a)

- VIII: 暗褐色土 (黒色土 > Ta-d₂)
- IX: 黄褐色土 (En-a)
- X: 黒色土 (黒色土 > Ta-d₂)
- XI: 黄褐色土 (En-a)
- XII: 黒色土 (黒色土 > Ta-d₂)
- XIII: 暗赤褐色土 (黒色土 + Ta-d₂)

P-18 (図 54, 図版 28)

位置 f-65-48

規模 上面 (2.09×1.32) 底面 (1.43×0.52) 深さ 1.38

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に杭穴が 2 個ある。それぞれ径 6 cm、深さ 11 cm、径 7 cm、深さ 11 cm である。T ビットの開口部付近まで達する杭跡が認められた。

- 土層
- I: 黒色土 (II黒 > Ta-d₁ + Ta-d₂)
 - II: 黒褐色土 (II黒 + Ta-d₁ + Ta-d₂)
 - III: 黒色土 (黒色土 > Ta-d₁ + Ta-d₂)
 - IV: 暗赤褐色土 (Ta-d₂ > 黒色土 + Ta-d₁)
 - V: 黄褐色土 (En-a)
 - VI: 黄褐色土 (En-a)
 - VII: 灰褐色土 (III黒)
 - VIII: 赤褐色土 (Ta-d₂ > 黒色土)
 - IX: 黄褐色土 (En-a + Ta-d₂)
 - X: 黄褐色土 (En-a > 黒色土)
 - XI: 黒色土
 - XII: 黄褐色土 (En-a + Ta-d₂ > 黒色土)
 - XIII: 暗赤褐色土 (Ta-d₂ > 黒色土)
 - XIV: 黄褐色土 (En-a > 黒色土 + Ta-d₂)
 - XV: 黒色土 (黒色土 > Ta-d₂)

備考 短軸方向で 2 回垂直に切り、セクション図を作成した。

P-19 (図 54)

位置 f-65-00

規模 上面 (1.45×0.68) 底面 (0.96×0.09) 深さ 1.31

形状 平面形は細い罫状。

- 土層
- I: 黒褐色土 (II黒 > Ta-d₁ > Ta-d₂)
 - II: 茶褐色土 (Ta-d₁ > II黒 + Ta-d₂)
 - III: 赤褐色土 (Ta-d₂)
 - IV: 黒色土

V: 明茶褐色土 (黒色土+ $Ta-d_2 > En-a$)

VI: 黄褐色土 ($En-a$)

VII: 黄褐色土 ($En-a$)

VIII: 明茶褐色土 (黒色土+ $Ta-d_2 > En-a$)

IX: 黒色土 (黒色土 $> Ta-d_2$)

X: 暗黄褐色土 ($Ta-d_2 + En-a > 黒色土$)

P-20 (図 55)

位置 e-65-72, -82

規模 上面 (1.86×0.73) 底面 (1.45×0.24) 深さ 1.39

形状 平面形は細い溝状。西端部の壁がわずかにオーバー・ハングする。

土層 I: 黒色土 (II黒 $> Ta-d_2$)

II: 黒褐色土 (II黒+ $Ta-d_1 > Ta-d_2$)

III: 暗褐色土 ($Ta-d_1 + Ta-d_2 > II黒$)

IV: 赤褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1$)

V: 黄褐色土 ($En-a$)

VI: 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 > 黒色土 + En-a$)

VII: 暗黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2$)

VIII: 黄褐色土 ($En-a$)

IX: 暗黄褐色土 ($En-a + 黒色土 > Ta-d_2$)

X: 黒褐色土 (黒色土 $> Ta-d_2 > En-a$)

P-21 (図 55)

位置 e-64-69, e-65-60

規模 上面 (2.07×0.67) 底面 (1.70×0.24) 深さ 1.51

形状 平面形は細い溝状。

土層 I: 黒色土 (II黒 $> Ta-d_2$)

II: 黒色土 (II黒+ $Ta-d_2$)

III: 褐色土 (II黒+ $Ta-d_2 > Ta-d_1$)

IV: 赤褐色土 ($Ta-d_2 > II黒$)

V: 暗褐色土 ($Ta-d_2 > II黒 + En-a$)

VI: 暗赤褐色土 ($Ta-d_1 + II黒$)

VII: 黄褐色土 ($En-a + Ta-d_1 + III黒$)

VIII: 黒色土 (III黒 $> Ta-d_2 + En-a$)

IX: 黒色土

X: 黄褐色土 ($En-a > 黒色土$)

XI: 暗褐色土 (黒色土 $> En-a > Ta-d_2$)

XII: 淡褐色土 (En-a)

XIII: 黒色土

P-22 (図 55, 図版 28)

位置 f-65-76

規模 上面 (2.00×1.32) 底面 (1.23×0.66) 深さ 1.37

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に枕穴が 2 個ある。それぞれ径 4 cm、深さ 8 cm、径 4 cm、深さ 18 cm である。T ビットの開口部付近まで達する枕跡が認められた。

土層 I: 黒色土 (II黒>Ta-d₁+Ta-d₂)

II: 黒褐色土 (II黒+Ta-d₁+Ta-d₂)

III: 暗赤褐色土 (Ta-d₂>黒色土+Ta-d₁)

IV: 赤褐色土 (Ta-d₂>Ta-d₁+En-a)

V: 灰褐色土 (III黒+Ta-d₂>Ta-d₁)

VI: 黄褐色土 (En-a>Ta-d₂)

VII: 黒褐色土 (黒色土>Ta-d₂+En-a)

VIII: 黄褐色土 (En-a)

IX: 黒褐色土 (黒色土>Ta-d₂)

X: 灰褐色土 (III黒+Ta-d₂+En-a)

XI: 黄褐色土 (En-a)

XII: 暗赤褐色土 (Ta-d₂>黒色土+Ta-d₁+En-a)

XIII: 黄褐色土 (En-a>Ta-d₂)

XIV: 褐色土 (Ta-d₂+黒色土+En-a)

XV: 黒色土

XVI: 黒褐色土 (黒色土>Ta-d₂)

XVII: 黒色土

遺物 覆土から黒曜石製のつまみ付きナイフ(III A 5)が 7 点出土した。

備考 短軸方向で 3 回垂直に切り、セクション図を作成した。

P-23 (図 56, 図版 28)

位置 e-65-14

規模 上面 (1.72×1.38) 底面 (1.28×0.56) 深さ 1.22

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に、枕穴が 2 個ある。それぞれ径 7 cm、深さ 19 cm、径 4 cm、深さ 23 cm である。T ビットの開口部付近まで達する枕跡が認められた。

土層 I: 黒褐色土 (II黒>Ta-d₁+Ta-d₂)

II: 黒色土 (II黒>Ta-d₂>Ta-d₁)

III: 黒色土 (II黒>Ta-d₁+Ta-d₂)

IV: 赤褐色土 (Ta-d₂>黒色土+En-a)

- V : 黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2 > III黑$)
 VI : 暗茶褐色土 (黒色土 $> Ta-d_2 + Ta-d_1 + En-a$)
 VII : 赤褐色土 ($III黑 + Ta-d_2$)
 VIII : 赤褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1 + En-a + 黒色土$)
 IX : 黄褐色土 ($En-a$)
 X : 暗黄褐色土 ($En-a > Ta-d_2$)
 XI : 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 + 黒色土 + En-a$)
 XII : 黒褐色土 (黒色土 $> Ta-d_1 > Ta-d_2$)
 XIII : 黄褐色土 ($En-a$)
 XIV : 黒色土
 XV : 茶褐色土 (黒色土 $+ Ta-d_1 + Ta-d_2 > En-a$)
 XVI : 黄褐色土 ($En-a$)
 XVII : 黒色土 ($II黑 > Ta-d_1 + Ta-d_2$)
 XVIII : 褐色土 ($En-a + Ta-d_2 + 黒色土$)
 XIX : 黒色土 (黒色土 $> Ta-d_2 + En-a$)

備 考 長軸方向で半截した。

P-24 (図 56)

位 置 e-65-71

規 模 上面 (1.80×0.63) 底面 (1.57×0.23) 深さ 1.54

形 状 平面形は細い溝状。

- 土 層 I : 黒色土 ($II黑 > Ta-d_1 > Ta-d_2$)
 II : 黒褐色土 ($II黑 + Ta-d_1 > Ta-d_2$)
 III : 赤褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1$)
 IV : 褐色土 (黒色土 $> Ta-d_2$)
 V : 黄褐色土 ($En-a$)
 VI : 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1$)
 VII : 茶褐色土 (黒色土 $+ Ta-d_1 > Ta-d_2 > En-a$)
 VIII : 明褐色土 (黒色土 $+ En-a > 黒色土$)
 IX : 黒色土
 X : 明褐色土 (黒色土 $+ En-a > 黒色土$)
 XI : 黒色土

P-25 (図 56)

位 置 d-64-39, -49

規 模 上面 (1.89×0.97) 底面 (1.73×0.35) 深さ 1.56

形 状 平面形は細い溝状。北端部の壁がわずかにオーバー・ハンヅする。

- 土層 I : 黒色土 (II黒 > Ta-d₁ > Ta-d₂)
 II : 赤褐色土 (Ta-d₂)
 III : 暗赤褐色土 (Ta-d₂ > III黒)
 IV : 暗黄褐色土 (En-a > III黒 > Ta-d₂)
 V : 黄褐色土 (En-a > Ta-d₂ > III黒)
 VI : 暗黄褐色土 (III黒 + En-a)
 VII : 黄褐色土 (En-a)
 VIII : 黒色土

P-26 (図 56)

位置 e-65-74, -84

規模 上面 (1.97×0.78) 底面 (1.60×0.33) 深さ 1.25

形状 平面形は細い溝状。

- 土層 I : 黒褐色土 (II黒 > Ta-d₁ > Ta-d₂)
 II : 茶褐色土 (II黒 + Ta-d₁ > Ta-d₂)
 III : 赤褐色土 (Ta-d₂ > Ta-d₁)
 IV : 暗赤褐色土 (Ta-d₁ > Ta-d₂ > 黒色土)
 V : 灰黄褐色土 (黒色土 > Ta-d₂ + En-a)
 VI : 黄褐色土 (En-a)
 VII : 灰褐色土 (III黒)
 VIII : 黄褐色土 (En-a > Ta-d₂ + 黒色土)
 IX : 黒褐色土 (黒色土 > Ta-d₁ + Ta-d₂ + En-a)

P-27 (図 57)

位置 e-65-73

規模 上面 (1.78×1.25) 底面 (1.23×0.59) 深さ 1.33

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に、枕穴が2個ある。それぞれ径4 cm、深さ15 cm、径5 cm、深さ19 cmである。

- 土層 I : 茶褐色土 (Ta-d₁ + Ta-d₂ > II黒)
 II : 黒色土 (II黒 > Ta-d₁ + Ta-d₂)
 III : 赤褐色土 (Ta-d₂)
 IV : 暗赤褐色土 (Ta-d₂ + Ta-d₁ > 黒色土)
 V : 黄褐色土 (En-a > III黒)
 VI : 暗赤褐色土 (Ta-d₂ > Ta-d₁ > 黒色土)
 VII : 暗黄褐色土 (En-a > Ta-d₁ + Ta-d₂)
 VIII : 黒色土 (黒色土 > Ta-d₂)
 IX : 暗黄褐色土 (En-a > Ta-d₁ + Ta-d₂)

X : 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1 + \text{黒色土}$)

XI : 暗黄褐色土 ($En-a > Ta-d_1 + Ta-d_2$)

XII : 黒色土 ($\text{黒色土} > Ta-d_2$)

P-28 (図 57)

位置 e-64-58

規模 上面 (1.70×0.70) 底面 (1.32×0.12) 深さ 1.36

形状 平面形は細い溝状。

土層 I : 黒色土 ($\text{II黒} > Ta-d_1 + Ta-d_2$)

II : 黒褐色土 ($\text{II黒} + Ta-d_1$)

III : 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 > Ta-d_1$)

IV : 暗黒褐色土 ($\text{II黒} + \text{III黒} > Ta-d_2 + Ta-d_1$)

V : 黄褐色土 ($En-a$)

VI : 黒色土 ($\text{黒色土} > Ta-d_2$)

VII : 黄褐色土 ($En-a$)

VIII : 黒色土 ($\text{黒色土} > Ta-d_2$)

IX : 黄褐色土 ($En-a$)

X : 黒色土

XI : 黄褐色土 ($En-a$)

XII : 黒褐色土 ($\text{黒色土} > En-a$)

P-29 (図 57)

位置 f-65-09

規模 上面 (1.77×1.44) 底面 (1.18×0.56) 深さ 1.42

形状 平面形は小判形。長軸線上の底面に枕穴が2個ある。それぞれ径6cm、深さ17cm、径6cm、深さ21cmである。Tピットの開口部付近まで達する枕跡が認められた。

土層 I : 黒色土 ($\text{II黒} > Ta-d_2$)

II : 赤褐色土 ($Ta-d_2 > \text{II黒}$)

III : 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 > \text{II黒}$)

IV : 黒色土 (III黒)

V : 暗赤褐色土 ($Ta-d_2 > \text{黒色土}$)

VI : 黄褐色土 ($En-a$)

VII : 明褐色土 ($En-a$)

VIII : 暗褐色土 ($Ta-d_2 > En-a + \text{II黒}$)

IX : 明褐色土 ($En-a + Ta-d_2$)

X : 黒色土

XI : 黒色土

(遠藤香澄)

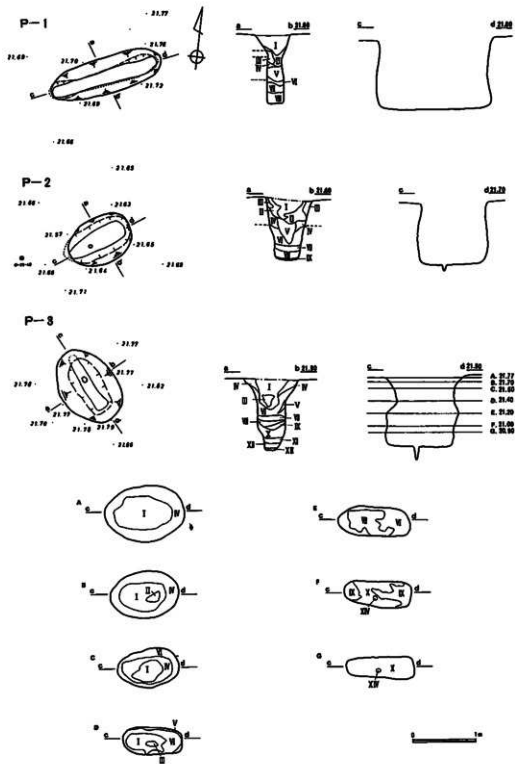


图49 P-1、2、3

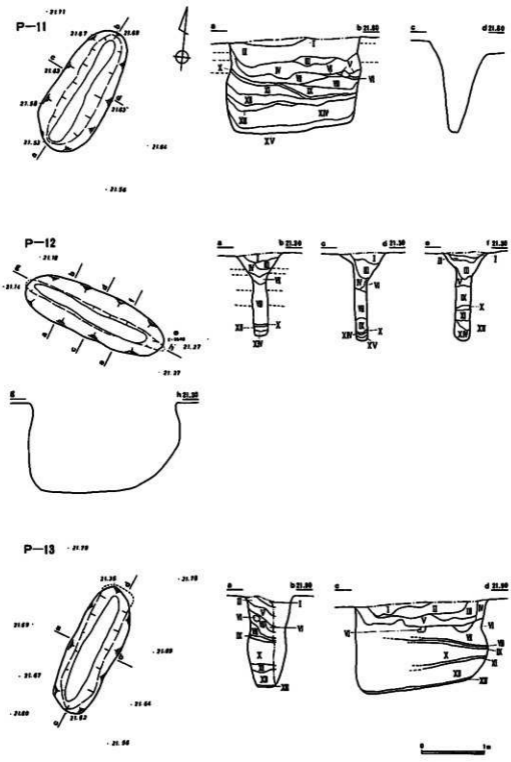


图 52 P-11、12、13

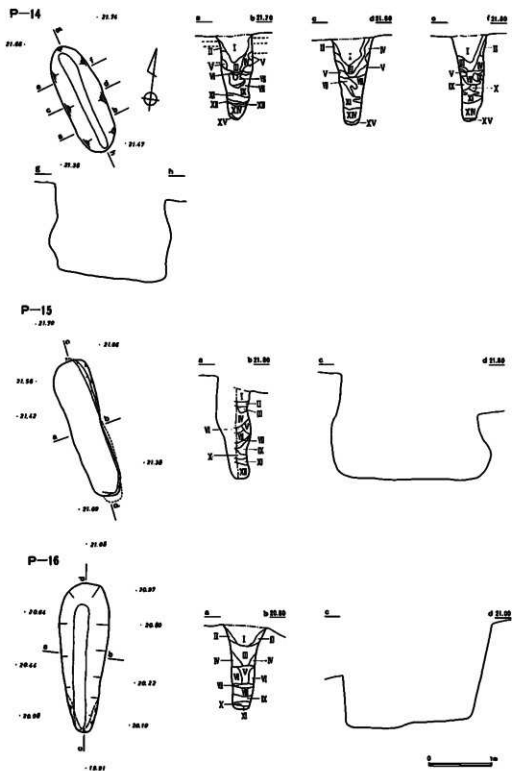


图 53 P-14、15、16

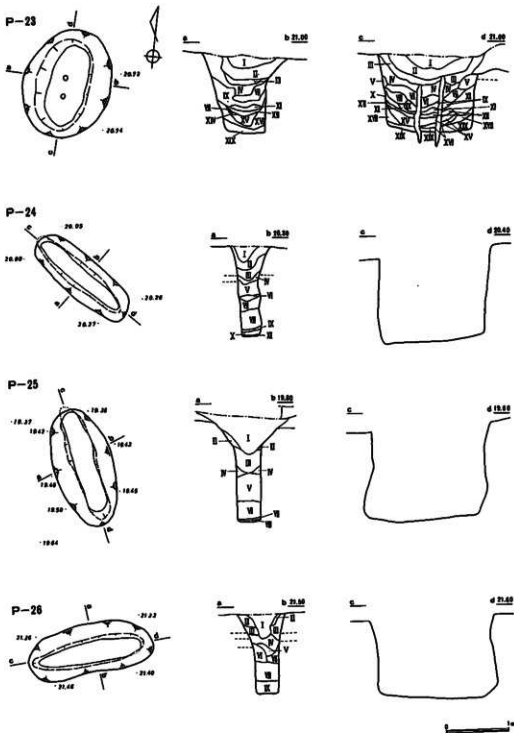


图 56 P-23, 24, 25, 26

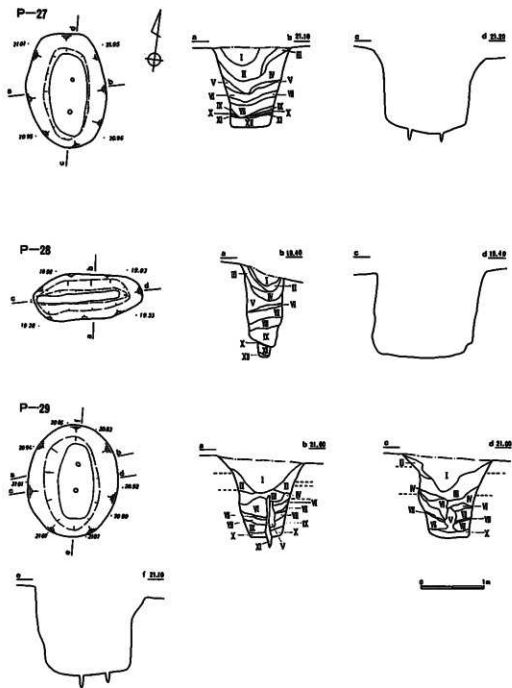


图 57 P-27、28、29

2 遺物

II黒層からは縄文時代早期に属するものを主体とする土器、石器が出土している。

II黒層の遺物

総計 10,005点

遺物名	分類	数量	遺物名	分類	数量	
土器	I b-3	125	つまみ付きナイフ	III A 5	16	
	I b-4	5,909		III A	7	
	I b-	9		III-	1	
	II a-1	68		破片	13	
	II a-2	11		スタレイバー	III B 1	8
	III b-1	2			2	7
	III c-	5			3	9
	III-	3			4	16
	IV b	7		III B	1	
	IV c	238		III-	8	
	IV-	24		破片	10	
	V a	331		石 斧	IV A 1	2
	V b	10			2	1
	V c	173			4	4
V-	13	5	8			
土器計 やじり	6,928	I A 2 a	破片		69	
			2 b		30	
			2 c	2		
			2-	3		
			3	25		
			4	5		
			5	37		
			I A	1		
			破片	32		
			やり先	3	I B 1	3
					2	2
					破片	1
			石錐類	1	II A 1	1
					2	1
3	1					
II A	1					
つまみ付きナイフ	54	III A 1	54			
		2	15			
		3	7			
		4	11			
たたき石	3	I A 1	破片	12		
			2	1		
			破片	1		
			V B 破片	1		
			擦石	9	IV A 1	9
					2	1
			石皿	3	破片	12
					VI B 1	3
			砥石	5	VI-	1
					破片	50
			石錘	4	WB 2	5
					破片	12
			コア	16	VA 2	4
					破片	1
フレイク・チップ	2,105	IX A	16			
		IX B	2,105			
使用痕・加工痕のあるフレイク	136	X A	136			
		X B	22			
使用痕・加工痕のある礫	272	礫	272			
		石器等計	3,077			

(1) 土器 (図 58・59, 図版 29)

II 黒層から出土した土器の大部分は縄文時代早期末に位置づけられるものである。他に縄文時代各時期に属するものが少数みられる。以下、昭和 51 年度以来、美沢川流域の発掘調査で用いている分類基準により記載する。

I 群 (1, 6~44)

縄文時代早期に属する土器。本類は a 類、b 類、に分けられ、b 類はさらに四つに細分される。

a 類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。本年度の調査では出土していない。

b 類：縄文、絡糸体圧痕文、組紐圧痕文、より糸文、貼付文等が施されるもの。

b-1 類：東銅路Ⅲ式に相当するもの。本年度の調査では出土していない。

b-2 類 (6~11)：コッタロ式に相当するもの。

縄文が施されたもの (6, 7)、絡糸体圧痕文が施されたもの (8)、短縄文が施されたもの (9~11) がある。8 には細砂粒が多量に含まれている。

b-3 類 (12~15)：中茶路式に相当するもの。

微隆起帯の間に短縄文が施されたもの (12, 13)、あやくり文をもつもの (14)、縄文が施されたもの (15) がある。

b-4 類 (1, 16~44)：東銅路Ⅳ式および吉野Ⅴ式に相当するもの。

16~18 は口縁部に微隆起線をもつ土器で、吉野Ⅴ式に相当するものである。微隆起線の間には短縄文が施されている。胎土に多量の細砂粒を含む。19~25, 27 は羽状構成のより糸文が施されたものである。26 にはあやくり文が施され、口縁部に短縄文がみられる。28, 29 は二本並列のより糸文をもつもので、29 の口縁部には縄線文が付されている。30~38, 40, 44 は胎土に繊維を含んだ厚手の土器で、太めの原体を用いたより糸文が特徴的である。31 は縄文とより糸文が施されている。口縁部の文様をみると、縄端の刺突をもつもの (30)、より糸文の原体を押しつけたと思われるもの (31, 32)、縄線文が施されたもの (35, 36) がある。30 は器面がていねいに研磨され、光沢をもつ。41~44 は底部および底部に近い破片で、42 には絡糸体圧痕文が付されている。1, 39 は魚の椎骨を回転した魚骨回転文が施されている土器である。1 は厚さの不均等な小型の土器で、胎土に若干繊維を含む。口縁部と胴部下半に横方向の魚骨回転文がみられる。一度に施文される長さが短かく、途切れ途切れになっている。(写真図版 29 参照) 39 は 1 に比べて整った作りの薄い土器で、鋸歯状をなすものと、横走するものが組み合わされている。

II 群 (2)

縄文時代前期に属するとみなされるもの。本群は a 類と b 類に分類される。

a 類：縄文尖底土器群。本類は二つに細分される。

a-1 類 (2)：綱文土器。

条の中はていねいに厚り消されている。胎土には多量の砂粒が含まれており、繊維の量は少ない。非常にもろい土器である。

a-2類：斜行縄文、羽状縄文などが施された土器で、中野式、春日町式に相当するもの。

胴部破片が少量出土しているが、小片で摩滅が激しいため図示していない。

b類：円筒下層式、植苗式に相当するもの。本年度の調査では出土していない。

III群 (45)

縄文時代中期に属する土器である。本群は大きくa類、b類の二つに分類される。

a類：円筒上層式。本年度の調査では出土していない。

b類：本類はさらに三つに細分される。

b-1類：天神山式に相当するもの。本年度の調査では出土していない。

b-2類 (45)：柏木川式に相当するもの。

口縁部に垂下する貼付帯をもち、その上に刺突が施されている。口唇上にもヘラ状の工具を斜めに突いた刺突がみられる。

II 鳳層の土器

番号	名称	分類	発掘区	口・底・高	備考	番号	名称	分類	発掘区	口・底・高	備考
1	深鉢	I b-4	c-65-85	17.0・4.7・13.5	魚骨刺突文	28		I b-4	d-65-69		
2	"	II a-1	f-65-30	—・—・—		29	"	"	c-65-68		
3	壺	W c	f-65-58	—・—・—	注口付?	30	"	"	c-65-67		
4	深鉢	V a	d-65-78	(31.0)・—・—		31	"	"	d-65-43		
5	浅鉢	"	d-65-69	(33.5)・8.0・14.5		32	"	"	d-65-30		
6		I b-2	c-65-86			33	"	"	d-65-89		
7	"	"	c-65-97			34	"	"	c-65-43		
8	"	"	c-65-53			35	"	"	c-65-49		
9	"	"	c-65-77			36	"	"	d-65-70		
10	"	"	c-65-56			37	"	"	d-65-53		
11	"	"	e-65-85			38	"	"	d-65-99		
12		I b-3	c-65-98			39	"	"	c-65-42		魚骨刺突文
13	"	"	e-65-20			40	"	"	c-65-29		
14	"	"	e-65-80			41	"	"	c-65-77		
15	"	"	e-65-24			42	"	"	c-65-85		
16		I b-4	e-65-32			43	"	"	c-65-47		
17	"	"	c-65-72			44	"	"	d-65-69		
18	"	"	c-65-72			45		III b-2	c-65-85		
19	"	"	c-65-32			46		W b	c-65-07		
20	"	"	c-65-86			47		W c	c-65-10		
21	"	"	c-65-83			48	"	"	d-65-61		
22	"	"	c-65-87			49		V a	d-65-65		
23	"	"	c-65-63			50	"	"	d-65-65		
24	"	"	c-65-74			51	"	"	c-65-88		
25	"	"	c-65-87			52	"	"	e-65-92		
26	"	"	c-65-53			53		V c	f-65-72		
27	"	"	d-65-99			54	"	"	e-65-28		

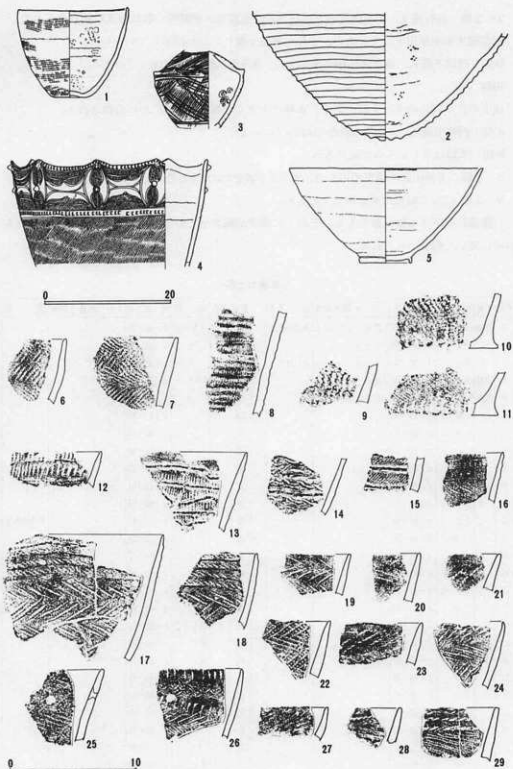


図58 II 黒層の遺物 (1)

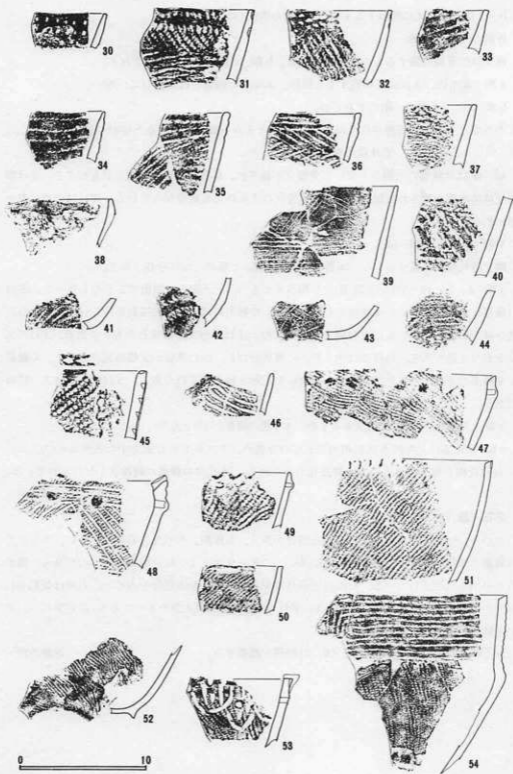


図59 II 黒層の遺物 (2)

b-3類：北筒式に類似するもの。本年度の調査では出土していない。

IV群（3、46～48）

縄文時代後期に属するもの。本類はa類、b類、c類の三つに分類される。

a類：余市式、入江式に相当する土器群。本年度の調査では出土していない。

b類（46）：手箱式に相当するもの。

内外面ともによく研磨されており、横走沈線とそれを縦に連結するS字状の沈線がみられる。

c類（3、48、49）：堂林式に相当するもの。

48、49は口縁部に内側から突いた突瘤文が施され、口唇断面は切り出し状を呈する。3は器面全体に沈線が施された壺で、内面に竹管状の工具による刺突がみられる。注口付きの土器と思われる。

V群（4、5、49～54）

縄文時代晩期に属するもの。本群はa類、b類、c類の三つに分類される。

a類（4、5、49～52）：大洞B式に相当するもの。上ノ国式に類似するものも含める。49は口縁部に内側から突いた突瘤文をもつもので、口唇上には丸棒状の工具を押し付けて細かい波状口縁が形成されている。50は縄文だけのもの、51は爪形文が施されたものである。4は三叉文をもつ土器である。口縁部はゆるやかに波状をなし、山の部分が文様の起点となる。口縁部と文様帯の下部にへら状工具を斜めに突いた爪形文様の刺突列がある。5は大形で無文の浅鉢である。

b類：大洞C₁、C₂式に相当するもの。本年度の調査では出土していない。

c類（53、54）：大洞A式に相当するものを含め、タンネトウL式を中心とするもの。

53は沈線が施されるもので、貫通孔がみられる。54には口縁部に縄線文が付けられている。

（工藤研治）

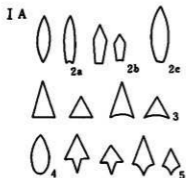
(2) 石器（図60）

やじり、つまみ付きナイフの占める割合が多く、石錘類、やり先、石鏝は少ない。やじりでは無茎で五角形のもの、有茎のものが多く、つまみ付きナイフは片面加工のものが多く、横形のもの1点出土している。石斧は完形品は少なく、破片が大部分を占める。石鏝は長軸を打ち欠いたもののみであるが、完形品はいずれも800g以上の大型のものである。頁岩製のベンダント状の石製品が1点出土している。

以下に石器の分類規準を示し、図、計測値を掲載する。

（道藤香澄）

石器の分類



〈I群〉 やじり・やり先類

A: やじり

1: 石刀鍔

2: 薄手で、柳葉形のものおよび五角形のもの

a: 柳葉形のもの

b: 五角形のもの

c: 大型のもの

3: 三角形のもの

4: 木葉形のもの

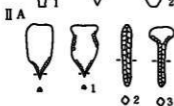
5: 基部があるもの



B: やり先

1: 明瞭な基部があるもの

2: 明瞭な基部がないもの



〈II群〉 石錐類

A: 石錐類

1: 刺突器

2: 棒状のドリル

3: つまみ部があるドリル



〈III群〉 ナイフ・スクレイパー類

A: つまみ付きナイフ

1: 片面加工で、側縁裏に表面調整のための打面があるもの

2: 1を除く、片面加工のもの

3: 片面縁辺のみに加工があるもの

4: 両面加工のもの

5: つまみ部のみが作り出されたもの

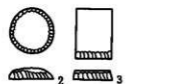


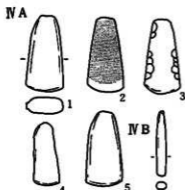
B: スクレイパー

1: 石べら

2: ラウンド・スクレイパー

3: エンド・スクレイパー





〈IV群〉 石斧類

A: 石斧

- 1: 擦り切り手法によることがあきらかなもの
- 2: ベッキングによって整形されたもの
- 3: 打ち欠きによって整形されたもの
- 4: 棒状礫に刃部のみが設けられたもの
- 5: 全面磨製のもの

B: 石のみ

〈V群〉 たたき石・台石類

A: たたき石

- 1: 棒状礫の先端もしくは、両先端にたたき痕があるもの
- 2: 扁平礫の周辺にたたき痕があるもの
- 3: 扁平礫の表、裏面にたたき痕があるもの

B: 台石

〈VI群〉 擦石・石皿類

A: 擦石

- 1: 角柱状の礫の後に擦り面があるもの
- 2: 扁平礫の側縁に擦り面があるもの
- 3: 半円形に打ち欠かれた礫の弦に擦り面があるもの
- 4: 北海道式石冠

B: 石皿

〈VII群〉 石鏝・砥石類

A: 石鏝

B: 砥石

- 1: 使用面に溝があるもの
- 2: 使用面が平滑なもの

〈VIII群〉 石錘

- 1: 4カ所に打ち欠きがあるもの
- 2: 長軸の両端に打ち欠きがあるもの
- 3: 短軸の両端に打ち欠きがあるもの

〈IX群〉 コア・フレイト類

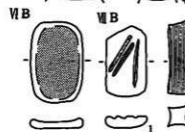
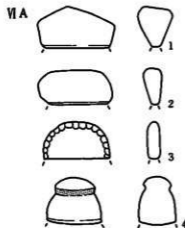
A: コア

B: フレイト・チップ

〈X群〉 加工痕・使用痕のあるフレイト、礫

A: 加工痕・使用痕のあるフレイト

B: 加工痕・使用痕のある礫



II 黒石の石器

番号	名称	分類	発掘区	大きさ (cm)			重さ(g)	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
1	やじり	IA 2 a	c-65-52	2.5	1.0	0.3	0.7	Obs.	
2	"	"	f-65-57	3.8	1.3	0.2	1.7	"	
3	"	"	d-65-50	4.0	1.2	0.3	1.3	"	
4	"	IA 2 b	c-65-74	1.6	0.8	0.2	0.2	"	
5	"	"	d-65-14	1.9	0.9	0.2	0.2	"	
6	"	"	c-65-52	2.1	1.0	0.3	0.4	"	
7	"	"	f-65-24	2.2	1.0	0.1	0.5	"	
8	"	"	c-65-95	2.5	1.1	0.2	0.4	"	
9	"	"	c-65-75	2.6	1.0	0.2	0.4	"	
10	"	"	c-65-24	3.2	1.3	0.2	0.6	"	
11	"	IA 3	d-65-94	1.5	1.5	0.3	0.4	"	
12	"	"	f-65-32	1.9	1.3	0.2	0.5	"	
13	"	"	d-65-33	1.9	1.4	0.2	0.5	"	
14	"	"	f-65-48	2.2	1.6	0.3	0.1	"	
15	"	"	f-65-71	2.7	1.8	0.3	1.2	"	
16	"	"	e-65-04	3.0	1.5	0.25	0.9	"	
17	"	IA 2 c	c-65-53	4.6	1.7	0.4	(3.3)	Che.	
18	"	IA 4	c-65-42	2.5	1.3	0.4	1.3	Obs.	
19	"	IA 5	d-65-59	1.8	1.1	0.3	0.3	"	
20	"	"	c-65-41	2.0	1.0	0.3	0.7	"	
21	"	"	c-64-59	2.3	1.3	0.3	0.7	"	
22	"	"	d-65-78	2.5	0.9	0.4	0.7	"	
23	"	"	f-64-48	2.9	1.3	0.4	0.8	"	
24	"	"	f-65-04	3.0	1.5	0.4	1.5	"	
25	"	"	f-65-10	3.7	2.0	0.5	3.3	"	
26	やり先	IB 1	c-65-98	4.6	2.5	0.7	5.8	"	
27	"	"	d-65-89	8.9	3.1	0.8	22	Sh.	
28	"	IB 2	d-65-43	4.1	1.8	0.6	3.3	Obs.	
29	石鎌	II A 1	d-65-43	2.9	1.9	0.8	3.7	Che.	
30	"	II A 2	d-65-99	4.3	1.5	0.5	3.8	"	
31	"	II A 3	c-65-32	3.1	2.4	0.7	5.3	Sh.	
32	"	II A	c-65-86	6.2	2.4	0.9	14.3	Che.	
33	つまみ付きナイフ	III A 1	f-65-07	8.4	2.6	0.6	19	"	
34	"	"	d-65-62	7.6	2.4	0.8	16	Obs.	
35	"	"	f-65-25	6	3.2	0.5	9.5	Sh.	
36	"	"	c-65-82	4.9	2.3	0.5	5.9	Che.	
37	"	"	e-65-04	4.3	3.1	0.6	10	"	
38	"	"	d-65-43	3.7	2.5	0.5	3.8	"	
39	"	III A 2	d-65-32	4.1	3.1	0.6	3.3	Sh.	

番号	名 称	分 類	発 掘 区	大 き さ (cm)			重さ(g)	材 質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
40	つまみ付きナイフ	ⅢA 2	e-65-50	8.0 × 2.7 × 0.8	20	Che.			
41	"	"	c-65-39	7 × 1.9 × 0.7	9.8	"			
42	"	ⅢA 4	f-65-10	5.5 × 2.6 × 0.6	6.9	Sh.			
43	"	"	c-65-12	5 × 2.1 × 0.5	6.0	"			
44	"	"	c-65-73	4.2 × 1.9 × 0.5	3.1	Obs.			
45	"	ⅢA	c-65-77	5.2 × 2.4 × 0.6	7.6	"			
46	"	ⅢA 4	c-65-78	3.3 × 1.7 × 0.4	2.5	"			
47	"	"	c-65-12	(4.3) × 2.5 × 0.5	8	Aga.			
48	"	"	c-65-43	2.7 × 1.4 × 0.8	1.3	Obs.			
49	"	"	c-65-43	2 × 1.4 × 0.3	0.7	"			
50	"	ⅢA 5	c-65-24	4.1 × 2.7 × 0.6	8	"			
51	"	"	c-65-42	3.8 × 2.3 × 0.9	7.2	"			
52	"	"	d-65-12	4.2 × 6.7 × 0.5	13.5	Che.			
53	スクレイパー	ⅢB 1	c-65-53	2.5 × 1.8 × 0.5	2.5	"			
54	"	"	c-65-59	3.3 × 2.1 × 0.5	4.8	"			
55	"	"	e-65-47	3.8 × 2.2 × 0.4	5.2	"			
56	"	"	d-65-54	5.8 × 2.8 × 0.5	10.7	"			
57	"	ⅢB 2	d-65-64	3.7 × 3.6 × 1.5	23	Obs.			
58	"	"	d-65-61	3.3 × 3.4 × 1.3	4.2	"			
59	"	"	d-65-61	3.6 × 2.6 × 1.0	8.9	"			
60	"	ⅢB 3	d-65-55	3.9 × 2.8 × 1.0	10	"			
61	"	"	d-65-63	9.5 × 3.9 × 1.7	68.4	Che.			
62	"	ⅢB 4	c-65-02	(3.7) × (5.1) × (1.4)	(22)	"			
63	"	"	d-65-05	3.5 × 1.9 × 0.6	4.1	Obs.			
64	石 斧	ⅣA 2	c-65-63	(6.6) × 5.0 × 2.1	(110)	Gr-Mud.			
65	"	ⅣA 5	f-65-92	(6.2) × 4.7 × 2.4	(122)	"			
66	"	"	e-65-56	(12.3) × 4.8 × 1.5	(144)	"			
67	"	"	f-65-72	(11.2) × 3.3 × 1.5	(86)	"			
68	"	"	c-65-94	(8.4) × 4.2 × 2.7	(170)	"			
69	"	ⅣA 4	d-65-88	11.8 × 8 × 3.2	435	Ser.			
70	た た き 石	ⅤA 2	d-65-40 d-65-33	(6.1) × 9.7 × 2	140	Sa.			
71	擦 石	ⅥA 1	c-65-43 c-65-86	(13.4) × 7.2 × 8.2	1,000	And.			
72	砥 石	ⅦB 2	c-65-86, -87 c-65-77, -75	— × — × 1.9	(370)	Sa.			
73	"	"	d-65-54	(9.4) × 3.7 × 2.7	(120)	"			
74	石 鏟	ⅧA 2	f-65-76	12.2 × 10.7 × 5.3	(880)	"			
75	"	"	f-65-96	(14.3) × 9 × 5.2	(1,330)	Phy.			
76	コ ア	ⅨA	d-65-50	5.4 × 4 × 2.7	48	Che.			
77	石 製 品	"	c-65-88	4.2 × 3.3 × 0.8	8.1	Sh.			

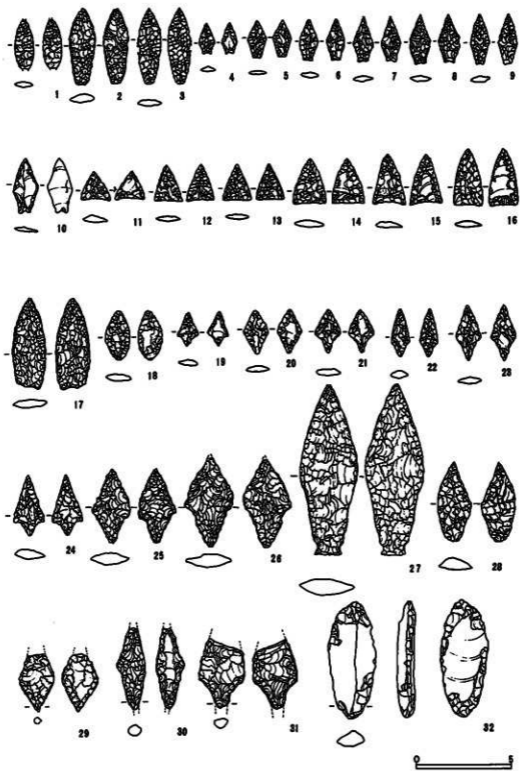


図60 II 風層の遺物 (3)

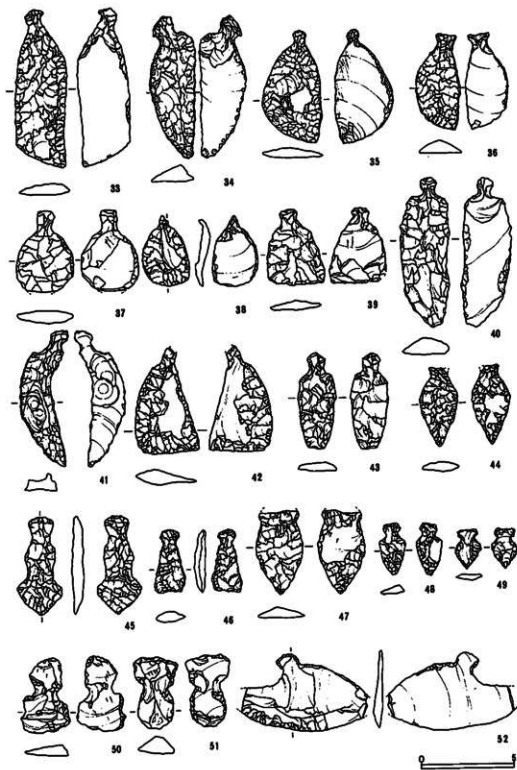


図61 II黒層の遺物(4)

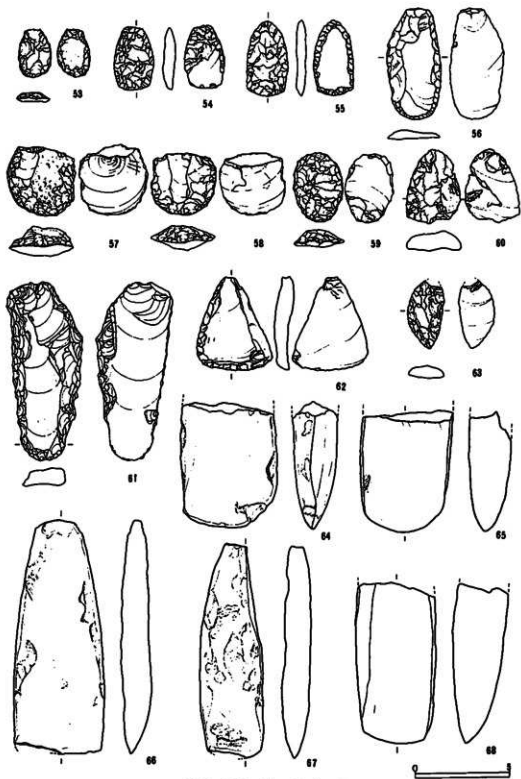
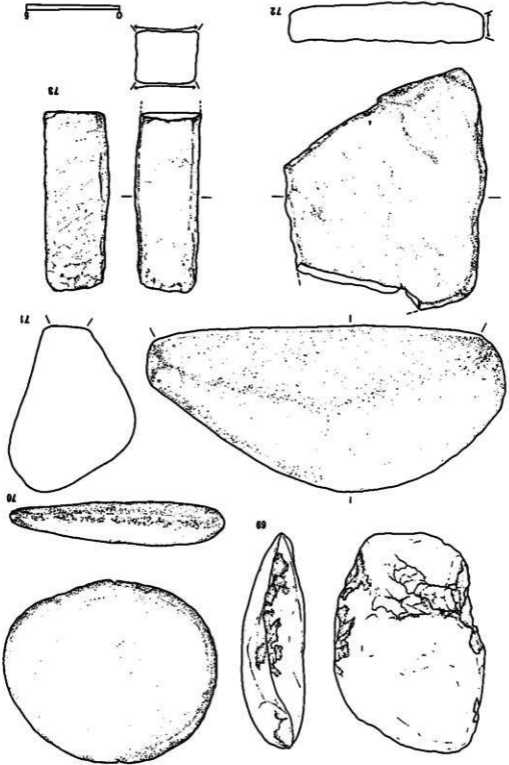


図62 II黒層の遺物(5)

図 63 II 層の遺物 (6)



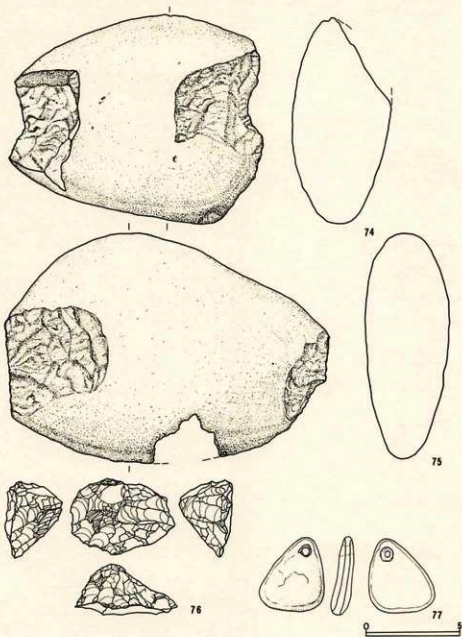


図64 II 黒層の遺物 (7)

写 真 图 版



1 遺跡遠景 (美沢川から美々8遺跡を望む)



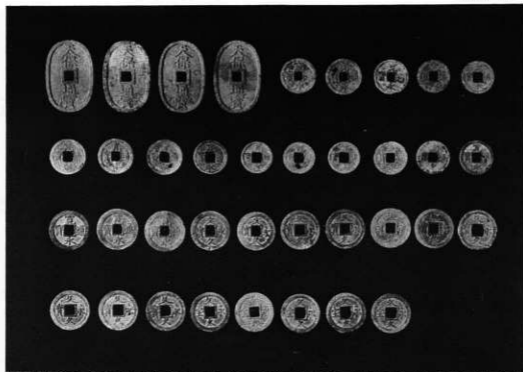
2 調査状況 (I黒層)



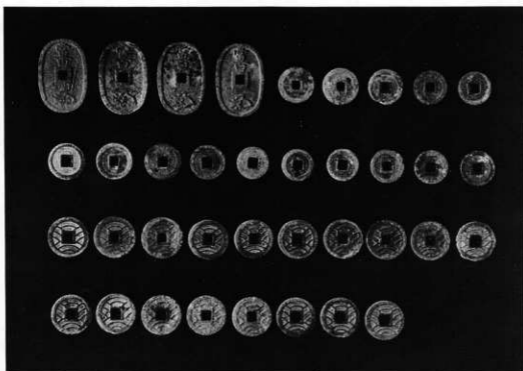
1 旧室蘭街道



2. 古銭等の出土状況（表土）



1 古銭 (表)

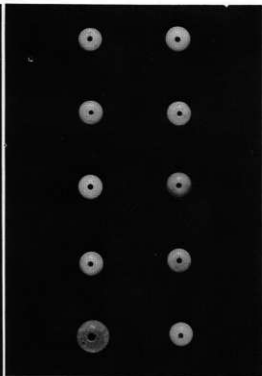


2 古銭 (裏)

表土の遺物 (1)



1 握鉄



2 ガラス玉



3 ナイフほか

表土の遺物(2)



1 染付小皿



3 徳利

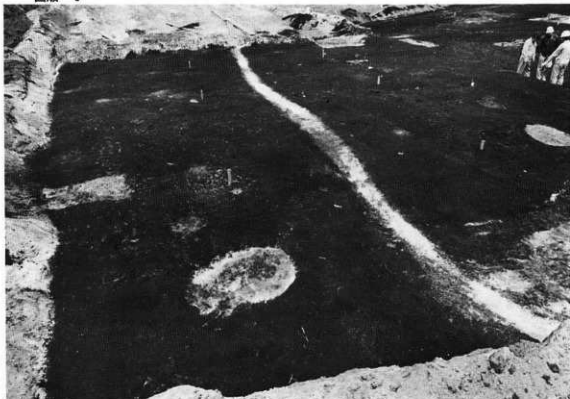


2 染付茶わん



4 鉄先ほか

表土の遺物 (3)



1 道跡・発掘前 (I 黒層上面)



2 道跡・発掘後



1 柱穴列 (I黑層上面)



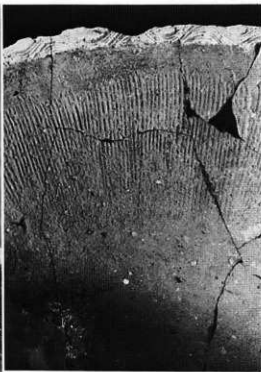
2 片口鉢出土状況 (I黑層上面)



1 片口鉢



2 片口のアップ

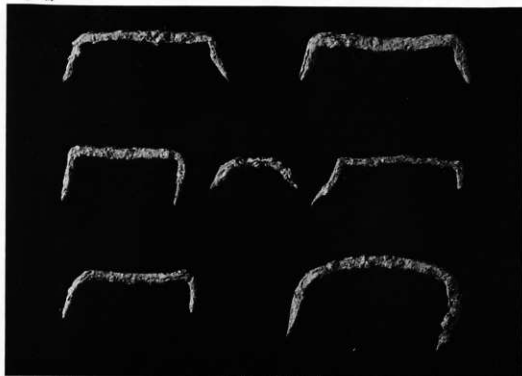


3 摺面

I 黒層上面の遺物 (1)



1 釘

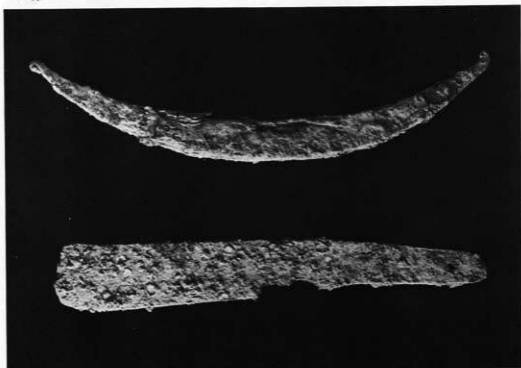


2 カスガイ

1 黒層上面の遺物 (2)



1 弁



2 鉞ほか

1 黒層上面の遺物 (3)



1 小札



4 キテ (表)



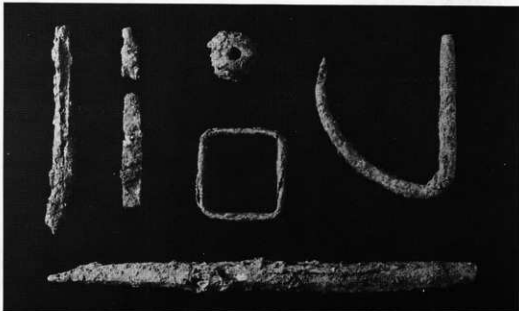
2 銅製品



5 キテ (裏)



3 古銭



6 マレックほか

I 黒層上面の遺物 (4)



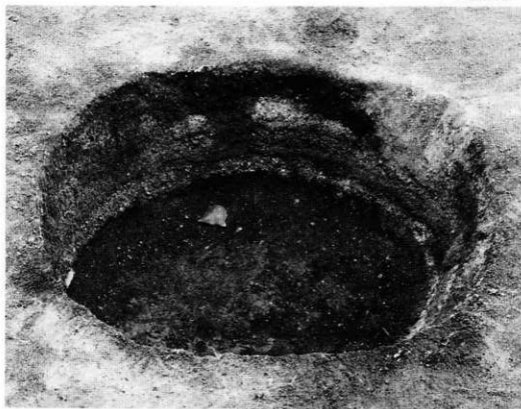
1 調査状況 (I 黒層)



2 集中礫の出土状況 (I 黒層)



3 集中礫の出土状況 (I 黒層)



1 土坑 P-8 (I 黒層)



2 土器の出土状況 (I 黒層)



3 実測風景 (I 黒層)



1



2



3



4

I 黒層の遺物 (1)



1



2



3



4

I 黒層の遺物 (2)



1



2



3



4

I 黒層の遺物 (3)



1



2



3



4

1 黒層の遺物 (4)



1



5



2



6



3



7



4



8

I 黒層の遺物 (5)



1



5



2



6



3



7



4



8

I 黒層の遺物 (6)



1



2



3



4

I 黒層の遺物 (7)



1



2



3



4

I 黒層の遺物 (8)



1



2



3



4

I 黒層の遺物 (9)



1



5



2



6



3



7



4



8

I 黒層の遺物 (10)



1



2

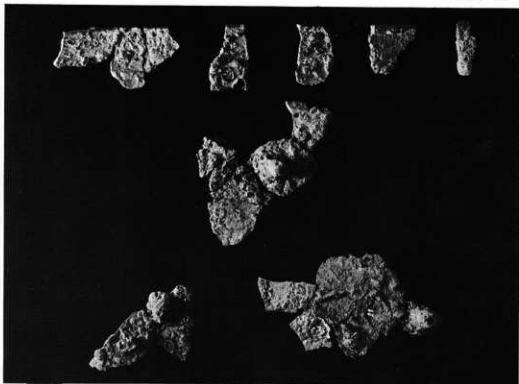


3



4

I 黒層の遺物 (11)



1 鉄鍋



2 土すい

1 黒層の遺物 (12)



1 足あとと調査風景（Ⅱ黒層）



2 足あとと配列（Ⅱ黒層）



3 足あとと剥ぎ取り（Ⅱ黒層）



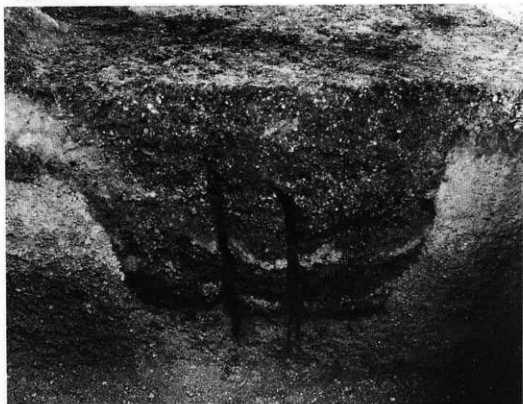
1 Tビット列・溝状タイプ (II黒層)



2 Tビット・P-12断面 (II黒層)



3 Tビット・P-16 (II黒層)



1 Tピット・P-23断面 (II黒層)



2 Tピット・P-22断面 (II黒層)



3 Tピット・P-18 (II黒層)



1



3



2



4

1 Tピット・P-3の水平発掘(II黒層)



5 II黒層の遺物(魚骨文土器)



6 魚骨文土器(拡大)

この報告書は、札幌開発建設部のご了解を得て増刷したものです。



実費価格1100円（郵送料金別途）

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第7集

美沢川流域の遺跡群V

—新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和57年3月31日 発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター

064 札幌市中央区南15条西17丁目

TEL. (011)561-0067

印刷 興国印刷株式会社

札幌市西区手稲東3南1 TEL. (011)661-2221



10016602

北海道埋蔵文化財センター